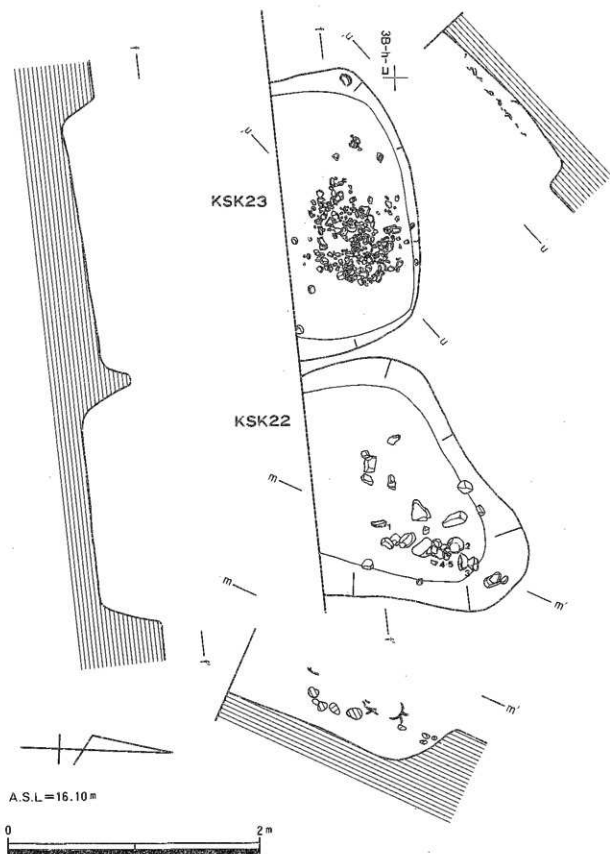
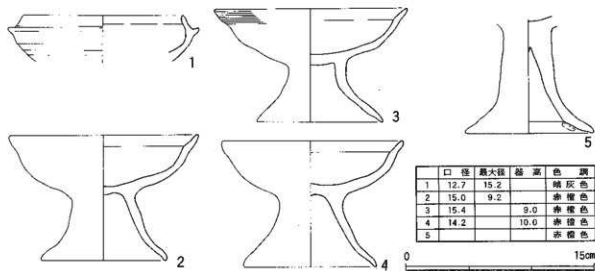
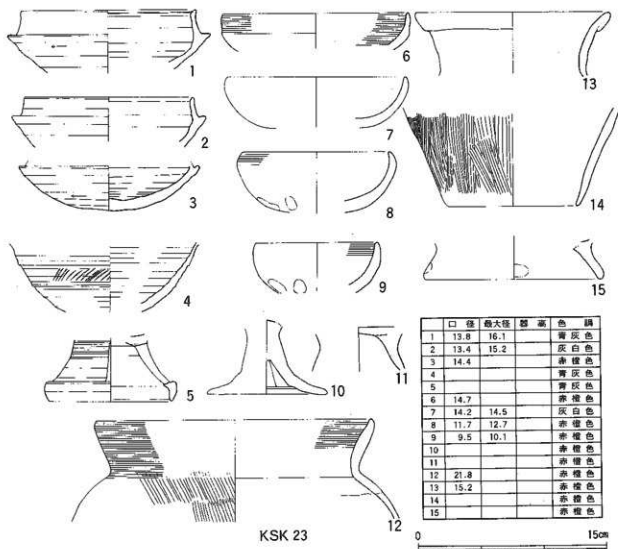




第117图 KSK22・23实例图



KSK 22



KSK 23

第 118 図 KSK22・23出土土器実測図

ている。最大径は胴部上位にあり、底部は平底である。甕F類に分類される。

甕17は把手が付く直胴型のものである。約1/3が残存していた。甕C類に分類される。

K第Ⅲ期(6)に対応する遺物である。

K S X 4 (第119図)

3 B-c区で甕を主体とした土器群をK S X 4とした。甕類のみが廃棄されたものと考えられる。

出土遺物(第120図)

甕10~15はいずれも残存率が低いものである。口縁部は「く」の字形に屈曲させている。胴部は丸味があると思われる。甕B₁又はB₂類に分類されるものでK第Ⅲ期(2)又は(3)に対応するものである。

K S X 7

3 C-e区で出土した土器をK S X 7とした。これらの土器は奈良時代の遺構検出時に出土した。

出土遺物(第120図 1~6)

模倣杯身1は口縁部が直立するもので、口縁部と体部との境にふくらみがある。

杯身2~4は口縁部が直すぐに開くものと、直立するものがある。

甕は口縁部5と台付甕の台部6がある。6は底径14.1cm、接合部径10.2cmを測る。器高が低く安定している。台部の端部には折り返しがみられない。

K S X 8 (NSD21出土遺物)

NSD21は2 A区~2 C区を東から西へ流れる奈良時代の溝である。(NSD21の遺構については奈良時代編に記載してある。)この溝から出土した土器をK S X 8とした。

出土遺物(第120図 7・8)

杯蓋7は口径10.7cmを測る。天井部はヘラ削り調整ののちでいいなデ調整が全面に行われている。口縁部と天井部との境に沈線がつけられている。杯蓋G₁類に分類される。

甕8は口縁部と底部を欠損する。肩部は平坦につくられ、胴部には沈線がつけられている。その沈線の上に突出した注口がつけられている。K S D 9の甕(第55図 26)と同形態のものである。

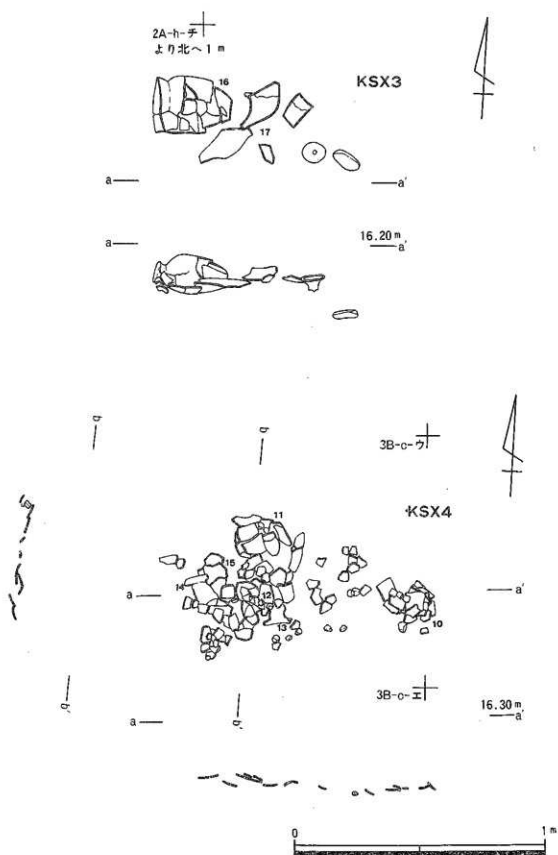
これらの須恵器はK第Ⅲ期(7)の時期のものであるが、NSD21からはK第Ⅲ期(7)の時期の遺物がほぼ全域で出土している。ほとんどがK S D 21の最下位で出土していることから、K S D 21は古墳時代の最終期から使用されていた可能性も考えられる。

K S X 9 (第120図 9)

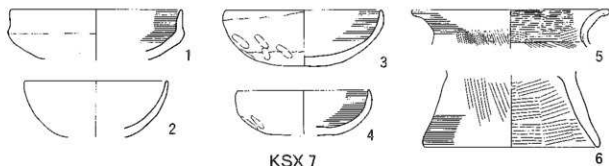
3 B-i区で単独で出土した短頸壺をK S X 9とした。底部を欠損するがほぼ完形である。直立する口縁部端部にはゆるやかな段がみられる。胴部は3本の沈線が入れられ、細かい波状文が2段つけられている。胴部下半は不定方向のヘラ削りによって整形されている。

K S X 10 (第96図 P.L.30・46)

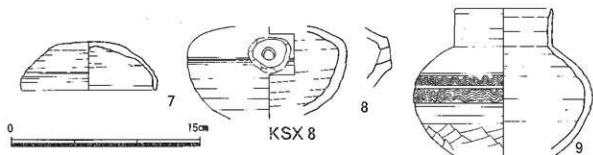
2 A区~2 C区で検出された遺構である。2 A区では幅約0.8mで東西方向で検出され、さらに2 C区へと伸びている。2 B区に入るとT字型に枝分かれして南へと伸びている。(幅0.9~1.2m) 2 B-eでは南へ大きくテラス状に張り出し(長さ約8m、幅約3m)、2 C-a区では南へ2ヶ所張り出しでK S D 29南北溝群と重なっている。この遺構は第1面~第4面で検出されており、土層は褐灰色粘土層の単一土層であり、無遺物層であった。K S D 29の南北溝群に切られて検出されていることから、K S D 29より古い時期のものである。2 A区で検出されたK S X 3の土器群の時期と考えるとK第Ⅲ期(7)に対応する。2 A区ではこのK S X 10でかこまれた範囲での遺構の検出は少なかった。このことから水田跡を囲む畦状遺構又は道状遺構とも考えられ、K S D 29の南北溝群と重なって検出されていることから、この地域が古墳時代後半期から奈良時代にかけて農耕地であった可能性が考えられる。



第119図 KSX3・4実測図

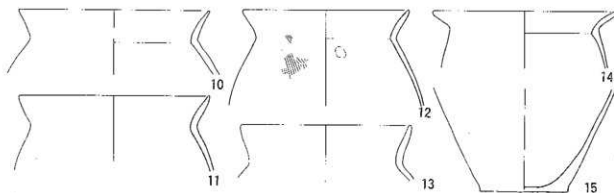


KSX 7

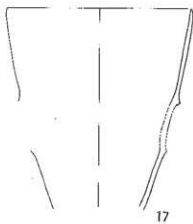
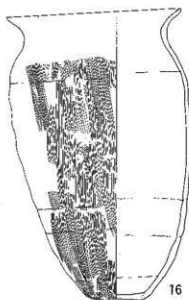


KSX 8

KSX 9



KSX 4



KSX 3

口	径	最大径	器	高	色	明
1	13.6	13.9			赤褐色	
2	11.4				赤褐色	
3	12.4	12.6	4.4		赤褐色	
4	10.4	10.8			赤褐色	
5	15.6				赤褐色	
6					赤褐色	
7	10.7	10.9	3.9		灰白色	
8		12.7			灰白色	
9	7.7	14.3			灰白色	
10	20.1				赤褐色	
11	20.1				赤褐色	
12	17.5				赤褐色	
13	18.0				赤褐色	
14	19.2				赤褐色	
15	18.4				赤褐色	
16	19.4	18.8	30.0		赤褐色	
17	19.5				赤褐色	



第120图 第Ⅲ层出土土器实测图

第Ⅷ章 その他の遺物

第1節 土製品 (第121図 PL. 73)

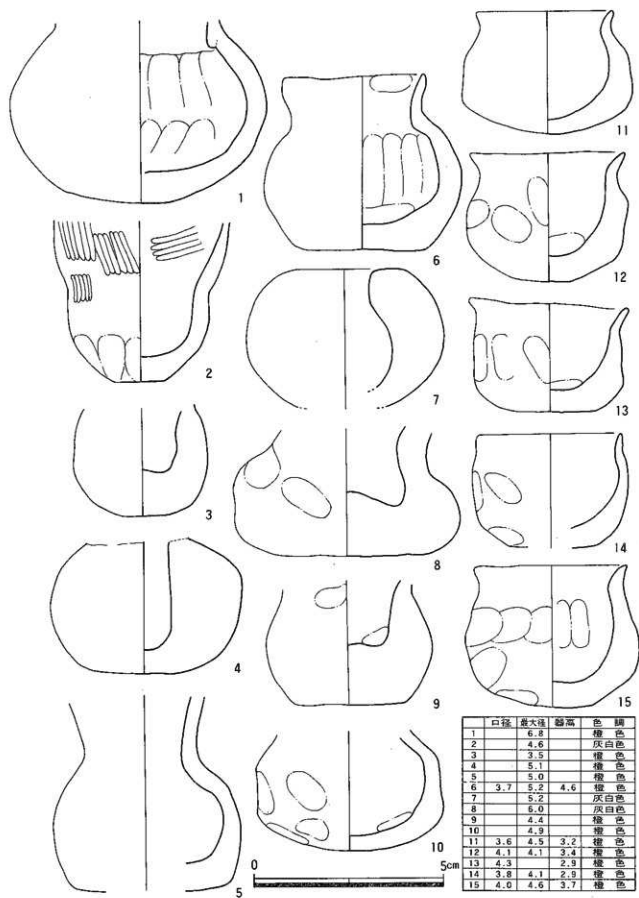
古墳時代の上製品としては小型手づくね土器(ミニチュア土器)が出土している。他の土製品の出土はなかった。

小型手づくね土器

小型手づくね土器は15点を図化することができた。遺構から出土したものはなく、供伴遺物のあったものもなかった。10～15は3 B-b区で一括して出土したものである。

- 1 3 H-d区出土。最大径6.8cmを測る。胴は丸く、底部は丸底である。口縁部を接合した痕がみられる。内面には指頭痕がのこる。
- 2 3 H-g区出土。外に開く口縁部と胴部との間にくびれがみられる。底部は平底であり、内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。埴型土器の模倣であろう。
- 3 2 E-i区出土。口縁部を欠損する。丸底で厚手の土器である。
- 4 3 D-e区出土。最大径5.1cm。胴部上面は口縁部を接合させるため平坦にされているが、口縁部は欠損している。内部に直径1.8cm程の穴があげられている。胴は丸く、底部は平底である。
- 5 3 C-d区出土。頸部がくびれ、口縁部は開いているが、口縁部はほとんど欠損する。平底である。ひずみが大きい。
- 6 2 D-a区出土。完形であり、外にわずかに開く短かい口縁部をもつ。胴部は丸く、平底である。口径3.7cm、器高4.6cmを測る。内面には、指頭痕がのこる。
- 7 2 D-d区出土。最大径5.2cmを測るほぼ球型の土器である。平坦にした口縁部は完結している。底部を欠損する。内面には入口幅1.8cm程の穴があげられ、中で広がっている。小型土器以外の目的でつくられた可能性もある。
- 8 2 C-e区出土。ひずみの大きい土器である。上部位部分を欠損する。底部は平底である。
- 9 3 C-e区出土。外に開くと思われる口縁部はほとんど欠損している。平底である。
- 10～15 3 B-b区から6個体が出土した。10は口縁部を欠損する。丸底で胴部にはひずみがある。11はひねり出した口縁部をもち、丸底である。12は胴は丸くつくられ、丸底である。13は口縁部は短かく、平底で胴にはふくらみがない。14は直立する短かい口縁部をもち平底である。15はひねり出してつくられた口縁部をもち丸底で、胴にも丸味がある。
- 3 B-b区で出土した小型土器はb-1区の水溝設営に伴って出土したものでくわしい出土状態は不明であるが、一括性の高いものと考えられる。

これらの遺物の時期については出土地区、出土状況、形態の分類等によって検討されるべきであろう。1・2の出土した3 H区ではK第Ⅰ期・第Ⅱ期の遺物の出土が多くみられた。又、2の土器にはヘラミガキ調整が内外面に施されていることからK第Ⅱ期の遺物と考えて良いだろう。6は単独で出土したものであるが、形態的にはK第Ⅲ期のものと考えられる。10～15の3 B-b区で出土した遺物は、口径や器高もほぼ同じであり形態的にも同じのものと考えられる。3 B区ではKSD25をはじめとしてK第Ⅲ期の遺構が多く検出されていることや、遺物の形態からK第Ⅲ期のものと考えられる。これらの遺物は調査区の境で検出されたため十分な調査ができなかったが、祭祀的な遺構に伴う遺物であろう。4・7は他の遺物に比べると非常に焼成が良い。粘土塊に直接穴をあけて製作されたもので形態的にも「手づくね」とは異なるものである。小型土器以外のものである可能性もある。



第121图 小型土器实测图

第2節 建築材、木製品 (第122図 1～24 P.L.76・77)

古墳時代の遺構で木質遺物を出土した遺構は少なく、KSD2、KSD7、KSD8A・Bに限られる。これらの溝状遺構のうち古墳時代の遺物のみを出土した遺構はKSD2だけであり、KSD7、KSD8A・Bは上面において奈良時代の遺物が出土した遺構であった。そのため木質遺物の製作、使用された時期を求めることは難しい問題であった。KSD7では古墳時代の遺物と奈良時代の遺物は上層部と下層部とに離れて出土し、下層の木質遺物に古墳時代の土器が相伴していることから下層の物は古墳時代の木質遺物であることが言えた。KSD8A・Bでは上層的に古墳時代・奈良時代の区別が扱えられないものもあり、それぞれの遺物の時期は個別の出土状態等で決めたものである。ここでは明らかに古墳時代の木質遺物と考えられるもののみを扱うこととし、時期の不明な物については奈良時代編で扱うことにしたい。

古墳時代の木質遺物の出土は全体的に少なく、木筒状木製器7点、鋤1点、鎌1点、建築材2点、杭6点、その他9点の計26点にとどまった。なお、KSD8Aではこの他に鋤が1点出土しているが、相伴遺物から時期を決めることができなかった。そのためこの鋤については奈良時代編(第160図29)で扱うことにしたが、古墳時代の鋤である可能性も高い。これらの木質遺物は破損していたり保存状態の悪いものが多く、それらの使用目的を十分確かめられないものが多かった。ここでは出土遺構ごとにもまとめて述べたい。なお、木質遺物の樹種同定については国立科学博物館の山内文先生にお願いしたものを自然科学編に収録した。また、坂尻遺跡周辺の植物環境については牧野標本館の榎山泰一先生に書いていただいたものを自然科学編に収録してある。

KSD7出土木製品 (第122図 1～4)

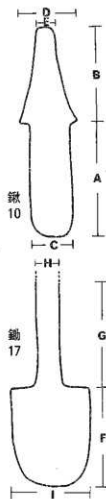
建築材 1 (サカキ) 現存全長274cm、最大幅13cmを測る。溝の底に流れ方向に従って横たわった状態で出土した。全体に保存状態が悪く加工等十分見ることができなかったが(P.L.76-1)、先端部には幅6cmの範囲に狭り加工がみられ、5cm程度の刃痕がのこる。端部には面取り加工された痕を見ることができる。加工された部分は火を受けて焦がされている。頭先の部分は欠損しているようであるが、保存状態が悪く加工痕等見ることができない。頭先部分より68cm程のところの小杭2が組み込まれて出土している。この小杭は溝の中で横たわっていた建築材1に垂直に差し込まれた状態で出土したものである。この小杭が差し込まれていたホゾ穴は建築材の側面に近いところを円形に穿ったもので、出土時には小杭が入っていたために外にふくれた状態になっていた。このホゾ穴の内面はなめらかであったが木の「節」ではなかった。

小杭 2 (カシ) 1の建築材に接合された状態で出土した。現存長20.0cm、直径2.3cmを測る。頭先部分はわずかに加工痕がみられるが、杭先部分は欠損するため全長は不明である。表皮は残っていないが自然木とみられる。1の建築材のホゾ穴に差し込まれていた部分には湾曲がみられる。

小杭 3 (ヤナギ) 1の建築材の直下より出土した。現存長16.5cm、直径2.2cmを測る。先端部は一方から斜角より切断して尖らせてある。頭先は欠損するため全長は不明である。2の小杭とはほぼ同じ大きさである。

1の建築材は柱材として使用されたものと考えられる。2及び3の小杭はこの柱材に伴う何らかの建築材であろう。これら3点の部材の樹種が異なり、加工も粗いことからある程度暫時的な建築物の部材であったと思われる。これらの木質遺物を出土したKSD7からはK第Ⅲ(3)期に比定される土器が隣接して出土した。このことからこの木質遺物も7世紀初頭のころの遺物と考えられる。

杭先 4 (ヒノキ) 柱目材。現存長13.0cm、幅4.0cmを測る。断面形状が長方形の角材で4方向から面取りされて杭先をつくっているが、杭先以外を欠損する。



加工板材 5 (イヌマキ) 榎目材。現存長4.0cm、幅4.0cmを測る。現存する厚さ0.8~1.2cmである。加工材の一部が剥がれたものと思われるが、現存する3面にはいいねいな加工が施され表面は滑らかである。裏面、下方端部は欠損する。用途不明。

KSD 7のこれらの木質遺物はK第Ⅲ期③の上器と共伴して出土したものである。

KSD 8 B出土木製品 (第122図 6~16)

もや材 8~9 (ヒノキ) 細長い棒状木製品で現存長は9.5~15.5cm程である。それぞれ不規則な方形、長方形を断面とする加工が施されている。9は一端のみを欠損するが、6~8はいずれも両端部を欠損するものである。6は端部に火を受けて焦げた跡がみられる。9の一端には斜め方向の加工痕が見られる。製作時の使用用途は不明であるが、もや材として転用されたものであろう。

鉄 10 (カシ) 榎目材の着柄式鎌。全長34cm、厚さ1.2cm (A)~1.5cm (B)。A=20.0cm、B=14.5cm、C=7.5cm、D=3.7cmを測る。Aの基部付近を欠損しているが、2F~h区でA・B部分がつながった状態で出土している。表裏ともいいねいな加工が施されている。着柄式のカシバ状である。類例としては、奈良期の鉄とされている福岡市拾六町ツジ遺跡出土のものや、弥生後期~古墳初期の滋賀県服部遺跡出土のもの、5世紀末葉とされている同県中平遺跡出土のものなどがあげられるが、これらの鉄はいずれもAの基部がふくらんでおり、いかにもカシのような形であるのに対して、10の鉄はAの基部より先端部へと直線的に移行している。Bの端部は刀子等の工具によって

細かい加工が施されており、丸くなっている。Aの片面には使用痕と見られる条線が無数にみられる。

板材 11 (カヤ) 榎目材。現存全長19.0cm、厚さ2.5cm程を測る。断面形状は菱形で、端部付近には1.5cm程の単位の加工痕がみられる。用途は不明である。

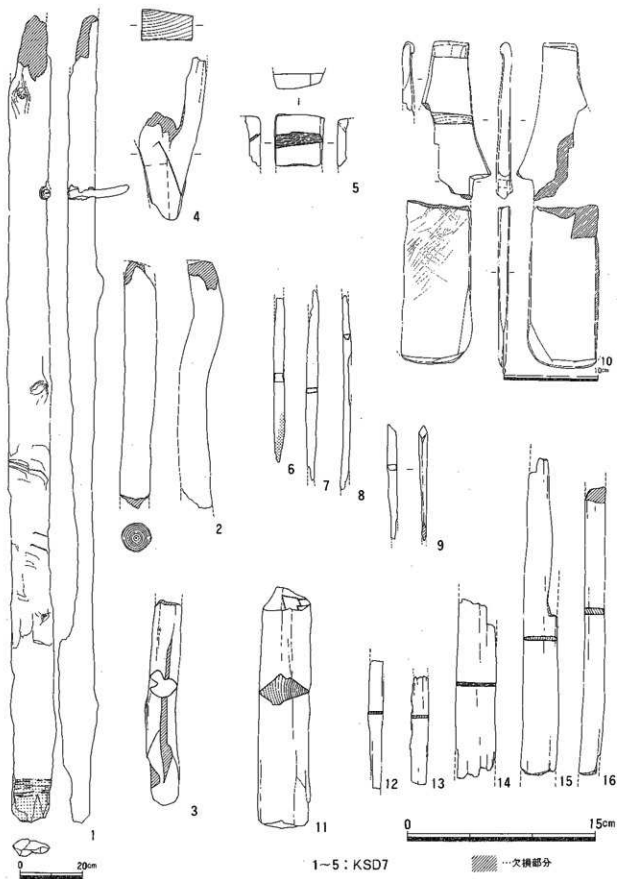
木筒状木製品 12~16 (ヒノキ) 14以外は榎目材である。12は残存長10.0cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る。両端部とも欠損する。13は残存長8.5cm、幅1.5cm、厚さ0.2cmを測る。一方の端部のみ欠損。14は残存長14.2cm、幅3.2cm、厚さ0.2~0.3cmを測る。両端部とも欠損。15は残存長25.0cm、幅2.7cm、厚さ0.3cmを測る。両端とも欠損。16は残存長23.0cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmを測る。保存状態が悪いものが多いが、いずれも表裏ともいいねいな加工が施されている。墨痕等は認められなかったが、木筒状の木製品と考えられる。奈良時代の遺物である可能性もある。

KSD 8 BではK第Ⅲ(4)期の土器がこれらの木質遺物と共伴している。

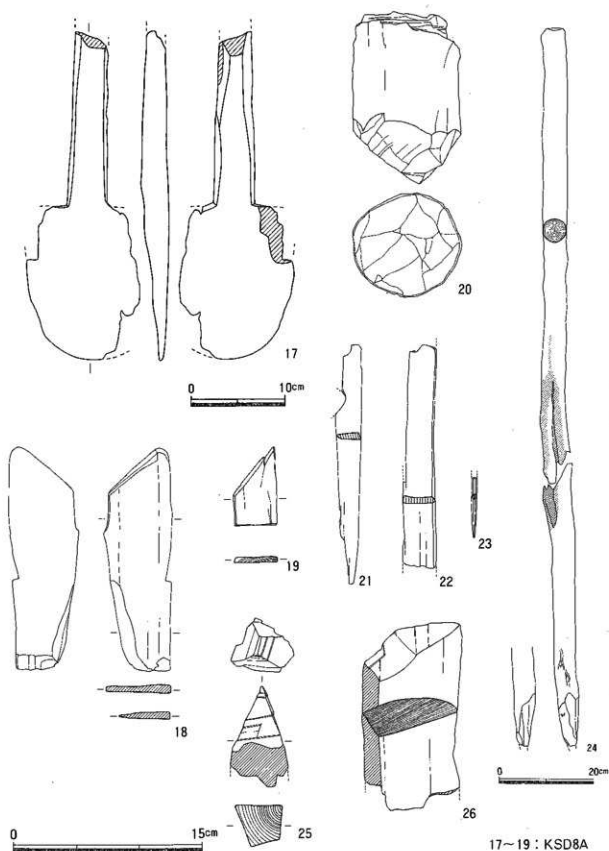
KSD 8 A出土木製品 (第122図 17~19)

鋤 17 (カシ) 柄身共づくりの鋤である。現存長35cm、鋤身長さ(F)=16.5cm、幅(I)=不明、柄部現存長(G)=18.5cm、幅(H)=1.5cm、厚さ1.3cmを測る。柄着け根より鋤先まで片面のみに削り加工を施して先端部へと薄くしている。柄の部分は側面に加工が見える。保存状態が悪く欠損部が多いため細かい加工・調整を見ることはできない。溝の西側杭列付近で出土したものである。奈良県纏向遺跡出土のもの(古墳前期)、大阪府池上遺跡のもの(弥生)、同じく大阪府爪生堂遺跡のもの(弥生中期)等と同形態のものである。

へら状木製品 18 (アカガシ) 榎目材。全長17.5cm、幅3.5~5.5cm、厚さ0.5cmを測る。上端



第122図 木製品実測図(1)



第123図 木製品実測図(2)

17~19 : KSD8A

20~24 : KSI1

25 : KSD16

26 : KSD1

部を先端部から側面部へと斜角に切断し、面取り加工を施して丸く調節したものであり、上部の断面は長方形で厚さがあるが、下部は表裏とも平坦に削り薄くしている。全体に火を受けて焦げている。用途不明である。

板材 19 (スキ) 榎目材。全長6.2cm、幅3.5cm、厚さ0.4cmを測る。上部を先端部から側面部へと斜角に切断した板材で、表裏とも平坦に加工されている。用途不明。

KSD 2 出土木製品 (第123図 20~25)

加工丸太材 20 (モモ) 青色砂燐層より出土。全長13.5cm、直径8.5cmを測る。先端部は杭先状に工具による加工がなされている。反対部分は幾重にも刃があたった跡が段状に残り切断されている。自然木をそのまま使用したもので、樹皮が全面に残るものである。杭材としては短いものであり、木垂とも考えられるが不明である。

板材 21 (ヒノキ) 青灰色層より出土。現存長19.0cm、最大幅2.0cm、厚さ0.4~0.6cmを測る。榎目材を用い、先端部を尖らせている。上部に半円形の切り込みが入る。

板材 22 (ヒノキ) 榎目材現存長17.7cm、幅2.5cm、厚さ0.5cmを測る。両端部を欠損する。

21・22は木筒状木製品である可能性は低い。

棒状加工材 23 (ヒノキ) 現存長4.8cm、最大径0.5cmを測る。断面六角形に加工してあり、先端は細く尖らせている。奈良期でも類似品が出土している。

杭材 24 (イヌマキ) 青色砂燐層より出土。全長104cm、直径4.6cmを測る。溝下位に横になった状態で出土 (P.L.7) し、先端部より3分の1のところで折れている。先端は工具によって尖らせてあり、頭部も平坦に加工されている。折れた部分は火を受けて焦がされている。

杭先 25 (シラキ) 榎目材。現存長8.0cm、最大幅4.6cmを測る。断面は不定四角形であり、先端部は4方向から面取りされてクサビ状に加工され、向い合う2面は三角形及び台形の形となっている。杭先としたが、他の目的で作られたものであるかもしれない。

加工板材 26 (ヒノキ) 板目材。現存全長15.0cm、現存幅7.5cm、厚さ2.5cmを測る。一端を斜角に加工切断している。用途不明である。

KSD 2はK第I期の土器が出土した遺構であることから、これらの木質遺物はK第I期のものと考えられる。

第3節 石 製 品 (第124・125図 1~17 P.L.75)

古墳時代は青銅器文化を圧倒するように実用的価値の高い鉄器文化が普遍的に広がっていく時代であり、律令国家体制の基盤となる経済的支援はこの鉄器に費う所が多いと言える。

一方で人間は数万年という時間と共に過ごしてきた石器を十分に活用した最後の時期でもある。古墳時代の石製品には、石器そのものが主体者として活用されるもの(石皿・すり石・紡錘車)、他の利器的補助的存在のもの(主に鉄器を研磨するもの。砥石等)、装飾品・祭祀・儀礼に用いられるもの(石製模造品・勾玉・管玉等)がある。古墳時代の坂尻の景観を捉えるうえで石製品の評価は高いものと言えるであろう。

木質遺物と同様に古墳時代から奈良時代とつながる遺構で出土したものは時期の決定が困難であった。特に鉄器等を研磨したと考えられる砥石については難しく、明らかに古墳時代であるもののみ古墳時代編で扱うことにした。奈良時代編で扱った砥石の中には古墳時代の砥石も入っている可能性はないとは言えないが、時期不明及び奈良時代のものと考えられるものは奈良時代編で扱うこととした。

勾玉 2点出土している。1は2A区包含層より出土。長さ35mm、幅115mm、厚さ9mm、孔は直径約2mmで単方向からあけられている。暗緑色の蛇紋岩製でよく磨かれている。形状は「コ」の

字形で、両面ともかなり扁平に作られており断面は四角形に近い。2は2B-b区包含層より出土、残存長32mm、幅12mm、厚さ10mmで、灰白色の蛇紋岩製である。表面はやや風化し、形状は「コ」の字形で尾部は破損している。断面は1に比べて丸みを帯びる。KSD27Aに伴う遺物と考えられる。

管玉 3点出土している。石質はいずれも輝緑凝灰岩である。5は2B-b区包含層より出土。長さ22mm、直径6.5mm、表面はあまり磨かれておらずザラザラしている。孔の直径は1方が2.5mmで他方が約1.5mm、中心をややはずれ単方向から穿けられている。明緑灰色を呈する。KSD27Aに伴う遺物と考えられる。6は3C-e区出土。長さ40mm、直径10mmと他の2点に比べかなり大きい。孔は両方向からあけられ、直径は1方が3mm、他方が4mm、中心付近は約1.5mmとなっている。よく磨れており緑灰色を呈す。4は3H-e区、NSD4より出土。長さ19mm、直径6mmと小型である。縦に割れ約3/5が残在する。かなりよく研磨され、3点の中では最も調整がよい。孔の直径は1.5mm～2mmで単方向から穿けられている。

小玉 3D-g区KSD18より1点のみ出土している。材質は輝緑凝灰岩で明緑灰色を呈す。直径5.5mm、厚さ3.5mm、孔の直径は1.5mm全体的に調整はあまりよくない。

剣形品 8 3G-h区より出土。緑黒色の蛇紋岩製である。長さ47mm、幅28.5mm、厚さ7mm。五角形に近い形で、よく磨かれているが傷が若干見られる。孔の直径は約2mmで両方向から穿けられており、片方には紐ずれが認められる。

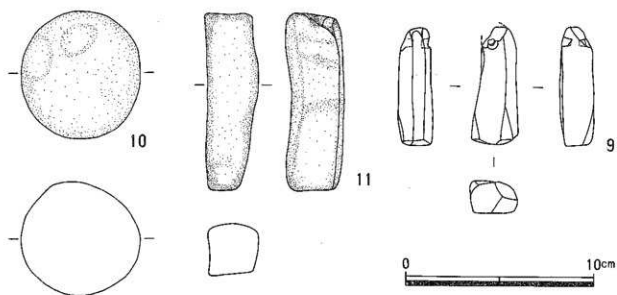
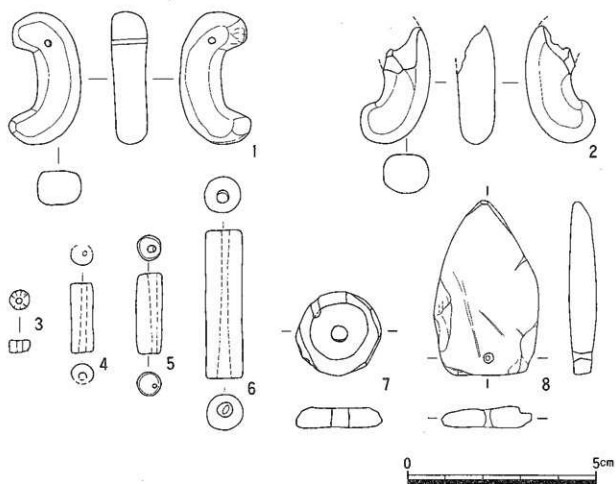
紡錘車 7 2D-a区、KSK13より出土。灰白色の蛇紋岩製である。直径31mm、厚さ7.5mmで断面形状は台形に近い。

砥石(9・11～16) 7点が出土している。加工されているものもあるが、ほとんどが自然礫をそのまま使用したのと考えられる。9はKSD25Aで出土した長さ約6cmの定形化された砥石である。材質は珪質凝灰岩で、側面に5面、底面に2面、計7面にわたって研磨痕が見られる。上部には両側から直径4mm程度の孔が穿けられているが貫通していない。全体的によく使われたようである。11はKSK21で出土したもので長さ9.4mm、材質は珪質頁岩である。自然面をそのまま利用している。研磨面は4面にわたり、削ぎ減りが著しくかなり使われたようである。12～16はいずれも中粒砂岩で自然礫をそのまま使用したのと考えられる。12はKSP13で出土した大型の自然礫である。3面に研磨痕が認められ、削ぎ減りが著しい。また3面にわたって鋭利な刃物を研いだと思われる擦痕が見られることから、かなりよく使われたことが想像される。13は3B-h区KSK21より出土。大型の自然礫を使用したものである。全体的に風化しているため、研磨痕は、はっきりしないが2～3面が使用され、12と同様の擦痕が付く。14は3B-g区KSD25Bより出土している。小型の自然礫である。研磨面は1面で反対側にあらひ擦痕が見られる。15は3B-h区KSK21より出土した小型の自然礫である。3面に研磨痕が見られるがあまり顕著ではない。16は表採されたもので、長さ25cmと大型の自然礫である。研磨痕は1面のみで、削ぎ減りは少なくあまり使われなかったようである。

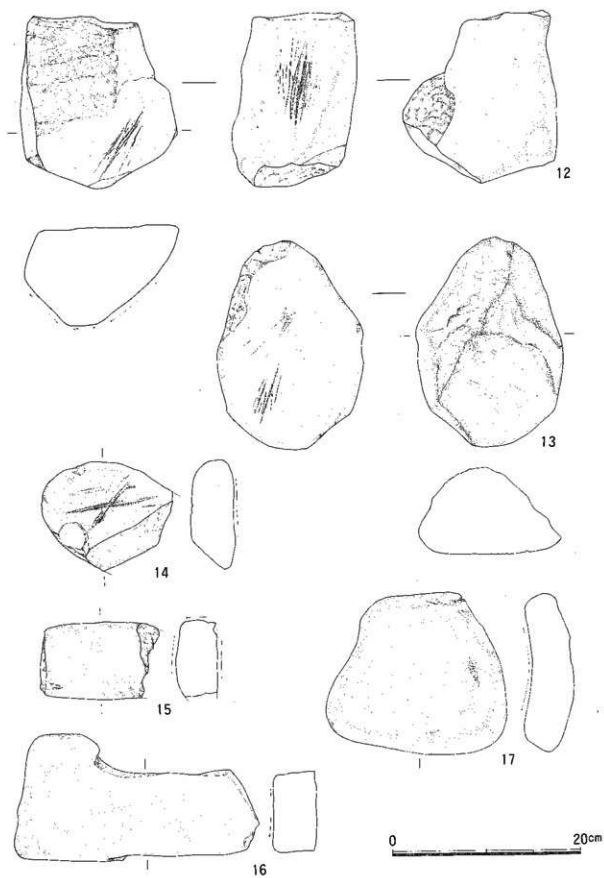
石皿(17) 3B-g区より出土。材質は中粒砂岩で植物などをすりつぶすのに用いたと考えられる。凹みは大きくかなり使われたようである。火を受けたため、赤褐色に変色している。出土状況からKSD25Aに伴う遺物と考えられる。

丸石(10) 3F-e区KSD9より出土した。材質は砂岩で、形は球形に近い。ちょうど手に入る位の大きさですり石として用いたと考えられる。すって平らになった所が2ヶ所認められる。

このように3B区のKSD25A・B、KSK21、KSP13では砥石や石皿が集中して出土している。KSK25Bでは馬の頭骸骨が出土するなど祭祀的色彩がみられる地域でもあり、これらの石製品との関係が注目される。



第124図 石製品実測図(1)



第125図 石製品実測図(2)

第4節 金属製品 (第126図 1~4・P.L.75)

古墳時代の金属製品はきわめて少なく、耳環・鉄鏃・鉄斧・鉄剣の4点が出土した。4点とも古墳時代の遺構から直接出土したものはないため遺構とのかかわりや時期的考察等は不十分なものに成らざるを得ないが、県内では出土例の少ない鑄造鉄斧や、KSH1に隣接して出土した鉄剣など興味深いものもある。

耳環 1 3B-h区の第Ⅲ層中より出土したものである。外径1.3cm~1.5cm、断面2.5cm×0.4cmを測り、断面形は外面が半円形で内面は直線的な形をしている。銅芯に銀板を巻きつけて作られたものである。奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏による蛍光X線分析では銀板に金鍍金されていることがわかったが、保存状態が悪く巻きつけられた銀板が剥落しているところも多く、銅の地金が露出している。浜松市中平古墳群、清水市東久佐奈岐3号墳出土の耳環に比べると小型のものである。この耳環が出土した3B-hでは、馬の頭骸骨を出土した。祭祀遺構と考えられる古墳時代後期のKSD27が検出されている。

鉄鏃 2 3Gの第Ⅲ層中より出土したものである。平根鏃であり三角形形式と言われるものであるが基部をほとんど欠損するため、棘状突起があるものか、または開づりになっているものかは不明である。残存全長4.3cm。身の長さ3.8cm、最大幅2.8cm、茎幅0.8cm、茎の厚さは0.4cmを測る。レンズ状のふくらみをもつ断面は最大厚0.5cmである。

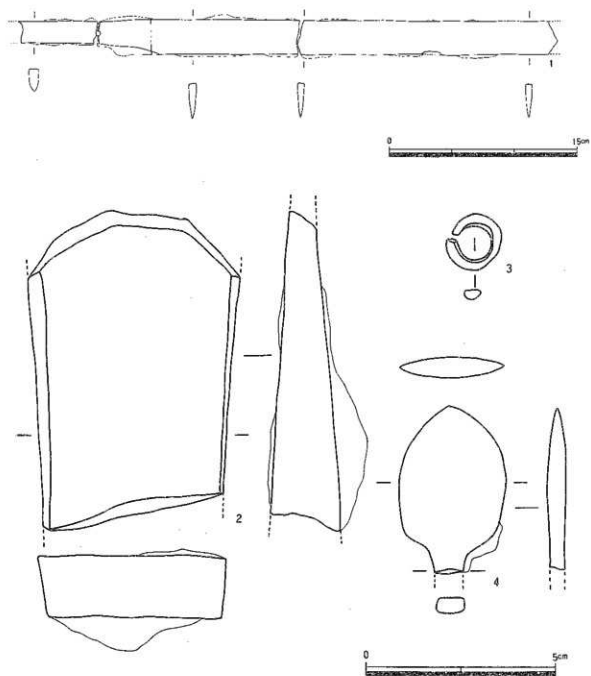
鉄斧 3 3E区で第Ⅱ層の下位より出土したものである。残存全長8.3cm、刃端幅5.0cm、最大厚約2.0cmを測る。上位部分を欠損し、全体に錆が覆っているものであり、原形を知ることは困難であるが、有袋式の鉄斧と考えられる。袋部の底部とみられる部分も錆が強く覆っているため有袋部の形状については確認できない。刃先部の刃渡り部分を一様に欠損することが原形は弓形を描くものであったとみられる。刃幅は袋部幅より広く、側断面はクサビ形である。

袋部を欠損するため袋部の折り返しの合わせ目からは判断出来なかったが、全体の側面がクサビ形であり、錆化が根溜り状で鍛造にみられる層状剥離がないことなどから鑄造鉄斧であることがわかった。静岡県内における鑄造鉄斧の出土例は少ないが、坂尻遺跡の周辺では磐田市磐田67号墳、阿久路3号墳(438号墳)での出土例がある。

この鑄造鉄斧は遺構に伴うものではなかったが、3E区では和泉期の一括資料を出土したKSD16、17が検出されており、これらの遺構とかわりのある遺物である可能性が考えられる。

鉄剣 4 3D区で検出されたKSH1の東壁より東へ82cm程離れ、東壁と平行した状態で出土した。柄は北に、刃先は南に向き、刃は東に向いた状態で出土している(P.L.31)。出土レベルがKSH1の壁とほぼ同一レベルであることなどから、KSH1に伴う遺物と考えられる。竪穴住居跡の構造上の問題もあるが、住居跡の屋根は当然壁より外へ張り出すことから考えると、この住居跡に伴う遺物である可能性は高いと考えられる。古墳時代の住居跡から鉄剣が出土した例は千葉県我孫子遺跡にみることができる。我孫子遺跡では大型の竪穴住居跡の床面より5~6cm浮いて出土している。出土遺物から5世紀代の住居跡であり祭祀的色彩の濃い遺構として考察がなされている。

現存全長43cm、重ね約5.5cm、刀身部幅2.7cm、平棟の平造である。全体に錆が覆っているため原形を確認することは難しいが、X線写真(P.L.75-1)でみると、刃端より基部をみることできる。茎の切れ込みは片側(刃方)にしかなく刃端より基部にかけてゆるやかなカーブを描き貫つぐに茎先へと移行する。刃より5cm程下の茎中央部に直径3.5mm程の目釘孔が見られる。刃側の切れ込みはあまり深くないこと、身幅が3cm弱であり、推定全長も80cm以内と考えられることなどから5世紀代の後半の時期のものと考えられる。



第126図 金属製品実測図

坂尻遺跡古墳時代遺構表

第1表 溝 状 遺 構

番 号	位 置	長 さ	幅	深 さ	時 期
KSD 1	2I-c, 3I-a.b, 3H-h	(25.6)	3.7~1.8	1.12	K I
KSD 2	3I-a.d.e.h	(27.8)	3.4~1.4	0.88	K I
KSD 3	2H-i, 3H-e.g	(19.4)	1.6~1.1	0.61	K I
KSD 4	2H-i, 3H-d	(11.2)	1.3~0.8	0.48	K I
KSD 5	3H-a.b, 3G-h	(17.6)	1.8~0.8	0.20	K III
KSD 6	2H-c, 2G-i	8.3	1.1~0.9	0.18	K III
KSD 7	2G-a.d.g	(21.0)	(2.4)	0.50	K III
KSD8A	2E-d.g	(13.4)	4.8	0.72	K III
KSD8B	2F-c.f.i, 2G-c 3F-d.g, 3G-a	(12.5)	—	0.72	K III
KSD 9	2E-i, 3E-h, 3F-a.e.h	(34.5)	2.7~2.2	0.80	K III
KSD10	3F-a	(8.0)	1.8~1.6	0.48	K III
KSD11	2E-i, 3E-d.e.g	(13.8)	1.4~0.8	0.48	K III
KSD12	2F-f, 3E-g	(5.2)	0.6~0.4	0.12	K III
KSD13	2E-f, 3E-d.e	(12.4)	1.6~0.8	0.60	K III
KSD14	3E-d.e, 2E-f	(12.2)	1.1~0.4	0.32	K III
KSD15	3E-b.d	(12.2)	0.7~0.4	0.12	K III
KSD16	2E-f, 3E-d	(8.8)	1.5~0.7	0.32	K II
KSD17	3E-a.d.e, 2E-c	(15.3)	2.0~1.6	0.56	K II
KSD18	3D-g	2.0	0.4~0.3	0.14	K II
KSD19	3D-d	(4.1)	0.8~0.5	0.08	K III
KSD20	3D-d.e	(5.8)	1.1~0.9	0.28	K III
KSD21	2C-h	(8.7)	0.4~0.3	0.16	K III
KSD22	2C-e	(3.6)	0.4	0.08	K III
KSD23	2C-e	(14.4)	2.2~1.7	0.52	K III
KSD24	2C-b.e	(11.0)	1.3~1.1	0.44	K III
KSD25	3B-g.h	(18.5)	2.6~1.7	0.24	K III
KSD26	3B-e.g	(5.4)	(2.3)	0.40	K III
KSD27	2B-b.e.f	(14.0)	2.5~2.0	0.44	K III
KSD28	2B-b.c	(13.8)	1.2~0.6	0.20	K III

第2表 掘 立 柱 建 物

番 号	建 物 規 模					掘立平面形態	柱根残) 有 ぬきとり	時 期
	間 数	棟 方 向	梁 行	桁 行	面積(m ²)			
KSB1	2×3	N 0°30' W	3.1	3.6	11.2	円 形	1ヶ所 無	K第Ⅲ期
KSB2	2×3	N 16° E	3.7	4.2	15.6	◇	無	K第Ⅲ期 (4)以前

第3表 土 壕 状 遺 構

番 号	位 置	長 径	短 径	深 さ	遺構面標高	方 位	時 期
KSK 1	3I-d	0.86	0.64	0.18	16.56	N13°30'W	K I
KSK 2	3I-d	0.90	0.68	0.16	16.38	N 2°30'W	K I
KSK 3	3I-e	(1.82)	1.94	0.12	16.80	N45°00'W	K II
KSK 4	3H-g	0.78	0.46	0.06	16.69	N32°00'E	K I
KSK 5	3G-h	(0.76)	0.98	0.20	16.52	N 0°00'	K III
KSK 6	3G-h	0.80	0.74	0.09	16.52	N 2°30'W	K II
KSK 7	3F-a	1.68	1.10	0.14	16.30	N27°30'E	K III
KSK 8	2E-i	0.80	0.68	0.46	16.34	N 2°30'W	K II
KSK 9	3E-d	0.90	0.56	0.20	16.26	N 0°00'	K I
KSK10	3E-d	1.00	0.60	0.20	16.28	N 8°30'W	K I
KSK11	2D-d.g	3.00	2.20	0.44	15.52	N43°00'W	K II
KSK12	3D-a.d	1.58	1.32	0.32	15.70	N 2°30'W	K II
KSK13	2D-a	3.12	1.50	0.24	15.84	N34°00'E	K III
KSK14	2C-g.h	(2.64)	2.22	0.50	15.90	N 7°00'W	K III
KSK15	3C-h	1.46	0.60	0.30	15.70	N30°00'W	K II
KSK16	3C-g.h	(0.76)	1.46	0.18	15.68	N14°30'W	K III
KSK17	3C-d	2.12	1.66	0.25	15.68	N12°30'E	K III
KSK18	3C-d	(0.74)	(1.00)	0.22	15.94	N30°00'W	K III
KSK19	3C-d	2.60	(2.20)	0.31	16.04	N35°30'W	K III
KSK20	3C-a.d	(2.66)	1.04	0.31	15.93	N 8°30'W	K III
KSK21	3B-h	4.92	2.34	0.16	15.76	N13°00'W	K III
KSK22	3B-h	(1.72)	1.80	0.46	15.78	N10°00'W	K III
KSK23	3B-h	(1.06)	2.22	0.28	15.74	N10°30'W	K III
KSK24	2B-e	2.34	1.26	0.12	16.44	N 0°00'	K III

第4表 小 穴 遺 構

番 号	位 置	長 径	短 径	深 さ	遺構面標高	時 期
KSP 1	3H-g	0.52	0.42	0.12	16.60	K I
KSP 2	3H-h	0.66	0.58	0.28	16.54	K I
KSP 3	3H-h	0.34	0.28	0.20	16.54	K II
KSP 4	3H-b	0.58	0.44	0.40	16.40	K I
KSP 5	3G-h	0.28	0.24	0.08	16.00	K I
KSP 6	2F-b	0.64	0.44	0.43	16.16	K I
KSP 7	3F-b	0.26	0.24	0.04	16.06	K II
KSP 8	3F-a	0.38	0.34	0.05	16.13	K II
KSP 9	3E-d	0.68	(0.48)	0.16	16.24	K I
KSP10	3E-a	0.28	0.24	0.10	16.00	K II
KSP11	3E-b	0.28	0.24	0.09	15.99	K II
KSP12	2C-h	(0.22)	0.32	0.02	15.66	K II
KSP13	3B-h	1.16	0.54	0.10	15.74	K III

第5表 竪穴住居跡

番 号	位 置	規模 東西×南北	深 さ	遺構面標高	方 位	時 期
KSH1	3D-d	6.14 × (3.70)	0.18	15.24	N18°00'W	KⅡ
KSH2	3C-g	(2.92) × 2.36	0.10	15.68	N 5°00'W	KⅡ
KSH3	3C-g.h	(2.86) × 3.98	0.16	15.58	N 0°00'	KⅡ
KSH4	2B-i	—	0.14	15.76	—	KⅢ
KSH5	2B-i	(2.66) × (1.10)	0.13	15.78	N12°30'W	KⅢ
KSH6	3B-e	2.60 × 1.64	0.07	15.88	N13°00'W	KⅢ

第6表 竪穴状遺構

番 号	位 置	規模 東西×南北	深 さ	遺構面標高	方 位	時 期
KSI1	3I-a.b	2.76 × 2.58	0.90	17.56	N15°00'E	KⅠ
KSI2	2H-i	2.80 × (2.40)	0.80	17.30	N33°30'W	KⅠ
KSI3	2H-f	2.60 × 3.10	0.10	16.48	N 0°00'	KⅠ
KSI4	3E-g	2.30 × 2.30	0.11	15.81	N26°00'E	KⅢ
KSI5	3E-a	(1.92) × 4.36	0.08	16.34	N 2°30'W	KⅢ
KSI6	3A-h.i. 3B-b.c	2.80 × 2.90	0.13	15.92	N 0°00'	KⅢ
KSI7	2A-i	(1.64) × (2.28)	0.12	15.84	N 9°30'W	KⅢ

※()の数値は調査範囲内での数値である。遺構標高とは、遺構上面での標高を示す。数値の単位はすべてmである。

古墳時代遺構番号対応表

(第2～4次概観記載遺構番号との対応表)

遺構番号	概観での遺構番号	遺構番号	概観での遺構番号	遺構番号	概観での遺構番号	遺構番号	概観での遺構番号	遺構番号	概観での遺構番号
KSD 1	SD13	KSD14		KSD26		KSK 1		KSK15	KSI 4
KSD 2	SD14	KSD15		KSD27A	SD19	KSK 2		KSK16	SI18 KSI 5
KSD 3	SD10	KSD16		KSD27B	SD19	KSK 3	SI28	KSK17	KSI 6 SI 1
KSD 4	SD 9	KSD17	SD23	KSD28		KSK 4		KSK18	KSI 7
KSD 5	SD 7	KSD18				KSK 5		KSK19	SI15
KSD 6	SD 4	KSD19		KSH 1	SI37	KSK 6		KSK20	KSX 1
KSD 7		KSD20		KSH 2	SI17	KSK 7		KSK21	SI 9 KSX 2
KSD8A	SD21	KSD21		KSH 3	SI16	KSK 8	SI39	KSK22	SI11 KSX 3
KSD8B	SD 2	KSD22		KSH 4		KSK 9		KSK23	KSX 4
KSD 9	SD24	KSD23		KSH 5		KSK10		KSK24	KSX 5
KSD10		KSD24		KSH 6	SI 3	KSK11	SI32		KSX 6
KSD11		KSD25A	SD26			KSK12		KSI 1	SI27 KSX 7 SI19
KSD12		KSD25B		KSB 1	SB 3	KSK13		KSI 2	SI25 KSX 8 SD18
KSD13		KSD25C		KSB 2	SB 1	KSK14	SI31	KSI 3	SI24 KSX 9

第Ⅸ章 まとめと考察

第1節 古墳時代の土器について

(1) 第Ⅰ期、第Ⅱ期の土器型式変化について

坂尻遺跡出土の古墳時代第Ⅰ期 第Ⅱ期の土器は、今回報告する全時代を通じた土器の総量からすると僅かな量であるが、溝状遺構を中心としてまとまった資料が得られた。前章まで第Ⅰ期、第Ⅱ期と時期決定をしてきた。本項ではその設定内容について記述する。

分類については第10表～第13表に示した。分類基準は器種ごとに大別し（大文字アルファベット）た後、その中での小さな系統（数字）に分類した。さらに小さな系統ごとの型式変化（小文字アルファベット）を考えてみた。

しかし、本時期の土器群については、溝状遺構出土のものを中心としたためにその一括性に問題を残している点、量的に少なく、本時期のすべての器種を編年的に操作しているわけではない点から、型式的方法のみに依存している。このため誤認点も多いと思われるが、以下各器種内容とその型式変化をのべてみたい。

壺形土器は完形品が少ないため主に口縁部形態を参考とし分類した。

壺A類は複合口縁の壺形土器で、口縁部形態のパラエティーがあるグループである。明瞭に型式変化を考えられるものはないが、A1、A2類は口縁を大きく外反させた後にさらに口縁を付すのに対して、A3類は頸部が大きくくの字状に外反するようになり、口縁の接合部の稜のつくりもあまくなる。この点からA1、A2類よりA3類の方が型的には後出の要素が考えられる。

壺Bは1点のみで型式変化の見られる資料は得られなかった。

壺Cはくの字状に外反した短い口縁をもつグループではあるが、C2類としたものにやや型式変化したものがみられた。C2a類の胴部調整は外面斜行のハケメ、内面は入念なナデ調整が施され比較的作りが丁寧で、器壁も薄いのにに対し、C2b類の胴部調整はハケメの施し方も入念でなくなるためか、1次成形の指頭痕、接合痕を多く残し、器壁も厚くなり、粗雑な作りとなる。またC3類としたミガキ調整のものも、従来のミガキ調整方法より、粘上があまり乾かないうちにミガキ調整を行なったせいか巾巾の粗雑なミガキになっており、C2a類の調整手法の入念さに比べると後出的である。

壺Dは、増形を呈する大形の壺形土器である。調整手法も入念なミガキ調整が行なわれ、器壁も薄く仕上げられた精製品である。

壺Eは球形胴の壺形土器で、ほぼ丸球をなすE1a類からなで肩でやや膨れ気味になるE1b類に変化すると思われる。

壺Fは長胴の壺形土器で胴部の沈線文が特徴的である。

所謂小形丸底増とよばれる小形壺は、AとB類に分類した。A類はやや下膨れの胴部から、やや扁平な胴部をもつA1b類、さらに扁平になるA1c類に変化する。A1a類の調整手法も入念なミガキ調整を施すのに対し、A1b類はヘラ状の粗雑なものに変わり、さらにA1c類は指頭圧痕を多く残すなど粗雑化が進む。

小形壺B類の型式変化は、口縁部径にくらべて、小さな胴部をもつB1a類から、口縁部より小さ

な胴部のB1b類に変化する。胴部形態は、扁平化したB1a類から、やや丸い胴のB1b類へと変化する。調整手法は、入念なミガキの施されたものから、ヘラナデが施されたものになる。

鉢A類はS字状口縁をもつ所謂丸底鉢と称されるものに類似するが、本遺跡出土のものは平底を成す点異なる。また小形壺B1a類の中には丸底というより小さな平底に近いものも含むことから、当地域の特性が感じられる。

器台は受け部が単純に開口部を丸くおさめる小形器台のみが知りえた。

高坏はA～E類に分類できた。高坏Aは坏部の稜線が明瞭につけられ、大きく開いた口縁をもつ坏部と裾部が大きく開いた脚をもつものである。坏部は肉厚で若干外反するA1a類から、直線的になり口唇部を薄く仕上げるA1b類、さらに口縁が大きく開き坏部のやや浅いA1c類に変化する。脚は裾部の下方で大きく開くA1a類から、開く位置がやや上方になるA1b類、緩やかに開くA1c類へと変化する。調整手法はいずれも口縁部はヨコナデのものが多い。A1a類の脚はハケメ調整を残すが、A1b類以降から脚部にタテ方向のヘラナデ状の粗雑な調整をするものが見立ってくる。しかし、A1b類の中には全面入念なミガキ調整を行なう精製品もある。

高坏Bは、坏部の稜線があまりつくりで、脚は裾部で屈曲して広がる長脚の高坏である。坏部はやや内彎気味に開くB1b類から、直線的に大きく開くB1c類への変化がみられる。脚は長脚になると思われるB1a類から、やや脚が短くなり、裾部が水平近くなるB1b類、脚の中位に根をもち、裾部の開きの水平度が弱く、緩やかに開くようになったB1c類へと変化する。B2類の高坏脚部はB1b類からの流れが考えられるが、口縁が大きく外反した稜線の明瞭な深い坏部をもつ点など別系統に進展している可能性を考えたい。

高坏Cは大きく開いた短脚の高坏である。

高坏DはB1c類と類似した根をもつ脚で、坏部は三角凸帯文を付すなどやや特異である。

高坏Fは小形の高坏と推定されるが、器台とも考えられる。

台付甕はA、B類に分類した。A類はく字状に外反した口縁をもつ長胴の台付甕である。器形的にはA1a類がやや下腹状になるのに対して、A1b類は、最大径を中位にもつ。台部は、いずれも指頭圧痕を多く残す粗雑なものであるが、A1a類に比べてA1b類になるとやや開き気味になるものが増加する。調整手法はA1a類がハケメ手法を多用するのに対して、A1b類では粘上があまり乾かないうちに底状工具で調整を行ったために、どちらかというとヘラケズリに近いヘラナデ状の調整になり、粗雑なものに変化する。

台付甕Bは所謂S字口縁の台付甕である。口縁のつくりがやや外に開き、しっかりつくるB1類と、さらに外に開いた作りのあまいB2類がある。器形は肩のはるB1類、なで肩で長胴化するB2類。調整手法もしっかりした羽状のハケメ調整、肩部にヨコハケメ調整のあるB1類、粗い斜行ハケメの施されるB2類がある。型的にはB1類からB2類への変化が考えられるが、他遺跡との関連から本遺跡では別系統として分類しておく。

甕はA・B類に分類した。いずれも平底を想定しているが、A類は台付甕の可能性が考えられる。

B類は長胴の平底甕で、口縁が大きく外反するB1a類、直立気味に外傾するB1b類がある。胴部はいずれもヘラナデが施された接合痕を多く残すが、B1b類は底部のつくりや、肉厚な器壁をもち、B1a類よりも作りが粗雑になることから、B1a類からB1b類への型式変化を考えたい。

以上のように各器種の中で型式変化が認められた。こうした型式変化と器種組成をみてもと本遺跡での古墳時代の前半期の土器群は第I期、第II期の2段階の設定が可能のように思われる。

壺形土器は、第Ⅰ期では複合口縁の壺形土器がバラエティーをもって出現しており、第Ⅱ期と考えたKSD17などの出土土器中にはほとんどみられない。球形の壺C2a類も第Ⅱ期になると粗雑なC2b類、C3類に変化する。壺Eとした埴形としたものも器形に若干の変化が認められる。また第Ⅱ期になると壺Dや長胴の異質な壺F類などが現われる。

小形壺とした埴形土器は、第Ⅰ期がA1a類、B1a類から第Ⅱ期のA1b類、B1b類へと変化する、A1b類はさらにA1c類へと変化する。

その他鉢、器台などの小形精製土器群は第Ⅰ期に多く見られるが、第Ⅱ期には小形壺が多く残るほかは、高坏Eが器台と思われる以外は見られない。

高坏は第Ⅰ期ではA1a類、B1a類、C類などがあるが、第Ⅱ期になるとA1b類、B1b類などからさらにA1c類、B1c類へ型式変化が認められる。高坏B2類、D類などは脚部の形状からA1c類、B1c類と関連が深いと思われる。

台付甕はA類とした中では調整手法などの相異により、第Ⅰ期のA1a類から第Ⅱ期のA1b類への変化がみられる。台付甕BとしたS字甕は第Ⅰ期に2系統見られたが、第Ⅱ期では見られない。

甕は平底のもので第Ⅱ期から見られる。A類は台付甕とも考えられ、第Ⅰ期からの系譜を引くものと考えられるが、長胴の甕Bは第Ⅱ期からの新出の器種と考えられる。

第Ⅰ期については、ほぼ一時期のものと考えられ、細別段階の設定はしなかった。第Ⅱ期については、小形壺A1c類、高坏A1c類、B1c類、B2類、D類、壺B1b類などに新出の型式要素が認められ、新、古の時間差を与えるが、新段階の器種構成は明確ではない。

また第Ⅰ期から第Ⅱ期の古い段階には型式的にスムーズに移行するため、一型式以上の時間差のあるものではなく、極めて接近した時期の段階と理解している。

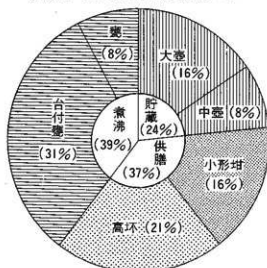
では、本報告での古墳時代第Ⅰ期、第Ⅱ期の土器が遠州地域においてどのような編年の位置を占めているのか次項で考えてみよう。

(2) 東中遠地域における第Ⅰ期、第Ⅱ期の土器の編年の位置づけ

遠州地域での4～5世紀の土器編年は、中嶋、柴田、鈴木氏らの指摘するごとく良好な一括資料に恵まれなかったため、尾張、三河地方の資料を基軸とした大参氏の編年観によってきた。しかし、大参氏らの基準とした資料についても元屋敷堅穴状遺構出土のものを除くと、一括資料をもって編年操作しているとはいえないもので、机上の型式操作による観があった。その後、三重県のおぼたけ遺跡のSK1の一括資料が発表され、加納氏らの小形丸底土器群の器種組成上の有無で、元屋敷遺跡堅穴状遺構→おぼたけ遺跡SK1→朝日遺跡群旧河道Eとする編年案が提示された。この編年案は大村氏らが進めている五領式の細分などにも現われ、東海系とされる土器を基準とする関東の古式土器編年観に少なからず影響を与えた。また、近年発表された都築氏らの論文も基本的には、加納氏らの編年観の延長上にあるものといえる。

加納氏らの編年観について、近年遠州地方での弥

第7表 KSD17器種別組成グラフ



生後期から古式土師器の資料の蓄積が進むなかで、鈴木氏、柴田氏らによりその問題点が提示された。⁽⁶⁵⁾鈴木氏は、⁽⁶⁶⁾椿野遺跡の欠山式段階の資料中にある小形壺に注目し、おばたけ遺跡SK1の段階以前に小形丸底土器の発生する条件が見られること、また柳ヶ坪土器についても二重口縁のバラエティーの中で捉えられ、やはりおばたけ遺跡SK1以前に成立しうる可能性が指摘されるとしたうえで、さらに元屋敷、石塚式等の様式名称自体の使用に対する疑問点をもあげている。⁽⁶⁷⁾柴田氏は、加納氏の見解に対して批判を加える根拠もないとしたうえで、おばたけ遺跡SK1の資料が時間的に細分されうる可能性があること、朝日遺跡旧河道Eの遺物の器種組成上に欠落するものがあり、加納編年におお問題点が多く残されていることを指摘している。

いずれの問題点もその基準となる元屋敷遺跡竪穴状遺構、おばたけ遺跡SK1に代るべき良好な一括資料が得られないため、その器種組成上の問題、型式変化の問題に関して検証する方法がないことによると考えられる。こうした現状から、東海系といわれる古式土師器のあり方と、尾張三河地方の古式土師器の編年作業を対応させるには今まだ資料不足であると思われる。すなわち、各地で行なわれている古式土師器の編年作業も、まずその地域ごとの型式操作と器種組成の変化を見たうえで、東海系とされる外米要素の変革を考えると第1と考えられる。ゆえに本項は、近年増加してきた中東遠地域で報告された古式土師器の流れ（一部志太平野域を含める）を考えて、坂尻遺跡の古墳時代第1期、第2期の土器群の占める編年の位置を考えてみたい。

第1段階（第127図）

第1段階の遺跡として、掛川市女高遺跡Ⅰ区4号住居跡、⁽⁶⁸⁾菊川町三沢西原遺跡4号住居跡、⁽⁶⁹⁾焼津市小深田西遺跡第15号住居跡⁽⁷⁰⁾などの出土資料があげられ、⁽⁷¹⁾浅羽町青木遺跡AXⅠなども本段階の可能性⁽⁶⁷⁾がある。また中東遠地域では本期のものとして抽出しえるものは少ない。

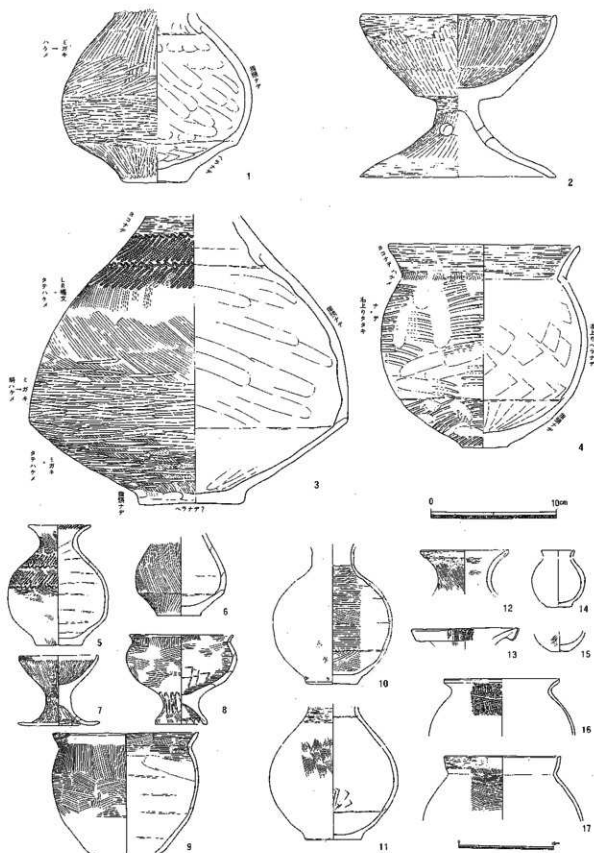
第127図1～4は女高遺跡Ⅰ区4号住居出土の資料である。3は、胴がよく張り肩部に縄文の施された壺形土器で、菊川式の新しい段階とされたものに相当する。1は、下腹れ気味であるがやや球胴化のみられ、入念なミガキ調整が施された無文の土器であり、従米の菊川式の中にはみられないものである。2は、坏部に縁線をもち、脚が大きく開く小型高坏である。4は、右上りのタタキメをナデ消した甕である。

第127図5～8は三沢西原遺跡4号住居跡出土土器である。4の壺形土器は菊川式の新しい段階とされたものより球胴化している。6は若干変形しているが碗形の坏部で、脚が大きく開いた小型高坏である。1、8の台付甕も8の長胴化したもの、7のように扁平化したもので、口縁部のキザミエがなく横ナデ調整のものが目立つ。

第127図10～17は小深田西遺跡第15号住居出土土器である。本住居址は後述する第Ⅱ段階の同1号方形凹溝基に切られた住居址である。10、11の壺形土器は、ほぼ球形胴をしているが、肩部から頸部にかけては緩やかに作られ、弥生後期的な様相をもつ。12などの口縁も弥生後期以来の折り返し口縁であるが、12の口縁を肥厚させたような、つぶれた折り返し口縁は弥生後期の土器にはない。15は丸底に近い小形壺である。甕は17のような長胴化した無刻目のもの、S字甕も直立気味の口縁部をもつ

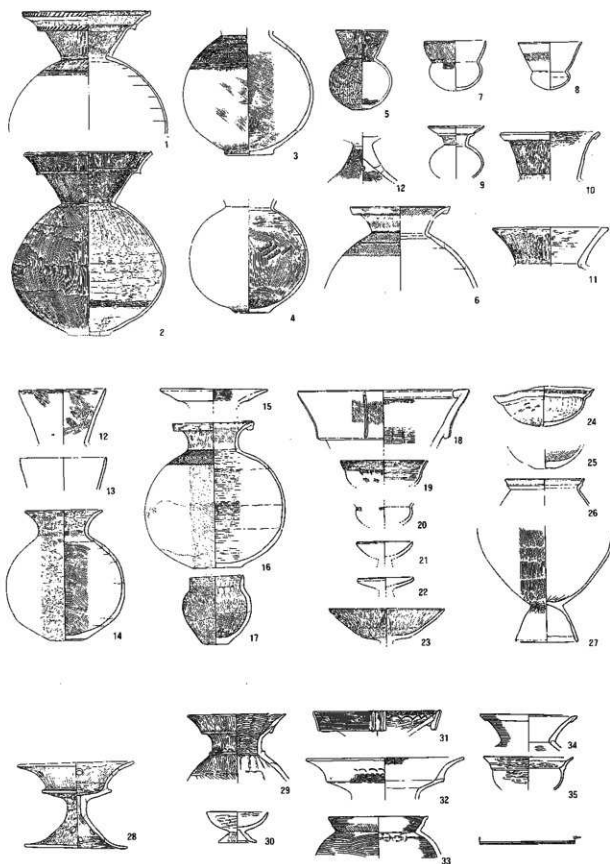
* 菊川式の細分については、⁽⁷⁰⁾佐藤、⁽⁷¹⁾鈴木、⁽⁷²⁾柴田氏がある。筆者も3のような中形壺の型式変化は胴の張らないものから大きく張るものに変化すると認識している。

** 菊川流域での菊川式の型式変化は、太田川、原野谷川流域とは若干異なるが、白岩遺跡などでも胴の張る傾斜のものが見られ、形態的にある程度対応させようと考えている。



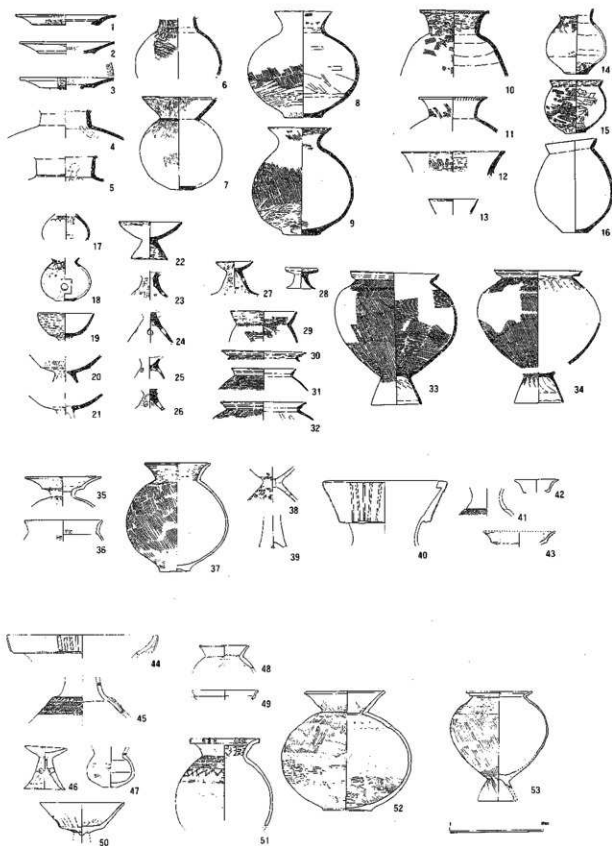
第127図 第1段階の土器

1～4 掛川市女高遺跡 I区第4号住居跡 5～8 菊川町三沢西原遺跡 11号住居跡
9～16 焼津市小深田西遺跡 15号住居跡



第128図 第Ⅱ段階の土器(1)

1~11 焼津市小深山西遺跡、1号方形周溝基
 12~28 小深山遺跡、第3地点南地区SE02遺構(28-K3N地区低湿地出土)
 29~35 菊川町三沢西原遺跡(29・30-SB6、31~33-SB8、34・35-SK7)



第129図 第Ⅱ段階の土器(2)

1～34 浅羽町青木遺跡 AK 6 35～43 磐田市新豊院山古墳(35～37-D 2号墳、38～43-D 3号墳)
 44～53 磐田市御殿二ノ宮遺跡(44～49-N X 1上層、50-N D 2、52-OK 143、53-T K 12、51-包含層)

16がある。

第Ⅰ段階は、女高遺跡のような従来の弥生土器とほとんど変化のない壺形土器と入念なミガキ調整の施された無文の土器、小形高坏、タタキ甕の外來の上器（搬入品を含む）を伴う組成、三沢西原遺跡でのやや球胴化のみられる在地系の壺形土器と本地域での変化がみられた碗状の坏部をもつ小形高坏などが伴う組成、小深田西遺跡での無文様ではあるが、形態は球形化しきっていない在地的な壺形土器と小形壺（小形丸底埴の祖形？）、外來的なS字甕を伴う組成を示すものがある。これらの組成を考えると第Ⅰ段階の内容は、弥生の後期末からの伝統を強く残した壺形土器と、外來の小形高坏、タタキ甕、S字甕が伴う段階と認められるが、詳しい組成を知る一括資料には恵まれていない。

また、女高遺跡のようにほとんど弥生後期の土器と型式変化の判断ができないものと、小深田西遺跡の無文様の壺形土器のように胴部形態、胴部のミガキ調整の多用し、型式変化の多くみられるものがあり、後者についてはより新しい時期差を与えうると考えている。しかし地域的時間軸（原野谷川水系と志太平野の地域差）の型式変化を追える一括資料を知りえないため、仮説にとどめておきたい。

第Ⅱ段階（第128図、第129図）

第Ⅱ段階では、小深田西遺跡1号方形周溝墓、焼津市小深田遺跡S E02遺構（井戸状遺構）⁽¹⁷⁾、浅羽町青木遺跡A K 6などの出土資料をあげる。また本段階に一応含めておくものとして三沢西原遺跡、磐田市新豊山D 2、D 3号墳、御殿二ノ宮遺跡などが考えられ、第Ⅰ段階に比べると資料的にはかなり多くのものが知りえる。

壺形土器については、小深田西遺跡1号方形周溝墓出土の第128図6、小深田遺跡S E02遺構出土の第128図16、18、新豊山D 3号墳の第129図40、41、御殿二ノ宮遺跡の第129図44、45などの弥生後期の土器から直接の系譜が辿れる在来系のもので、無文の球形胴のもの、長く開いた口縁をもつ埴形の壺、複合口縁をもつものなど外來系（畿内～尾張・三河的な）壺形土器群が目立って増加しながら伴う組成を示す。

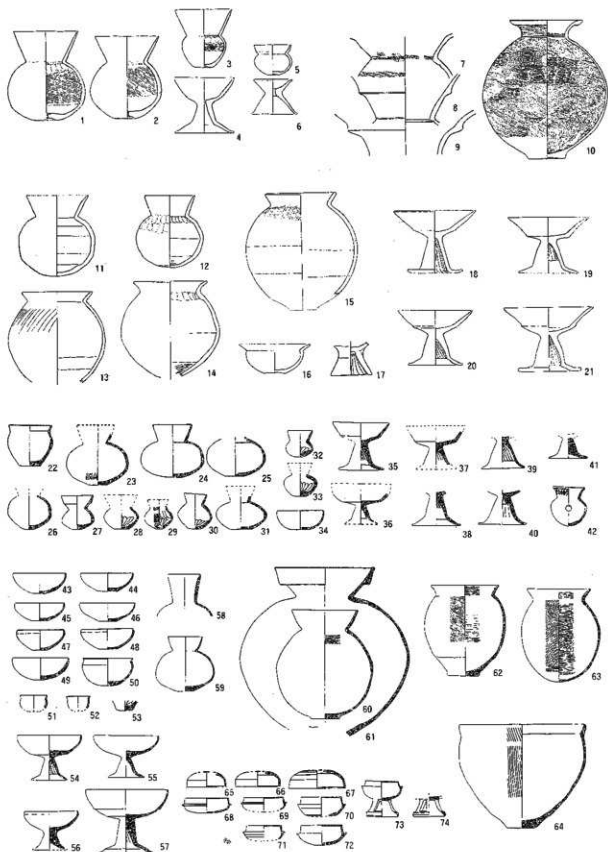
在来系の壺形土器第128図6、16は球形化した胴部に折り返し口縁を呈する中形の壺で、第Ⅰ段階にみられた、やや下腹れ形のものとは明らかに型式変化を生じている。この壺形土器は、藤枝市下蔵田遺跡⁽¹⁶⁾、富士市三新田遺跡⁽¹²⁾などでも確認され、志太平野～富士にかけて主体的に分布する土器といえる。第128図18、第129図40の棒状貼付文を施し、内面に折り返しが見られる大形の壺形土器も、志太平野から沼津にかけての地域に多く見られる弥生後期の受け皿状口縁から発生してくる土器で、曲金式、白髹式といわれていた土器型式名の指標となっていた土器である。胴部は下蔵田遺跡例から見ると球形化しており、第128図18の壺形器の胴部と近似するが、富士宮市月ノ輪遺跡群⁽¹⁷⁾のものは、なで肩で地域的に差がある。なお月ノ輪遺跡群、三新田遺跡で確認されている内面折り返しのない受け皿状の中形壺（三新田分類壺A 1、A 2類、月ノ輪遺跡分類壺B類）などにも口縁の接合部の作り方に変化が見られる以外は、あまり型式変化は知りえない。

*) 本系に統するものは、口縁部文様については棒状貼付文の他に、棒状貼付文より変化した縦位の沈線文、羽状縄文とS字結節文の施されたものなどのバラエティーが見られる。二重口縁の接合部に粘土帯を貼付して、やや下方向に作り出す手法、内面折り返しの手法などが多用され始める型式変化があるが、内面折り返しのないものや接合部の粘土帯貼付のないものなど、口縁部だけではほとんど弥生後期のものと識別しえないものも含んでいる。

**) 広義の複合口縁といえるが、ここでは外來系の複合口縁と区別するため受け皿状口縁とした。

**) 型式設定者は弥生土器としたものであるが、ほとんどは本段階に属すると考えられる。

**) 中東道では明確な資料はみられないが、静岡市黒道跡で出土している。中野省氏御教示。



第130図 第三～第四段階の土器

1～6 藤枝市の瓶落1号墳 7～10 掛川市春林院古墳 11～21 磐田市見性寺道跡
22～42 焼津市宮之腰遺跡 A地点 43～64 宮之腰遺跡 第8層

第129図41、45などの羽状刺突文が施された土器は、太田川水系の菊川式に多くみられる文様を引きついでいる土器で、伴出した土器群からも本段階に該当すると考えられる。

また、第128図10、34などの折り返し口縁風の土器も外来系の短口縁の球形壺、埴形壺などが在地的要素を取り入れて成立した在地系に属するといえる土器群である。

本段階の在地系の壺形土器は第128図6、16など志太平野から富士にかけて中心的に分布するものと、第129図41、45のように太田川水系に分布の中心をおくものがあり弥生土器以来の地域差が本段階まで看取される。また第128図18、第129図40などの土器は中東遠地域はもとより、静清平野から沼津まで、西は椿野遺跡、さらに奈良県橿原⁽⁷⁹⁾向遺跡まで搬出が認められる小地域を越えて分布する土器であるが、主体は志太平野から富士、沼津あたりに分布域があるらしい。

高坏については、尾張、三河地方に分布した欠山式高坏を祖形とした坏部に稜をもち、脚が大きく開いた大形高坏が主体的に見られる。第128図30のようにやはり欠山式の中に祖形のある小形高坏、また前段階にも見られた坏部に稜をもち、脚が水平に近く大きく外反しながら開く小形高坏が見られる。完形品は図示しえなかったが、上戴田川の丁遺跡出土のものや、第129図19の青木遺跡のものを見る限り坏部に稜をもつ小形高坏は、前段階の女高遺跡のものより欠山式の高坏の手法である口唇部の面取りがなくなっている点、内窓部から上の脚部分が長くなる傾向がある点に型式変化が認められる。

小形壺は第128図7、8、20などの丸底で口縁が大きく開いたものがある。また第128図24、19、35などの口縁からS字状を成す鉢形土器も見られるようになる。これらの小形土器とセットとなる小形器台も目立って増加してきており、小形丸底壺、小形鉢とともに本段階の特徴をなしている。

壺形土器については、青木遺跡A K 6に見られるように在来系のく字状口縁の台付壺は減少し、外来系のS字口縁の台付壺が多く見られるようになる。S字口縁の台付壺は口縁部が大きく外傾し、作りのしっかりした第129図30、34、やや外傾度が少なくなり、作りもあまくなる第129図31、32、33の2系が見られる。前者は30のように頸部内面にハケメ痕を残すものも含む^{**}。後者の台付壺は前者の33のように胴部内面にハケメを施す在地的特徴がみられる。当地域におけるS字口縁の台付壺は、前者の作りのしっかりしたⅡ、Ⅲa類的なグループ（外来要素を残すもの）、後者の作りのあまいⅢb類的なグループ（在地形の傾向の見られるもの）の2系統の系譜があることが指摘^{***}しえる。

以上のように本段階は、外来系の壺形土器の増加、在地系の壺形土器の変化が多く見られる点、小形土器群、欠山式高坏を祖形とする高坏群、S字口縁の台付壺の増加など外来系土器群が強い割合で現われてくる特徴があり、前段階とは明らかな画期が認められる。

第Ⅲ段階（第130図）

本段階とされるもので公表されているものは少なく、藤枝市釣瓶落⁽⁸¹⁾1号墳、掛川市春林院古墳⁽⁸⁶⁾など

*) 最近調査された磐田市と袋井市にまたがる玉越遺跡、袋井市土橋遺跡の菊川式土器は、羽状刺突文の割合が高く、縄文施文のものは少ない傾向がある。また、新豊院山D3号墳、御殿二ノ宮遺跡のものについては、弥生の菊川式と明瞭に型式変化を指摘しえないが、伴出土器から本期と考えている。しかし前段階のみに位置づけられてもそれを否定する根拠もないため、Ⅰ～Ⅱ段階に傾をたせておきたい。いずれにしても中嶋氏が指摘するように古式土器の範中にあることは間違いないだろう。

**) 安達・木下編年のⅡ類にあたるものである。以下の分類名は、安達・木下分類による。

***) 胎土の内眼観察でも後者のものより、在地産の胎土がより高く観察される。また、S字口縁の壺については、各地域の在地的発達があり、田口氏らによって、すでにその地域での編年が試みられている。

の古墳出土のものがあげられる。

第130図1、2の埴形の土器は前段階の同形のものとくらべると、口縁が短くなってきている点、外に開き気味になってきている点、底部は丸底であるが、小さな凹がある点など型式変化が見られる。第130図3、5の小形埴も平底化したものや、5のようにS字口縁の鉢から変化したものなどの型式変化が見られる。器台についても、第130図4、6のような貫通孔がある、前段階には見られなかったものが見られる。

複合口縁の壺形土器は第130図7～9のように接合部のつくりがあまりなくなったものが見られる。

第Ⅳ段階（第130図）

第Ⅲ段階同様に、取り上げる資料は断片的であるが、⁽⁶⁶⁾磐田市見性寺遺跡、⁽⁴⁸⁾焼津市宮之腰遺跡A地点の土器があげられる。

埴形の土器は、見性寺遺跡では第130図11、12で見られるように、前段階よりさらに外傾度が高まり口縁が短くなる変化、宮之腰遺跡では、胴部が扁平化し、平底化する型式変化が認められる。

高坏は坏部に稜をもち、脚の中位に膨みをもった第130図19、21などから、やや短脚化しながら、内彎気味の碗状口縁をもつ第130図36への変化、坏部の稜があまりなく、屈曲して裾部が開いた第130図18から、稜を強くもち、脚の屈曲度も少なくなる第130図35などの変化が考えられる。

小形土器群は、第130図26～33の作りの粗雑になった平底の小形壺埴が見られ、小形丸底埴は宮之腰遺跡では見られなくなる、また器台も、本段階ではみられない。

また、宮之腰遺跡では第130図34に示される碗状の坏が登場しており、注目される。

壺形土器は、見性寺遺跡では長胴壺が日立ちはじめるが、第130図17のように台付壺も見られる。

以上の点から本段階は、見性寺遺跡を古段階、宮之腰遺跡A地点を新段階としておきたい。

第Ⅳ段階新以後は、宮之腰Ⅰ式とされた第130図43～64を見ると、碗状の平底坏が多く見られる点、碗状の坏をもつ高坏がある点、小形壺（埴？）がない点、長胴壺が完全に主体となる点、須恵器が多数出現する点などから従来の流れとは大きな画期が認められ、第Ⅳ段階新と宮之腰Ⅰ式の間には大きな画期が認められる。

坂尻遺跡第Ⅰ期の土器群は、外米系の複合口縁の壺、鉢形土器、小形丸底埴、器台などの小形土器群が伴う点から第Ⅱ段階に該当する。しかし、鉢形土器、小形丸底埴の作りが粗雑になっている点、欠山以降祖形のたどれる高坏が認められない点、柳ヶ坪型の壺もおばたけ遺跡SKⅠに多くみられる、作りのしっかりした口縁をもつものより作りがよくなる点、S字口縁の台付壺も長胴化したものが増加する点から第Ⅱ段階でも新しい方に位置するであろう。

第Ⅱ期は見性寺遺跡の高坏から、第Ⅱ期の古段階を第Ⅲ段階、第Ⅱ期の新段階を第Ⅳ段階の古にあてたいが、第Ⅳ段階を検証する本地域の一括資料がないためなお検討の余地がある。他地域との併行関係については、後章にて集落の変遷過程を考える上であわせて述べてみたい。

*) おばたけ遺跡SKⅠなどの柳ヶ坪型土器は、欠山段階以降のバレス形壺を祖形として成立し、図のように変化すると思われる。

柳ヶ坪型の壺形土器変遷図



(3) 第Ⅲ期の土器の編年の考察

須恵器が導入されてくる時期以後をK第Ⅲ期として区分した。さらに第Ⅲ期の土器についての形態分類及び一括して出土した土群の器種別割合等を検討した結果、第Ⅲ期には(1)期～(7)期の小期が認められた。

この小期(1)～(7)の検討にあたっては次の点に留意するように努めた。同一遺構内で出土した遺物でも廃棄された時期の違い、時間差を考慮し、同一遺構内出土の遺物であっても同時廃棄された可能性の強い一括資料を対象として分類するようにした。KSD25A・KSK21・KSI6・KSD23・KSD25A・KSD25B・KSD8A・KSD9・KSD8Bの各遺構がそうである。また、一括性の高い遺物でも遺構によっては使用期間の差異による混入がありうるので、2形式又はそれ以上の形態幅のある土器も含めて編年の基準とした。

K第Ⅲ期(1)

KSD27B下層で出土した一括土器群をその指針とする。第93・94図でB'を付記した土器である。この遺構では須恵器の伴出はみられなかったが、須恵器がすでに導入されている時期の遺物と考えたい。坏7は口縁部が外に開くもので底部は平底であり、宮ノ腰遺跡でその類例をみることができる。壺は折り返し口縁と頸部をもち、甕の口縁部は「く」の字型で、端部は折り返されるなどいずれも古い要素をもつ。板瓦遺跡で最も古い須恵器を伴出したKSD27Aでは同形態の甕は出土していない。KSD27Aの甕はすでに長胴化していることからKSD27B下層の甕はさらに古く、遼考研編年の第Ⅰ期後半に対応すると考えられる。以上の点からK第Ⅲ期(1)の時期は5世紀末頃と考えたい。

K第Ⅲ期(2)

KSD27Aで出土した一括土器群をその指針とする。須恵器の坏蓋1～3(第89図)はいずれも口縁部高が器高の1/2程で箱型であり、天井部のヘラ削り調整が3/4以上にみられる。稜線は鋭く、端部の段も明瞭であることから、田辺編年のTK23にその特徴が求められる。6～9の坏蓋は全体にシャープさに欠け、MT15に比定される。坏身は器高が高く全体に丸味があり、底部の2/3にヘラ削り調整のみられる坏身12があり、TK47にその特徴を見ることができるが、坏身14・15などのように端部調整にシャープさが欠ける新しい要素をもつものも入っている。このようにKSD27Aでは2～3形態にわたる時期の須恵器がみられる。土師器の坏は底部が丸底で口縁部は内湾する特徴をもつようになっているが、壺51・52、壺62・63(第91図)などのようにKSD27B下層から出土した土器と共通するタイプの土器もみられる。このようなことからKSD27Aの時期はKSD27B下層より出土した土器群よりも新しい時期であるといえる。TK23の特徴をもつような古いタイプの須恵器も合わが、田辺編年ではMT15の時期に比定される須恵器を主体とすることから、遼考研編年の第Ⅱ期の古い時期に対応することができるであろう。このようなことからK第Ⅲ期(2)の時期は6世紀初頭頃と考えたい。

K第Ⅲ期(3)

KSK21で出土した一括土器群をその指針とする。須恵器の坏身が2点(第114図 1・2)出土している。いずれも最大径が15cmに近い大型のもので受け部の立ちあがりは短く内傾している。田辺編年のTK43にその特徴を見ることができる。長脚二段透しのある高坏(第115図 21)は端部が丸くおさめられ、坏部は無文で稜はみられない。このことから坏身よりは新しい時期の土器であろう。この時期の上師器の壺には折り返し口縁がみられなくなり、把手の付くもの(第115図 34)が出現する。K第Ⅲ期(3)は遼考研編年の第Ⅲ期前葉から中葉頃に対応するものであり、6世紀の後半でも古い時期と考えたい。

K第Ⅲ期(4)

K S I 6で出土した一括土器群をその指針とする。須恵器坏蓋1・2(第106図)はD類に分類されるもので田辺編年のT K 209にその特徴をみることができる。坏身4〜7も坏蓋と同時期であり、T K 209に比定される。土師器の甕は胴部に少しふくらみがあるものが口立つ。甕は長胴化し、口縁部の折り返しはみられなくなる。壺では折り返し口縁のものも少しみられる。K第Ⅲ期(4)の時期は田辺編年のT K 209に対応し、遠考研編年では第Ⅲ期中葉頃に比定される。K S K 21よりも新しい時期であり、6世紀後半頃と考えられる。

K第Ⅲ期(5)

K S D 23及びK S D 25Aで出土した一括土器群をその指針とする。

K S D 23では須恵器の坏蓋はD類が1点、E類が2点(第68図 1〜3)出土し、F類が1点(4)出土している。E類、F類は中村編年の第Ⅱ型式第6段階にその類例を見ることができる。土師器の甕は長胴化し、口縁部はゆるやかに外反しており強い屈曲はみられない。またこの時期に大型の台付甕が出現するようになる。甕は(4)の時期よりも口径の割合に対して器高が大きくなるため、口縁部はあまり大きく開かなくなる。

K S D 25Aでは須恵器の坏蓋のE類が出土している。土師器の坏では口径の小さいものもみられるようになり、口縁部は内湾するものが多い。甕は胴が長くなり、底部は平底で口縁部は「コ」の字型の頸部をもつものがみられる。台付甕、壺、把手付壺、甕などいずれも大型である。壺の底部は九底で、肩が張り出しており、台付甕も肩が大きく張り出している。

以上のようにK第Ⅲ期(5)は中村編年の第Ⅱ型式第6段階に比定されるもので、遠考研編年の第Ⅲ期後葉の時期でも古い時期と対応される。7世紀初頭頃と考えたい。

K第Ⅲ期(6)

K S D 8 A及びK S D 9で出土した一括土器群をその指針とする。

K S D 8 Aでは須恵器の坏蓋はE類(第47図 2〜4)、F類(5・6)が出土している。坏蓋E類は口径11〜12cmを測り、F類は口径10.5cm程の小型化したものである。E類は天井部と口縁部が沈線によって区別されるが、F類ではその区別は不明瞭となる。坏身ではF類(9〜11)とG類(12・13)が出土している。坏蓋E類と坏身F類が対応し、坏蓋F類と坏身G類とが対応すると考えられる。中村編年の第Ⅱ型式第6段階にその類例をみることができるが、坏蓋E類・坏身F類より坏蓋F類・坏身G類の方がより新しい要素の強い土器である。土師器の甕は平底又は平底に近くなってくる。甕は長胴甕が主体であるが、台付甕もみられる。甕は胴部中に把手が付けられている。

K S D 9では須恵器の坏蓋E類が2点(第55図 2・3)、F類1点(4)が出土している。坏身はF類が1点(6)、G類が3点(9〜11)出土している。土師器では坏の口径が小さくなり、口縁部は外に開いている。長胴甕は口縁部が「コ」の字型のものが多く、肩が張り出すようになる。台付甕の肩はあまり張り出さず、胴が丸くなる。壺の最大径は胴部中にあり、胴部には丸味がある。

K S D 8 AやK S D 9では(5)期の坏身F類や坏蓋E類と(7)期と考えた坏身G類と坏蓋F類とが共存して出土している。坏身G類と坏蓋F類はK S D 8 B、K S D 25 B上層では単独で出土し、他の時期の形態とは共存していない。このことから、(5)期と(7)期との中間に位置する時期として(6)期を設定することにした。(6)期は中村編年の第Ⅱ型式第6段階、遠考研編年では第Ⅲ期後葉の新しい時期に対応し、7世紀前半頃と考えたい。

K第Ⅲ期(7)

K S D 8 Bで出土した一括土器群をその指針とした。須恵器の坏蓋はすべてF類(第50図 1〜12)

であり、坏身はG類(15~20)を主体とする。中村編年の第Ⅱ型式第6段階に対応される。土師器の壺(第51図 42)の把手は胴部中位に付けられている。土師器はK第Ⅲ期(6)の時期から焼成が良くなり(7)の時期でもその傾向は続く。

K第Ⅲ期(7)の時期の遺物はかなり広い範囲で出土しており、2F・GⅠ(包含層、KSD7、KSD8A、KSD9、KSD20、KSD25B等)でみることができる。また須恵器の坏身に対して坏蓋の数がかなり多かった。坏身G類と坏蓋F類の遺構別個体数を全遺構からみると坏身が12個体で坏蓋は23個体と坏蓋が倍の数であった。特にKSD25Bでは坏蓋4個体が出土したが坏身の出上はみられず、KSD8Bでは坏身6個体に対し坏蓋は12個体出土している。このように(7)の時期では坏身、坏蓋のセット関係は大きくずれており、坂尻遺跡のような消費地では坏蓋が坏身として機能していたことも考えられる。

K第Ⅲ期(7)の時期の遺物は中村編年の第Ⅱ型式6段階にあたり、遠考研編年の第Ⅳ期前半に比定されるものであるが、坂尻遺跡では坏蓋にかえりの付く時期、つまり中村編年の第Ⅲ型式、遠考研編年の第Ⅳ期後半の須恵器はほとんど出土していない。この時期のものは、KSD9で2個体(第55図 5・27)、KSD29で1個体(第97図 1)の3個体だけであり、いずれも小片であった。このように第Ⅳ期後半に対応する坏蓋にかえりの付く須恵器は坂尻遺跡では使用されていなかったと考えられる。一方で、坏身G類、坏蓋F類とした須恵器が出土した遺構では、奈良時代の遺物が多くの場合出土している。これらのことから坂尻遺跡では坏蓋にかえりが付く須恵器は出土しないものの土器型式的には古墳時代の(7)期、遠考研編年の第Ⅳ期前半から遠考研編年の第Ⅴ期へ連続していったと考えられ、K第Ⅲ期(7)の時期は7世紀の中葉頃と考えたい。

(4) 古墳時代の上器形態分類と土器編年表について

古墳時代第Ⅲ期の土器は土師器を主体とするものであり須恵器の出土点数は全体に少ないと言える。このことは坂尻遺跡が消費地の遺跡であることから当然のことと言える。土師器の場合破砕された状態で廃棄されているものが多く、特に甕類など細片化したものの復元には大変な労力を要した。又、完形に近い形で出土したものでも保存状態が悪く復元できないものもあったが、バインダー処理を施すなどをして図化することが可能な物はすべて図化するように努めた。

土器の形態分類については、土師器の形態分類に主眼をおき、その時期については須恵器の坏類から検討する方法で行った。

形態分類表における分類名(アルファベット大文字)はK第Ⅰ期、第Ⅱ期の形態分類から続いている。そのためK第Ⅲ期では土師器の高坏はF類、壺はG類、甕はC類、台付甕はD類から始まっている。これ以外の器種についてはK第Ⅰ期、第Ⅱ期にはない形態の器種であり、すべてA類から始まっている。A類・B類・C類等で区別した形態区分の差異はその土器の外形的特徴である大きさや、器高と口径等の割合によるプロポーション、各部位の長さや屈曲等によるものである。その特徴は時期の推移によって連続的に変化するものである。またA₁類・A₂類・A₃類等のように付記された数字は各形態内における部分的特徴、又は手法の違いによる特徴による区分であり、その形態内でのバリエーションと考えてよい。

古墳時代土器編年表(別刷)では第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期で一括性の高い土器群を出土した遺構をその対象として作成したが、それらの遺構で出土しなかった土器形態については編年表に適宜編入するようにした。編入した土器についてはその遺構名又は出土地点を付記した。

(5) 短脚の模倣高環の形態変化

古墳時代の土師器の高環には大きく分けて坏部が大きく開き坏部下位に稜をもつ和泉式土器の伝統を受けつぐタイプのものと、それ以後新たに現われてくる短脚の高環とがある。坂尻遺跡では和泉タイプの高環はK第Ⅲ期にも出土しているが、坏部の残存が悪くその形態変化をうかがうことはできなかった。しかし、K第Ⅲ期(6)の時期であるKSD9では稜のある坏部をもった伝統的タイプの高環(第57図 80)だけでなく、坏部が「坏」とほぼ同じ形態をもつタイプ(第57図 78・第60図 137)も出現している。伝統的タイプの高環は、この時期になると稜のない丸味のある坏部をもつ高環の出現とともに衰退していくようである。

短脚の高環はK第Ⅲ期になって出現するものであるが、K第Ⅲ期(7)と考えられるKSD7でも出土していることから古墳時代全体を通して存在したものと考えられる。しかし、K第Ⅲ期(1)~(7)の中での出土点数をみると増減が著しく、拡大期と衰退期があると考えられる。ここではこの短脚の高環の形態変化について述べたい。

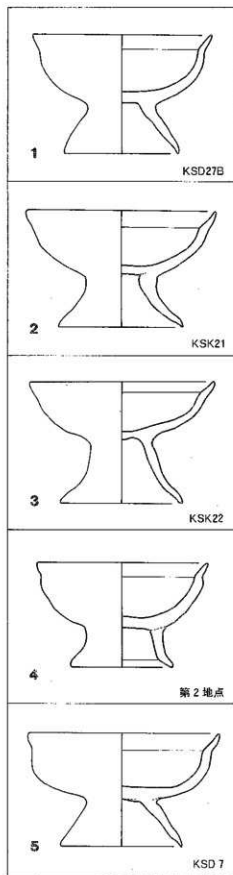
土師器の短脚の高環はふくらみのある体部と外につまみ出した口縁をもっている。脚部は接合部径が大きく、肉薄の粘土板を坏部に接合させて作るもので、脚は裾部が外に開き屈曲するものが多い。このような形態の高環は須恵器の無蓋高環を模倣した模倣高環と考えられ、須恵器が導入されるとともに出現してくる模倣環と同様に現われ広がっていったものであろう。

須恵器の短脚の高環については⁽⁷⁾田辺編年ではTK73から出現し、TK208では坏部の口縁はやや外反して上方へのび、体部の上下には明瞭な稜線で区分される文様帯があり、つまみが付く。脚は短かく長方形の透しがあり端部には段がみられる。TK23は形態的にはTK208と変わらないが、文様が簡素化し坏部が浅くなることや脚の端部の段が大きくなるなどの変化がみられる。TK47では坏部は浅く口縁部も短くなる。この時期から脚の長脚化が始まる。MT15になると坏部はさらに浅くなり口縁部と坏底部の間に段がつくが装飾はみられなくなる。脚は筒形に長くのび、裾部の広がりも小さくなる。有蓋高環はMT15ではまだ短脚と考えられ、長脚化するのにはTK10以後とされている。

このように田辺編年の第Ⅰ期で出現する短脚の高環は第Ⅰ期後半で坏部が浅くなり、第Ⅱ期では坏部はさらに浅くMT15では長脚化が始まる。そして第Ⅲ期以後、急減してくる。このような須恵器の短脚の高環の形態変化を大まかにとらえると、深かった坏部がしだいに浅くなり、脚が少しずつ長くなるのがわかる。土師器の短脚の高環の形態変化が須恵器の形態変化を反映しているものか、あるいは独自の形態変化をとげたものであるのか検討することが必要であろう。

坂尻遺跡で出土した模倣高環の形態変化を第8図に示した。ここでは5段階に分類したが、以下にその特徴を簡単に述べたい。

- 1 (KSD27B) K第Ⅲ期(2) 坏部は丸味をもち深い。脚は接合部からまっすぐに開き、裾部に屈曲はみられない。
- 2 (KSK21) K第Ⅲ期(3) 坏部はやや浅くなり丸味も少なくなる。脚部上位はまっすぐに下がり、裾部は屈曲して広がる。
- 3 (KSK22) K第Ⅲ期(3) 坏部はさらに浅くなり、ほとんど丸味がなくなる。脚は5段階中最も長く、ほぼまっすぐに開いて裾部でわずかに屈曲する。
- 4 (坂尻第2地点) K第Ⅲ期(5) 坏部は再び丸味をもちはじめ、口縁部と体部の境が明瞭になる。脚は最も短かく、接合部からまっすぐに下り端部のみ屈曲して開く。
- 5 (KSD7) K第Ⅲ期(6) 坏部は深く下ぶくれ状の丸味をもつ。脚は短かくまっすぐに開き裾部に屈曲はみられない。



第131図 模倣高環の形態変化

以上のような形態変化をみせるが、さらに外形的变化をまとめてみたい。初期の段階では坏部には丸味があり脚は短くまっすぐに開く（第1段階）。やがて坏部は浅く丸味がなく、脚が長くなる（第2段階）。これ以後坏部が最も浅くなるとともに脚は最も長くなる（第3段階）。坏部は再び深くなり丸味をましてくるが、脚は最も小型となる（第4段階）。最終期には坏部は深く下ぶくれになり、器高に対して1.1倍が大きく安定した形をみせる。脚は短かい（第5段階）。

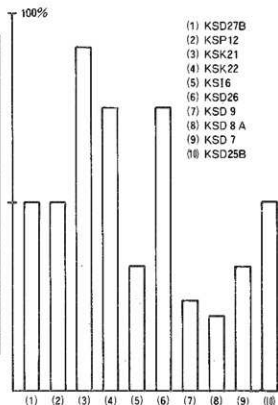
須恵器の短脚の無蓋高環はMT15以後長脚化が進んでいくが、土師器の模倣高環の場合、第3段階までは須恵器の高環と同様な形態変化があったことがわかる。しかし、それ以後土師器の高環は縮少期に入り、最終段階では器高に対して口径が大きく上から押さえつけられたような萎縮した形に変化していく。脚も最終期に近づくにつれて短かく萎縮してくることがわかる。

このような模倣高環は時期によってどのような増減がおきているかK第Ⅲ期(1)～(7)における遺構ごとの出土点数を調べてみた。その結果(1)期ではみられず、(2)～(3)期で4個体、(3)期で13個体、(4)期で3個体、(5)期で3個体、(5)～(6)期で3個体、(5)～(7)期で4個体、(6)・(7)期では各1個体が出土している（第8表・第132図）。このことからK第Ⅳ期(3)の時期に拡大期をむかえる模倣高環も(4)～(6)期には減少期に入り、(7)期で衰退していくことがわかる。なお、第1表では伝統的高環を含む模倣高環以外の高環の出土点数も示してある。

模倣高環が出土した遺構をみると、溝状遺構よりもKSK21・22、KSI6などの土壇状遺構や竪穴状遺構からの出土が多くみられた。このことから模倣高環がそういった遺構から出土する必然的な要因があったと考えることができるであろう。また、KSK22やKSD27Bでは1ヶ所にまとまって出土するといった祭祀的廃棄がみられることは注目すべきことである。また、須恵器の短脚の高環はKSK23から脚部の小片が1点のみ出土している（第118図5）。このことは須恵器の高環がいかに価値の高いものであったかを示すものであろう。つまり、土師器の模倣高環は須恵器の高環の代用品として使用されたものと考えることができる。

第8表 遺構別高坏出土個体数

遺構	時期	模倣高杯					その他の高杯					合計
		定形	ばの み	脚の み	計	率 (%)	定形	ばの み	脚の み	計	率 (%)	
KSD27B	(2)~(3)	2			2	50	1	1		2	50	4
KSP12	(2)~(3)	1		1	2	50	1	1		2	50	4
KSK21	(3)	2	6	2	10	91	1			1	9	11
KSK22	(3)	3			3	75		1		1	25	4
KSI6	(4)	2		1	3	33	3	3		6	67	9
KSD25B	(5)		1	2	3	50	1	2		3	50	6
KSD26	(5)~(6)	1	2		3	75		1		1	25	4
KSD9	(5)~(7)	1	3		4	24	2	11		13	75	17
KSD8A	(6)	1			1	20		4		4	80	5
KSD7	(7)	1			1	33	1	1		2	67	3



第132図 模倣高坏個体数割合

(6) 第Ⅲ期の台付甕の形態変化と土器の容積の検討

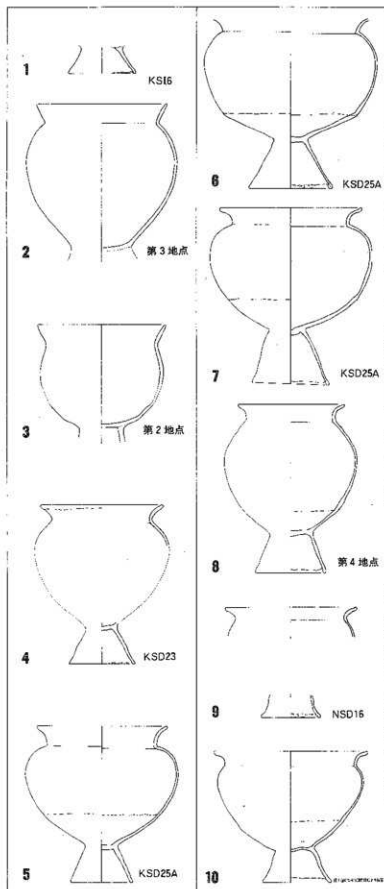
台付甕の形態変化について

KSD25AではK第Ⅲ期(6)の時期の土器が一括して出土したが、これらの土器の中に大型の台付甕が存在することがわかった。台付甕は残存率がよく、ほぼ完型のものが4胴体と完型の台部が1個体出土している。7世紀代の台付甕の例は他の遺跡でほとんどないことから特に注目されるようになった。ここでは6世紀代～8世紀代にかけての台付甕の編年について検討してみたい。

坂尻遺跡で出土した古墳時代の土師器の台付甕について再度調べてみたところ溝状遺跡では、KSD5、7、8A・B、9、23、25A・B・C、27B、29で出土していることがわかった。またKSI6、K SX7でも出土するなど台付甕は多くの遺構で出土している。また、奈良時代の遺構でもNSD15やNSH8などで数多く出土しており、その数はかなり多いと思われる。このように、台付甕は古墳時代のはほぼ全般及び奈良時代でも出土していることがわかった。

これらの台付甕の形態変化について第133図を作成してみた。この図では台付甕の外形的形態変化がわかるように調整痕等は省略して描いてある。10段階に分けることができた。

- (KSI6) K第Ⅲ期(3) 台部のみの出土であり、胴部及び口縁部の形態は不明。「ハ」の字に大きく開く。台部の器高は低く、端部の折り返しはみられない。
- (第3地点) K第Ⅲ期(5) 溝状遺構から出土したものである。口縁部は「く」の字型にまっすぐに開いている。最大径は胴部の上位にあり台部へと移行するにつれてすばまっている。台部については不明であるが、接合部径は大きい。
- (第2地点) K第Ⅲ期(6)~(7) 口縁部は「く」の字型にまっすぐ開くが、2よりは屈曲が弱くなる。丸味のある胴部は最大径を胴部中位にもつと考えられ、ふくらみは弱く球胴タイプである。
- (KSD23) K第Ⅲ期(5) 口縁部は強い屈曲をみせ、端部を外反させている。最大径が胴部上位



第133図 第Ⅲ期の台付甕の形態変化

にあり、やや張った肩をもつ。台部の器高は高くなる。台部端部の折り返しが少しみられる。

5. (KSD25A) K第Ⅲ期(6) 口縁部は胴部との境に強い屈曲がみられる。口縁部はほぼまっすぐに立ち上がるが、端部は外に開きながらわずかに外反している。胴部最大径は上位にあり胴部の肩は大きく張り出し、台部へとすぼまっている。台部は4段階とほとんど変らない。

6. (KSD25A) K第Ⅲ期(6) 口縁部は胴部との境で強く屈曲し大きく外反している。胴部はふくらみをもつが最大径は胴部中位にあり、肩はあまり張らない。胴部の下位には接合部が明瞭に残り、台部へと直線的に続く。台部は接合部径が小さく安定する。端部の折り返しは顕著である。

7. (KSD25A) K第Ⅲ期(6) 口縁部はまっすぐに立ち上がり「コ」の字状の頸部をなして、端部は少しつままれて大きく外反している。頸部と胴部との境の屈曲は強く肩は大きく張り出すが、胴部中位、下位にも丸味がある。ややふくらんだ台部は6段階と類似しているが、接合部径は少し大きくなっている。わずかにそった端部は折り返されている。

8. (第4地点) K第Ⅲ期(7) 口縁部はまっすぐに立ち上がる頸部をなして、短い端部が外反している。胴部はゆるやかにふくらみ、胴部中位に最大径がある。台部は接合部径と底径との大きさが近くなり、底径の割に器高が低く安定した台形を呈している。端部は折り

返されている。

9. (NSD16) 奈良時代 口縁部は大きく外反し、胴部上位には肩の張りはありません。台部は安定した台形を呈すると思われ、端部はややそり返り、端部の折り返しは顕著である。
10. (縄文遺跡、第VI次探検より転写) 奈良時代 口縁部はまっすぐに立ち上がる頸部をなして横に大きく外反している。胴部の肩はやや張り出し、最大径は胴部の上位にあり台部へとすばまいていく。台部の接合部径と底径の大きさが近く、器高に対して底径が小さく安定した台形を呈する。ややそり返る台部の端部は折り返されている。器高の割に口径が大きく開いている。

これらの台付甕の形態変化は次の3期に大きく分けることができる。第1期は口縁部が「く」の字型で、胴部は球胴であり、台部の器高は低い(第1段階～第3段階)。第2期になると口縁部は外反するようになり、胴部の肩が大きく張り出し最大径が胴部上位にくる。台部は三角形を呈し端部は折り返しがつけられる(第4段階～第7段階)。第3期では口縁部が「つ」の字型に外反し、直立する頸部がみられる。胴部の肩の張り出しは弱くなり、ふくらんだ胴部はやや長いが、奈良期のものは口径が大きく開いている。台部は台形を呈するようになり端部の折り返しがある。器高に対して口径が大きく、重心が下位にあり、安定した形になっている(第8段階～第10段階)。

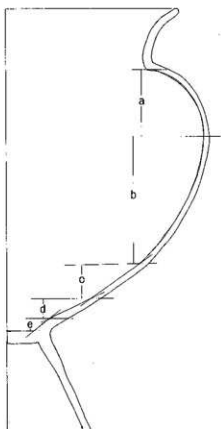
弥生時代中期末葉より出現する台付甕は後期初頭にはS字口縁を有する台付甕と、「く」の字に屈曲する口縁を有する台付甕と平行して使用されるようになり、富上市三新田遺跡の甕G類、甕H類、湖西市東笠子遺跡群C-9遺構出土台付甕などのように口径が30～40cm程になる例もある。

このように大型化した台付甕も5世紀前葉(和泉式の古い時期)を最後として終焉を迎えると言われてきた。しかし、最近古墳時代後期、そして奈良時代の発掘調査から台付甕の存在が少しずつ報告されるようになってきている。坂尻遺跡ではK第Ⅲ期(1)のKSD27Bで台付甕の台部接合部と考えられる土器が出土している(第94図 23)。それ以後K第Ⅲ期の各期で台付甕が出土している。K第Ⅲ期(5)の時期には拡大期を迎える台付甕はそれ以後も使用され、奈良時代に入っても活用されていく。

台付甕はKSD25Aで一括出土したように完形または半完形で出土することはまれであったため、この間十分評価されていなかったと思われる。坂尻遺跡でも出土遺物を再検討した結果、古墳時代から奈良時代にかけての台付甕の破片を多数確認することができた。台付甕は長胴甕同様煮炊きに使用される「甕」であり破損することが多く、破片として廃棄されることが多かったと考えられる。破片で見る限り長胴甕と区別することは困難であることから確認することはむずかしいが、台付甕を甕類の破片から区別するには、肩部の張り出し部や台部の接合部、端部の折り返し部などの破片を検出することで可能である。

5世紀代に消滅したと言われている台付甕は坂尻遺跡では6世紀初頭に出現していることが判明してきた。坂尻遺跡で出土した台付甕の編年はまだ不十分なものであり、その類例も乏しいが今後他の遺跡でも検出され、この編年表もさらに補足されていくことであろう。

台付甕が盛んになるK第Ⅲ期(5)の時期は6世紀初頭からかまどが造られるようになり、長胴甕も一方では使用されている時期でもある。坂尻遺跡でも台付甕の出土した遺構からは必ず長胴甕も出土している。かまど専用の長胴甕に対して、野外のようなかまどのない場所でも台付甕は必要に応じて活用できる機能的な甕であったと考えられる。また、台付甕の容積は長胴甕に比べると大変大きく、たくさんを量を一時的に煮炊きすることができたわけである。このような台付甕が出土するということは、多数の人々の食事を多量に賄う必要があったからであり、奈良時代に入って遠江国佐野郡の郡衙として成立する坂尻遺跡の性格を考える上で重要なことであろう。



第134図 土器容積計算図

台付甕を主体とする土器の容積について

容積の求積方法は次の要領で行った。

- ① 断面図の作成 土器の断面図は、最も平均的な位置を選んで作成したが、形が不規則なものは、2ヶ所の断面図を作成した。
- ② 近似式を求める 中心線を軸として断面曲線の近似式を求めた。曲線は不規則なため数ヶ所に分けて求め、理論線と断面曲線になるべく近くなるようにした。左図では、a～eの5つの部分に分け、a・bは2次曲線にc～eは直線に近似した。太線が断面図を、細線が理論線を示している。
- ③ 積分 土器を回転体とみなし、②で求めた式を積分することによって体積を求めた。形の不規則なものは、2ヶ所で求めて平均をとった。

なお容積の計算範囲は、環・甕は口縁までとし、甕類は頸部までとした。

容積の求積方法にあたっては、他にもいろいろな方法が検討されたが、土器の特性等を考え今回はこの方法をとった。土器が完全な回転体ではないので、ある程度の誤差はまぬがれないが、誤差の範囲は+4%以内にある

第9表 土器容積一覧表

遺構名	須 恵 器		土 師 器				
	環 蓋 (ml)	環 身 (ml)	環 (ml)	模倣環 (ml)	台付甕 (ℓ)	長胴甕 (ℓ)	甕 (ℓ)
KSD1					3.44 ()		
KSD27A	491 (1)	445 00	307 43 377 03	373 00			5.88 87
	547 (7)	624 00	337 08 397 49				
			366 09 411 00				
KSD26							4.05 40
KSD25A	278 (1)		410 00	378 (4)	10.70 03	4.75 09	8.46 09
	280 (2)				10.84 07		
					13.05 05		
KSD 9	320 (2)	153 (7)	175 45 346 50	324 00	11.08 (100)	3.26 (113)	6.61 (124)
			246 49 389 59	376 00			
			260 07 838 50				
			305 08				
KSD 8 A							6.31 82
KSD 8 B	1121) 163(3)	106 07	186 08 427 02	416 00			
	131(2) 186(6)	111 00	277 07				
	150(4)	160 09	362 03				
KSX 3						4.66 00	
第4地点					9.30		

※()内の数字は各遺構内の土器実測番号を示す。

といてよいだろう。求積方法は今後さらに改良し検討したい。

「台付甕の形態変化について」でも述べたように、台付甕は他の器種に比べて大変大型であり、その容積もかなり大きいと思われる。土器の編年を考えるうえで、その外形的形態は重要な要因であるが、土器そのものは実用的なものでありその形態は「物を入れること」つまり使用される目的に厳しく規定されると考えるべきであろう。土器はものを入れることによって始めて、貯蔵、煮沸といった土器本来の機能が開始されることは言うまでもない。ここでは土器が本来もつ目的つまり物を入れることを主眼として、台付甕の容積について検討してみたい。

KSD25Aでは完形に近い台付甕が4個体出土している。まず、この4個の容積を求めてみた。その結果、最大のものは20.98ℓもあった。また、他の3個も10.70～13.05ℓと大きな値であった。これらの台付甕と一括して出土した長胴甕の容積を求めたところ4.75ℓであった。これは最も大型の台付甕の22%にすぎない。10.70ℓの台付甕と比べても約50%以下の容積であり、台付甕の容積が長胴甕に比べてかなり大きいことがわかる。

次にKSD25Aで出土した台付甕、長胴甕、甕を他の遺構から出土したものと比べてみたい。台付甕についてみると、KSD1で出土したK第1期の台付甕は3.44ℓでありK第Ⅲ期のものと比べかなり小さかった。K第Ⅲ期(6)のKSD9で出土した台付甕は11.08ℓでKSD25Aの台付甕と近い値を示した。長胴甕についてはKSD9で出土したものは3.26ℓ、KSD3で出土したK第Ⅲ期(7)の長胴甕は4.66ℓであった。KSD9のものが少し小さい数値を示したが、大きな変化はみられなかった。甕はSD27Aが5.88ℓ、KSD26が4.05ℓ、KSD9のものは6.6ℓ、KSD8Aでは6.31ℓであった。KSD25Aの甕は8.46ℓで、他の遺構の甕より大きくKSD26の甕の約2倍の容積である。このように長胴甕の容積の変動がほとんどみられないが、甕の変化はかなり大きいことがわかる。そうしたことからも、甕が長胴甕だけではなく台付甕とも組み合わせで使われた可能性があるといえる。

このような煮沸器に対して銘々器としての坏類の容積も計算してみた。須恵器の坏身では、K第Ⅲ期(2)のKSD27Aの坏身が445ml、624mlと大きい数値を示し、K第Ⅲ期(7)の時期のKSD8Bの坏身は106ml～160mlと小さくなっている。土師器では古い時期のKSD27Aのものは307～411mlと比較的大型で数値間に大きな幅は見られない。これに対してK第Ⅲ期(6)～(7)になると、KSD9で175～838ml、KSD8Bで186～427mlと小型品から大型品までバラエティーに富んでいる。これは須恵器の小型化の影響を受けて土師器の坏も小型になっていったことを示すものである。しかし、一方では大きな坏も含まれていることがわかる。

以上のように台付甕を主体として容積を求めてみたが、台付甕で煮炊した食事を飯りに坏に盛った場合およそ何半分になるか考えてみた。KSD25Aでみてみると飯りに器いっぱい盛ったものとして土師器の坏の容積は410mlであり、最も小型の台付甕(23)で26半分、最も大型の台付甕(24)では51半分となる。KSD25Aで出土した台付甕4個すべてでは、135半分にもなる。実際にはこのように使われていたか問題もあるが、これらの台付甕は一般の住店で用いられたものではなく集団での煮炊きの際に活用されたことが想像される。このような大型の台付甕は多量の食事を一時的に貯る必要の中で成立したものであろう。

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
壺 A	A1a 	SK2	複合口縁の広口壺をA類とした。 口縁は大きく水平に近く外反した後、垂直に近く立ち上り、やや外反した複合口縁の壺形土器である。頸部はほぼ垂直に立ち上り、胴部はやや肩の張る球形胴である。
	A2 	SK1	口縁部は大きく水平に近く外反した後、さらに大きく外反した複合口縁の壺形土器である。頸部はやや外に開く。
	A3 	SD2	大きく外反した短い口縁をつかった後、さらに大きく外反した複合口縁の壺形土器である。口縁の接合部分の作りはあまくなる。
	A4 		ほぼ水平に近く開く複合口縁で、口唇端部に面を作る。
	A5 	SD1	口縁の稜線があまりつくりの複合口縁の壺形土器。内、外面に羽状文、羽状刺突文が施された所謂柳ヶ坪型と言われるものである。
壺 B	B 	SD2	断面形が三角形を呈する折り返し口縁の壺形土器である。
壺 C	C1 		単純口縁の広口壺をC類とした。 直線的にやや外反した長めの口縁をもつ壺形土器である。口唇部端に面をもつ。
	O2a 	SK9 SK10 SD1 SD2	大きく外反した短かい口縁をもつ広口壺をC2類とした。 胴部はほぼ球形である。胴部下半に接合痕を残し、外面調整は斜行ハケメが施されている。器高20cm前後の中形品と、30cm前後の大形品がある。
	O2b 		球形の壺形土器で、外面調整が全面ハケメのものを本類とした。器高は40cm前後になると推定される、極めて大形の壺形土器である。
	O3 		直線的に外傾し、口唇部をやや外反させた長めの口縁をもつ壺形土器である。胴部はほぼ球形である。外面調整は中広のやや粗雑なミガキ調整である。器高は約30cm前後になると推定される大形品である。

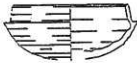
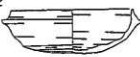
第10表 K第I・II期形態分類表(1)

種類	模 式 図	出土遺構	特 徴
壺 D		SD17	直線的に外傾しながら長く伸びた口縁をもち、最大径が胴部下半にある下ぶくれの壺形土器である。外面調整はハケメの後に入念なミガキ調整が施され、器壁も薄く仕上げられた精製品である。器高は30cm以上になると考えられる大形品である。
壺 E		SX1 SD1	球形胴で、底部が丸底あるいは小さな底を成し、器高が15cm程になると考えられる、中型の埴形を呈するものを本類とした。口縁はおそらく直線的に外傾し長く伸びたものになると考えられる。
		SD17	E 1 a 類よりやや下ぶくれ気味の胴部をもつ。やや巾広の入念なミガキ調整が施される。
壺 F		SD17	口唇部を折り返し口縁風に肥厚させ大きく外反した口縁部をもち、長胴で器高40cm以上になる大形品を本類とする。胴部、口縁部には調整があまりないが、接合痕を残す。胴部には篋状工具により放射状の沈線文が施されている。
小形壺 A		SD1	球形胴で、直線的に長く伸びた口縁をもち、所謂小形丸底埴を本類とした。やや下ぶくれ気味の胴部、外面調整は入念なミガキ調整が施される。
		SD17	A 1 a 類より球形胴に近くなるが、やや扁平になる。口縁は垂直に近く内湾気味に外傾する。外面調整は篋状工具によるナデ調整である。
		SX2 SP10	A 1 b 類よりさらに扁平化したものである。外面調整は、指頭圧痕を多く残し、ヘラナデ、指頭ナデなどが施される。
小形壺 B		SD2	頸部が明瞭にくびれず、大きく開いた口縁をもつ、所謂小形丸底埴を本類とした。大きく開いた扁平な胴部、外面調整は入念なミガキ調整が施されている。
		SD17	内湾気味に立ち上った口縁をもち、口縁部と比較してやや小形化した扁平な胴部をもつ。外面はヘラナデ調整が施されている。
鉢		SD1	作りの粗雑なS字状の口縁で、小さな底部をもつ小形の鉢形土器である。外面調整は入念なミガキ調整が施される。
器台		SD1	受け部が単純に短かく開いた小形器台である。外面調整は入念なミガキ調整が施される。

第11表 K第1・Ⅱ期形態分類表(2)

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
坏蓋 A	A1 	SD27A	全体に天井部が平坦で箱型。口縁部は高く器高の $\frac{1}{2}$ 以上を占める。端部は内傾し明瞭な段をもつ。口縁部と天井部を分ける稜は明瞭で鋭い。天井部のへら削りはていねいで全面に及び、外周のみナデられている。2形態に分類される。 A1類……口縁部が直下におり、器高の約 $\frac{1}{2}$ を占める。 A2類……口縁部がやや外に開き、器高の約 $\frac{1}{2}$ を占める。
	A2 	SD27A	
坏蓋 B	B1 	SD27A	天井部が丸く作られ器高が高くなる。口縁端部は内傾し段がやや不明瞭なものもある。口縁部と天井部を分ける稜はA類に比べやや鈍くなる。2形態に分類される。 B1類……器高がかなり高く天井部の丸みが強い。天井部の約 $\frac{1}{2}$ にへら削りがほどこされる。 B2類……天井部の丸みが少なく器高はB1に比べ低い。天井部の約 $\frac{1}{2}$ をへら削りする。
	B2 	SD27A	
坏蓋 C		SD25A	口径が大型化し、大きいものは15cmに及ぶ。口縁部は外に開き、端部は内傾が強いが段はなくなる。稜はほとんど沈線に近くなる。
坏蓋 D	D1 	Si6	小型化が始まる。C類までの天井部と口縁部の明確な区別は見られない。器高は低く全体的に扁平である。2形態に分類される。 D1類……稜は沈線に近く端部よりに位置する。口縁端部はわずかに内傾する。天井部はやや丸みをもつ。 D2類……天井部と口縁部を分けていた沈線は消滅し、わずかにその形跡を残すのみになる。天井部は平らに作られる。
	D2 	SD8A SD22	
坏蓋 E	E1 	SD7 SD8A SD9	口径11~12cmと小型化する。口径に対し器高が高く、天井部が丸い。2種に分類される。 E1類……口縁部はほぼ直下におり、口縁部と天井部は、明瞭な沈線によってはっきり分けられる。 E2類……天井部から口縁部までゆるやかなカーブを描くドーム型、沈線の位置は端部に近くなり不明瞭なものもある。
	E2 	SD8 SD9 SD25A SD20	
坏蓋 F	F1 	SD8B SD7 SD8A	口径10.5cm未満、器高が低くやや扁平になる。沈線はないものが多い。天井部の調整により2種に分類される。 F1類……天井部から口縁部まで全面をなめらかにナデ調整するもの。 F2類……天井部をへら削りし平坦に作る。未調整のものも見られる。
	F2 	SD8B	

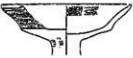
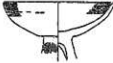
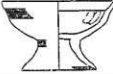
第14表 K第Ⅲ期形態分類表(1)

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
坏蓋 G	G1 	SD9	口縁端部にかえりがつく。器高が低く扁平で天井部に自然軸がかかる。2形態に分類される。 G1類……坏身G2の形態が逆転した形。天井部が平坦で、口径は小さい。
	G2 	SD29	G2類……口径16.5cmと大型である。つまみの付く可能性もある。
坏身 A		SD27A	底部は丸く約2/3にへら削りが施される。立ちあがりは高く、わずかに内傾する。端部は内傾しわずかに段をもつ。受け部は鋭く横にのびる。
坏身 B		SD27A	底部は丸みをおび約2/3にへら削りが施される。立ちあがりはAよりやや内傾し端部は内傾するが段をもたない。口径は16cmと大型である。
坏身 C		SD27A SD27B	底部は平坦に作られ約2/3にへら削りが施される。口縁部は直立に近く端部は内傾する。
坏身 D	D1 	SD27A	底部は丸く作られ約2/3にへら削りされる。立ちあがりは比較的短かく、立ちあがり、受け部とも端部は丸く作られる。2形態に分類される。 D1類……器高が比較的高く底部が丸い
	D2 	SK21	D2類……立ちあがりがD1よりも低く直立に近い。器高はやや低く、底部は平らに作られる。
坏身 E		SD6 SD14	小型化が始まる。立ちあがりが低くなり内傾が著しい。口径に対し器高が低く全体的に扁平である。受け部は横にのびる。
坏身 F		SD8A SD9 SD7	最大径12cm～13cm、立ちあがりはさらに低くなり大きく、内傾する。受け部は外上方にのびる。底部は比較的丸く作られるものが多い。
坏身 G	G1 	SD9 SD8B SD8A	最大径が11cm以下になる。器高は低く扁平で底部は平らに作られ安定しているものが多い。立ちあがりの形態によって2種に分類される。
	G2 	SD8B SD20 SD7	G1類……立ちあがりは、受け部よりも高い。 G2類……立ちあがりが受け部とはほぼ同じ高さになる。底部へら切り未調整のものが多い。
坏身 H		SD8	立ちあがりがなくなる。口縁部近くに沈線が見られる。口径に対し器高が高く底部は平らに作られる。底部に自然軸がかかる。

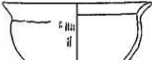
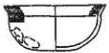
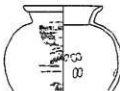
第15表 K第Ⅲ期形態分類表(2)

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
模倣坏蓋 A		SD27A SD25B	口縁部が短かく外反するもので、天井部が平らで、器高は低い。
模倣坏蓋 B		SD25A SD9	口縁部はA類より長く器高のほぼ半を占める。器高が高く天井部は丸く作られる。
模倣坏蓋 C		SD25B SK21	口縁部がさらに長くなり、器高の約半を占める。口縁端部をつまむものが多い。天井部は平らで箱型である。
模倣坏蓋 D		SD8A SD8B SD25A	口縁部は内湾しながら大きく開き、端部を軽くつまむ。天井部は丸く作られる。
模倣坏 A		SD26 SD27A	口縁部が高く直立に近い。受け部が横にのびる。底部は平らに作られる。
模倣坏 B		SD8A SK21 SD23 SD9	口縁部はやや低く、直立する。受け部はなくなり、残すのみとなる。比較的大型で平底のものと、小型で丸底のものがある。
模倣坏 C		SD8A SD8B	口縁部はさらに短くなり内湾する。底部は丸く作られる。
模倣坏 D		SD9	口縁部が内湾しながら内に傾むくもので端部をかるくつまむ。底部は丸底である。
坏 A	A1	SD27A	口縁が内湾するものをA類とした。底部外周に指頭痕が見られるものが多い。底部の形態により2種に分類される。 A1類……底部が丸底でやや不安定なもの。 A2類……底部を平らに作るもの。指頭痕が顕著である。
	A2	SD27A	
坏 B	B1	SD9 SD25A	口縁が直立するものをB類とした。ほとんどに粘土ひも巻きあげ底が見られる。Aと同様に底部の形態から2種に分類される。 B1類……底部を丸く作るものであるがAほど不安定な感じがしない。 B2類……底部を平らに作るもの。
	B2	SD9 SD8B	
坏 C	C1	SD9 SD8A	口縁が外に開くものをC類とし、3形態に分類する。 C1類……底部は丸く作られるが、比較的安定している。 C2類……底部は平底のものが多い。器高が低く口縁が大きく外に開き皿状の形態を呈する。
	C2	SD9 SD8A SD27B	

第16表 K 第Ⅲ期形態分類表(3)

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
C3 坏 C		SD9 SD11	C3類……底部と口縁部の境に屈曲をもち、口縁端部を少しつまむもの、口縁部の内外面にはいねいなナデ調整がみられる。
高 坏 F		SD7 SD13	比較的大型の高坏で、坏底部と口縁部の境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直線的に大きく外に開き底部は直線に近い。A類の脚が付くと考えられる。
高 坏 G		SD9 SD25B	坏底部と口縁部の境にあまり明瞭でない稜をもつ。口縁部は斜め上方に立ち、底部はやや丸みをおびる。
高 坏 H		SD9	坏部が深い碗型を呈する。脚は薄手である。
高 坏 I	I1 	SD27B	浅い碗型の坏部をもつ高坏で2型態に分類される。 I1類……底部から口縁部までほぼ直線的に斜め上方に開く。脚部は「ハ」の字状にまっすぐ開く。小型である。 I2類……口縁部は外に大きく開きやや丸みをもつ。
	I2 	SD9	
高 坏 J	J1 	SK22	口縁部を外反させる碗型の坏部をもつ模倣高坏で3形態に分類される。 J1類……坏部は浅く体部の丸みが小さい。脚部の器高が、坏部のそれよりも高く、裾部はゆるやかに屈曲して開く。端部は内につまむ。
	J2 	SK21 SD27B SI7	J2類……坏部は深く体部が丸みをもつ。脚部の器高は、坏部よりも短かいが形態はE1とほとんど変わらない。器高はE1より低い。 J3類……坏部はE2とほぼ同じ形態であるが、脚が接合部がらまっすぐに開く。器高はE2とほぼ同じである。
	J3 	SD7 SD27B	
高 坏 脚 A	A1 	SD5 SD9 SD27A	脚部を坏部にねじ込むことによって接合するものをA類とし、2形態に分類する。 A1類……脚の器高が低く、裾部は屈曲して大きく開く。内面は横方向にへら削り調整されるものが多い。
	A2 	SD9 SI6	A2類……脚の器高が高く、裾部は屈曲して開く。内面のへら削りは縦方向が多い。

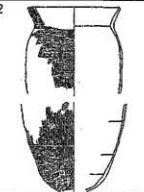
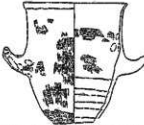
第17表 K第Ⅲ期形態分類表(4)

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
高 坏 脚 A	A3 	SD8A	A3類……器高はA1とA2の中間で、裾部は屈曲をせずにまっすぐに開く、内面には横位のへう削り調整が見られる。
高 坏 脚 B		SD9 SD22 SD28	脚上部は筒状で裾部は屈曲して開く。器高は低く、はりつけることによって坏に接合すると考えられる。
高 坏 脚 C		SD20 SD8B	接合部は円筒形で肉厚であり、脚は薄手で、接合部からほぼまっすぐに大きく開く。器高は低い。
壺 A		SD27A SD27B	口径25～29cmと大型で、「く」の字型に屈曲して外に開く比較的に長い口縁をもつ。壺の形態に入れるべきかも知れないが、ここでは壺で取りあげた。
壺 B		SD27A	A類を小型にした形態で、口縁は「く」の字状に外に開く。器高は低い。
壺 C	C1  C2 	SD26 SD8A SD9 SD8A	最大径が胴部にあるものをC類とした。器高が高く、球形の胴部をもつ。口縁の形態によって2種に分類する。 C1類……口縁が直立し、口径と最大径の差があまり大きくないもの。 C2類……口縁が短かく内傾するもので、最大径は口径よりもやや大きい。
壺 D		SD11 SD25B	比較的厚手の壺で、口縁は長くわずかに外に開く。口径と胴部最大径はほぼ同じである。
壺 G		SD27B SD27A SD9	折り返し口縁をもつものをA類とした。頸部はわずかに外に開き、折り返された口縁部がさらに外に開く。胴部は球形である。
壺 H	H1  H2 	SD25A SK5 SD25A SD9	口縁部が、直つすぐに外に開くものをB類とした。胴部の形態によって2類に分類する。 H1類……肩が大きくはり、最大径が上位にある。底部はやや丸味をおびる平底である。 H2類……B1類より小型で胴部は球形を呈する。最大径は中位に位置する。

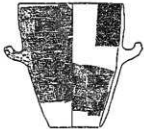
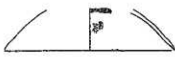
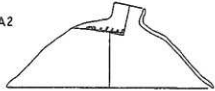
第18表 K第Ⅲ期形態分類表(5)

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
壺 I	11 	SD25A	把手付壺であるが、これを別の器種としないで壺の一形態として取り上げた。3形態に分類する。 I1類……肩が大きくはり、把手位置が高い。口縁部は、まっすぐでやや外に開く。底部はやや丸味をおびる平底である。H1類に把手を付けた形態である。 I2類……胴部は球形で把手位置はほぼ中位にある。口縁部はゆるやかに外傾し端部をつまむ。底部はI1類とほぼ同じ形態を示す。H2類に把手を付けた形態といえる。 I3類……口縁部は短かく、胴部との間のくびれが少ない。把手はほぼ中位に付き、胴部の丸みが少ない。底部は平底で比較的小型である。
	12 	SD25B SD8B	
	13 	SD9	
壺 J		SD23 SD8A SD9	口縁部は肩部から屈曲して直立し、中位から大きく外反するものである。
壺 K		SD9	口径と胴部最大径の差が小さいものである。口縁部は短かくまっすぐに開いている。
壺 L		SD26 SK21	口縁部は頸部で強く屈曲して、直線的に直立する。
台付壺 C		SD23	胴部は球形を呈する。最大径は胴部のほぼ中位に位置し、口縁部は、わずかに屈曲してゆるやかに外反する。台部端部には、折り返しがみられるがまい。
台付壺 D	E1 	SD25A	肩が大きく張り出し、最大径が胴部上位にあるものをE類とし3形態に分類する。 E1類……口縁部は肩部からゆるやかに屈曲して立ち、中位でわずかに屈曲して外反する。胴部下位の接合部に屈曲はなく、全体的にゆるやかにカーブする。台部は低く、幅が広い。断面は台形に近く安定感がある。端部の折り返しはあまい。
	E2 	SD25A SD25C SD7	E2類……口縁部はやや強く屈曲して立ち、中位から外反する。いわゆる「コ」の字型を呈する。胴部接合部は、ゆるやかな屈曲をもつ。台部は、器高が高くやや安定感に欠ける。端部はしっかり折り返される。

第19表 KⅢ期形態分類表(6)

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
台付甕 E	E3 	SD25A	E3類……口縁部は肩部からかなり強く屈曲し、外反して大きく開く。胴部接合部は接合痕が明瞭で強く屈曲しほぼ直線的に台部に至る。台部は器高が高く、接合部が細く端部が広がっており、断面は三角形に近い。端部はかなりしっかり折り返されている。
甕 C	C1 	SD27B	折り返し口縁をもつものをC類とし、口縁部の形態によって2種に分類する。 C1類……口縁部は厚手で「く」の字形に大きく屈曲する。胴部は大きくふくらみ、下ぶくれ型になると思われる。胴部内面に輪積痕が顕著に残る。
	C2 	SD27B	C2類……口縁はC1類と同様に厚手であるが、屈曲をもたずゆるやかに外反する。胴部のふくらみは弱い。
甕 D	D1 	SD27A	長胴型の甕で、胴部最大径がほぼ中位にあり、全体的に丸みをおびるものである。2形態に分類される。 D1類……口縁部は短かく、「く」の字型に外反する。底部は丸底になると思われる。
	D2 	SD25A SD26 SD27A SI6	D2類……口縁部は長く、ゆるやかに外反する。底部は丸底である。
甕 E	E 	SD25B SD9 SD25A SD8A SX3	長胴型の甕で、Dに比べて胴の丸みは少なく、さらに長胴化する。胴部最大径は上位に位置する。口縁部は「コ」の字形に外反し、端部をつまむものが多い。底部は平底である。
甕 A	A 	SD27A SD24	折り返し口縁をもつものをA類とした。口縁部は外に開くものと直立するものがある。胴部はややふくらみを持ち、底部は丸くすばまる。胴部下位の内面には、輪積痕が顕著にのこる。把手の付かないものがある可能性もある。

第20表 K第Ⅲ期形態分類表(7)

器種	模 式 図	出土遺構	特 徴
甕 B		SD26 SD25B SD27A	底部は丸底で中央に穿孔がみられる。口縁は直立し、端部は細くつながっている。把手は付くものと付かないものがあると考えられる。底部にカゴ目痕が残るものもある。
甕 C		SD25A SD8A SD8B	直胴形で把手はすべて付くと考えられる。口縁部は直立し、内側へ少しつままれているものもある。
甕 A	A1 		大型の甕で、天井部から端部へと少しふくらみながら大きく開く。天井部に直立する「口」が付くものもある。台付甕等大型品の甕であろう。A1類……最大径31.4cmを測る。天井部は欠損するため「口」が付くかは不明である。 A2類……最大径38.1cmと大型で、天井部の中心から少しはずれたところに直立する「口」が付く。天井部と体部との境には屈曲があり、天井部にはカゴ目痕が残る。
	A2 		

第21表 K第Ⅲ期形態分類表(8)

第2節 古墳時代の土器廃棄の諸形態と器種別組成表

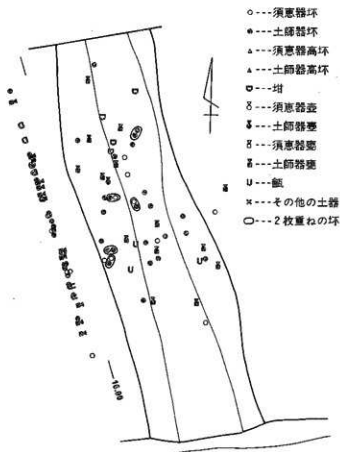
(1) 土器廃棄の形態について

発掘調査によって得ることのできた多くの遺物や遺構は、古代の人々の「くらし」の一端はみせてくれるものの、我々が遺物や遺構に対しての働きかけをしないかぎり何も語りかけてはくれない。坂尻遺跡の発掘調査でも多量の土器が出土しているが、土器廃棄はただ単に不要になった土器を廃棄したものと、祭祀的行為の結果廃棄されるものがあると考えられる。古墳時代の遺構の中でも一括性の高い遺物集中箇所を5ヶ所選択し土器廃棄について検討してみた。KSD27A、KSK21、KSD25、KSD9A・Bの4遺構である。また、高塚が一括して出土した遺構としてKSD27B、KSK22、KSD16の3遺構がある。これらの土器の出土状態を再度図面上から検討することで、土器廃棄状況の復元を試みたい。

KSD27Aの土器廃棄について(第35図 PL.27・28・29)

2B区、KSD27Aの遺構形状(第87図)及び出土遺物(89～92図)については第Ⅶ章第1節で述べたとおりである。この遺構では約5mにわたり溝の幅いっばいに土器が出土している。KSD27Aの遺構図土器の出土地点を入れたものが第88図である。須恵器環8点、土師器環24点、埴4点、甕13点、甕3点以上の53点が対照とされた。

第1図から以下の特徴をみることができる。(1)土器の出土レベルがほぼ同一で差がない。(2)器種に

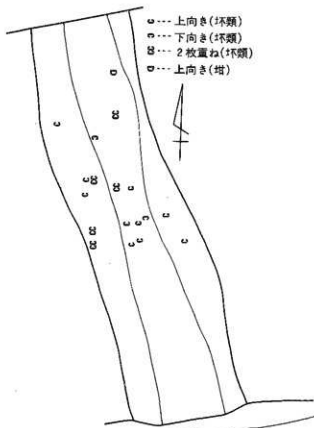


第135図 KSD27A (1)

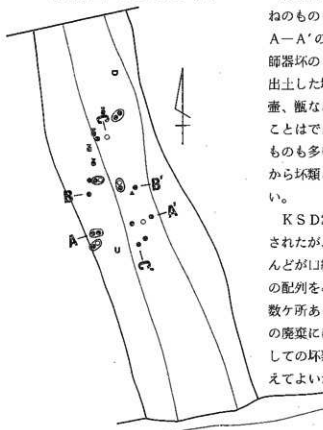
よっていくつかのまとまりがみられる。埴は北側部分にまとまり、甕は南側部分にまとまっている。(3)埴が並んで出土している。(4)ここで取り上げた53点のうち器種別にみると、埴類が32点と多くの割合を占めている。高塚の出土はなかった。(5)埴類のうち5ヶ所で二枚重ねの状態がみられる。

(1)のようにほぼ同一レベルで遺物が広がっていることは、土器廃棄の時間的差異がなく、これらの遺物が同時に廃棄されたものと考えられるであろう。(2)～(5)のような遺物の出土状態は注目すべきものであり、土器を廃棄した者の意識が働いた結果とみることができないだろうか。

これらのことをさらに検討するために第136図を作成してみた。第136図は残存率の低いものや位置的に土器群から離れているものなどを除いたものである。土器配置をみるとA-A'、B-B'の東西方行及びC-C'の南北方行に埴類を主体とする配列がみられる。



第137図 KSD27A (2)



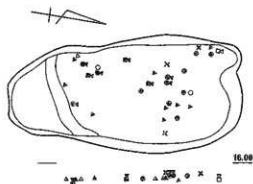
第137図 KSD27A (3)

A-A'の配列は溝に直行するものである。西端には土師器環32・47が重ねられている。これを基点としてみると、東方向へ土師器環40、須恵器環14、土師器環23、土師器環29が一列に並んでいる。それぞれの間隔は65cm、11cm、11cm、34cmである。23は下向きであったが他の環はすべて上を向いて出土している。B-B'では西端に土師器環25が出土している。ここを基点とすると60cm程西方向に須恵器環蓋7と土師器環42が重ねられ、12cm程のところに土師器環30が並んで出土している。C-C'は遺構の中心を南北に通る線である。北には須恵器環蓋9が出土している。ここを基点とすると南へB-B'の二枚重ねの7・42を通りさらにA-A'の40そして、土師器環39が並んでいる。

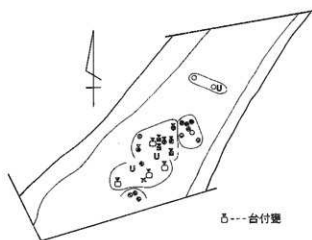
5ヶ所でみられた二枚重ねの状態で出土した環の組合わせは土師器の環どうし2ヶ所(28・33、32・47)、須恵器環蓋と土師器環1ヶ所(1・35)、須恵器環身と土師器環2ヶ所(7・42、10・37)である。これらはいずれも上を向いた状態で出土し、須恵器が下でその上に土師器の環を置いているという共通点がみられる。環類の出土状態から以上のような配列をみる事ができた。

さらに環類だけを図化したものが第137図である。二枚重ねのものも含めて22点の環類の出土状態を示してあるが、A-A'の線上にくる土師器環23とC-C'の線上にくる土師器環の2点以外はすべてII縁部を上にして出土し、北側で出土した増も上向きであることがわかる。環類以外の甕、壺、甔などの大型土器については破損が著しく十分検討することはできなかったが、完形のままで置かれたと推定されるものも多い。土器の出土レベルは環類とほぼ同一であることから環類と同様に何らかの配列をもっているものかも知れない。

KSD27Aの土器廃棄の状態から以上のようなことが検討されたが、特に環類の廃棄では次のことが言える。環のほとんどがII縁部を上にした状態であり、それらの環には何らかの配列をみる事ができる。さらに、二枚重ねにされた環が数ヶ所あった。これらのことからこの環類を主体とする遺物の廃棄には何らかの意識が働いていると考えられ日常計器としての環類を主体として用いる祭祀がこの溝で行われたと考えてよいだろう。



第138図 KSK21



第139図 KSD25A

KSK21の土器廃棄について（第138図 PL.30）

3B区のKSK21の遺構形状（第113図及び遺物第114図）については第Ⅶ章4節で述べてあるが、KSD25・26につながる溝とも考えられる。第138図ではある程度残存率の高いものを示した。土師器杯7点、土師器高杯9点、甕5点、壺3点、須恵器杯2点、須恵器甕1点、須恵器高杯1点、提瓶1点等である。

これらの土器の廃棄で特徴的なこととして次のことがあげられる、(1)器種別分類では高杯の出上りが約30%を占め、杯類より多い。(2)出土レベルがほとんど同じである。特に高杯のレベルは同一線上にある。(3)高杯は北側部分と、南側部分とに分かれて出土している。(4)須恵器の高杯、提瓶等は他の遺構ではみられないものであった。土器の配置から配列的なものはみられないものの、以上のような特徴をあげることができる。また、土師器の壺30・32では口縁部が二重になって出土しているが、1つの壺の口縁部は上をむき、他方の口縁部は逆転した状態であった。このような出土も注目されるものである。

KSK21は馬の頭骸骨を出土したKSD25Bの東側に隣接する遺構であり、馬の頭骸骨にかかわる遺構とも考えられたが、遺物からみた時期はKSK21の方が古く、KSD25Bの時期とは一致しない。このことからKSK21の遺物はKSD25Bとは直接的にかかわるものではないと考えられる。しかし、高杯類の出上りが特に多いことはやはり何らかの祭祀的行為があった結果とみてよいだろう。

KSD25Aの土器廃棄について（第138図 PL.23～25）

3B区のKSD25AはKSD25Bとつながるものであり、その遺構形状（第70・71図）及び出土遺物（第74～77図）については第Ⅶ章第1節で述べてある。25Aと25Bとの間約1mは側溝が埋設されていたため調査することはできなかったがKSD25Bの北部分で出土した土器群も（第78～81図）KSD25Aと同一の土器群と考えられることから遺物図版ではA'として付記してある。ここでは土器の廃棄状態をみるためKSD25Aの部分の残存率の高いものを中心に第5図として作成してみた。土師器杯11点、甕4点、壺3点、小型甕1点、台付甕4点、甕2点、須恵器杯甕3点である。

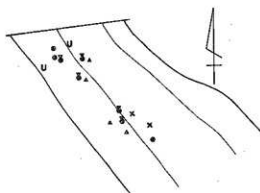
土器の配置をみると、器種別に5つのグループに分けることができる。北の方から須恵器の杯甕と甕のまわり、土師器の杯6点と須恵器杯1点の杯を主体としたまわり、甕や壺を主体としたまわり

まり、台付甕と甕を主体としたまとまり、南端には土師器の坏3点のまとまりがある。土器の配列的な様相をみることはできないが、器種別に配置された状況がわかる。これらの土器の残存率は他の遺構と比べて最も高く完形のものほとんどであった。このことは土器がそのままの形で溝に置かれたことを示している。また、器種としては、須恵器が少なくほとんどが土師器であった。25B(A')では高坏の小片がわずかに出土しているものの、25Aでは高坏は1点も出土しなかった。土師器の台付甕、壺、甕は他の遺構のものとは比べると大型のものが目立った。小型甕17は他の遺構では出土していないものである。

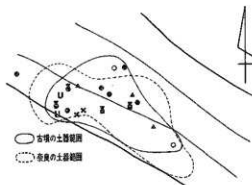
KSD25AとしてB(A')とつづく土器群はこのような特殊な出土状況をみせている。このことはこれらの土器を用いての祭祀的行為がこの場で行われたことを示すものであろう。これらの土器群より南西へ約2.5mのところで馬の頭骸骨が出土している。この馬の頭骸骨は他の骨が出土していないことから馬の頭部のみを溝に入れたものと考えられる。浜松市伊場遺跡、藤井寺市国府遺跡、八尾市中田遺跡、京都市大蔵田遺跡等でも馬の骨が出土しているが、馬は河の精とも言われ神に献馬することを目的とした祈雨祭祀によつて殺されたものと考えてよいであろう。このようなことからKSD25Aの土器群はこの馬頭部と伴に祈雨祭祀にかかわる土器群と考えられる。

KSD9A、Bの土器廃棄について(第140・141図)

2E・3F区のKSD9の遺構形状(第45図)及び出土遺物(第55～第60図)については第七章第1節で述べてあるとおりである。第1面では平安期の遺物がみられ、第2面では奈良時代の遺物がま



第140図 KSD9A



第141図 KSD9B

墳時代の土器は北からA地点、B地点、C地点、テラス状部分のD地点と4ヶ所にほぼまわって出土している。これらの土器群のうちA地点、B地点の土器群については遺物量も多く、残存率の高いものが多かった。ここではA地点とB地点の土器廃棄状況について検討してみたい。

A地点(PL.12・13)はKSD9の北部分に位置している。A地点で出土した土器群のうち残存率の高いものを第6図として図化した。土師器坏3点、高坏4点、壺4点、甕2点、小型壺2点である。これらは溝の西岸の立ち上がり部分で出土したものであり、溝の中位から集中して出土している。完形ものは少なく残存率が1/2程度のものが多い。土器の配置からは配列的なものはほとんどみられないが、小型壺が2個体出土していることは注目され、小型壺59と60は約40cm程の間隔をあげ、並んで出土している。小型壺59は約1/2を欠損するもので、倒れて出土し、完形で出土した小型壺60は直立した状態であった。これらの小型壺は同形態のものであり、他の遺構からは出土していない。これらの小型壺は小型手づね土器とはタイプを異にするもので、手づねによらず普通の上器と

同様に成り形されたものであるが祭祀的傾向の強い土器であろう。

B地点(PL.12・13)はA地点より南東へ6mのところに位置する。A地点と同様に溝の西岸の立ち上がり部分に古墳時代の土器が集中して出土しているが、上面では奈良時代の土器がまともて出土している。奈良時代の土器の広がり古墳時代の土器の広がり比べてやや横に広がっているもののほとんどの部分で重複している(第141図)。このように両時代にわたって同一の場所へ土器を廃棄していたことは興味深い。古墳時代の土器群はK第Ⅲ期(7)を主体とするものである。このことから古墳時代の土器が廃棄されたのは7世紀の中頃と考えられ、上面で出土した奈良時代の土器との時間差が問題となるであろう。しかし、土器廃棄の場所が偶然に重なったものではないとするならば、古墳時代、奈良時代を通じて生活区域内での「場」の意識が時代をこえて引きつがれていったということが言えないだろうか。

B地点では土師器の坏6点、高坏3点、壺2点、甕2点、須恵器坏2点を第141図に図化した。土器の位置からは配列的なものはみられないが、甕が2点近接して出土していることがわかる。溝の底面からは須恵器の坏蓋3が完形で口縁部を下にして出土し、その45cm程南では完形の土師坏48が口縁部を上にして出土している。土器群の東部分では長胴甕113がほぼ完形で出土した。その横からは土師器高坏の脚74が直立した状態で出土し、完形の土師器坏53は口縁部を上にして出土している。

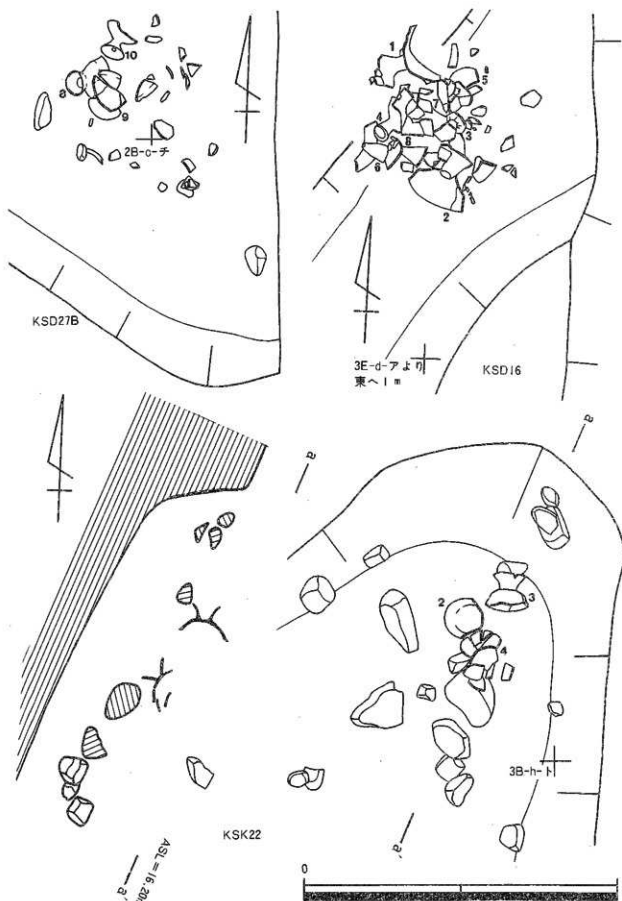
B地点の東部では完形の長胴甕113をかこむようにして完形の土師器坏2点が口縁部を上にして配置され、高坏の脚も直立して出土している。このことから土師器の坏類を主体とする祭祀的行為がこの場においてなされたと考えられる。また、KSD9のA地点、B地点ではいずれも溝の西岸の立ち上がり部に、古墳時代、奈良時代の土器が出土している。このことはKSD9の西側地域に建物群が成立していたことを窺わせるものである。

KSD16・KSD27B・KSK22の高坏の廃棄について(第142図)

土師器の高坏だけを1ヶ所にまとめて廃棄する遺構はK第Ⅲ期で1ヶ所(KSD16)、K第Ⅲ期で2ヶ所(KSD27B、KSK22)検出されている。これらの遺構における高坏の出土状況について検討してみたい。

2E区、KSD16の遺構形状(第13・14図 PL.16・17・18)及び出土遺物(第15図)については第Ⅶ章第1節で述べてある。KSD16の北部分の西岸に高坏が40cm×60cmの範囲にまともて出土したが、これらの高坏は8個体を数える。土器実測図では1・2は完形であるが3～8は欠損部分がある。これは最も欠けやすい坏部分や脚の裾部分が復元できなかったものによるものであるが、実際には8個体とも完形であったと考えられる。8個体の割別の出土状況は次のとおりである。高坏1は横に倒れた状態。2は1と対応するかのように1との対角線上に横に倒れている(1とは逆方向を向く)。3・5は逆転した状態であり、破損が大きい。6の脚は8の坏部に重さなって倒れているが、その6の坏部にはさらに4の脚部が重さなった状態で出土している。7は破損が大きく出土状態は十分確認できなかった。これらのことから、1・2は立ったままの状態であったことが想像される。そしてその間に3・5がさかさに置かれ、4・6・8は連続させて横にねかせてあったことが想像される。

2B区、KSD27Bの遺構状況(第87・88図 PL.27・28・29)及び出土遺物(第93・94図)については第Ⅶ章第1節で述べてある。高坏は3個体が出土している。この高坏の下からは甕類の出土があるが、層位的にも別のまとまりの遺物である。高坏9は立った状態であったが、10は横に倒れており、8はほとんど逆転に近い状態であった。9・10は立ててあったことが想像されるが、8は完全



第142図 高环出土状況実測図

なさかさまではない。この部分が土塊状になっていたものか又は何かにかぶせたためにそのような状態になったのであろう。

3 B区、KSK22の遺構形状(第117図 PL.41)及び出土遺物については第Ⅶ章5節に述べてある。高坏は3点(2~4)が30cm~40cmの範囲にまとまって出土している。いずれも完形であった。2と4の高坏は立ったままの状態で出土しているが、3は横に倒れている。3点とも立った状態であったことが想像される。これらの高坏をとりかこむように20cm大の礫が1m×1.5mの範囲に出土している。断面からもわかるようにこれらの礫はほぼ一定のレベルで出土し、高坏はその礫直上から出土している。

これら3遺構での高坏の出土状態を見たが、この他に高坏が多く出土している遺構としてはKSK22のすぐ北側で検出されたKSK21がある。KSK21の高坏は残存率も底く、1ヶ所にまとまることはなかった。KSD16では高坏1と2が立っていたものであれば、この場で祭祀的行為がなされたと考えるべきであろう。KSD27Bでも高坏9・10が立っていたものであれば、やはりこの場で祭祀的行為が行なわれた結果とみるべきであろう。これらに対しKSK22では高坏が礫の真上にまとまって出土していること等から墳墓と考えることもできる。これらの高坏は墳墓に伴う副葬品であった可能性もある。

土器集中箇所における土器廃棄の状況は以上のようにまとめることができた。祭祀の様相のみられる廃棄については、坏類を主体とする廃棄と高坏類を主体とするものがあり、坏類を主体とするKSD27A・KSD9Bなどの場合には坏類が他の器種と共に廃棄されていることがわかった。また、高坏の場合は高坏だけを単独で廃棄することが多い。また、大型土器を主体とする廃棄(KSD25A)では器種別に土器が配置される傾向が見られた。高坏類の廃棄では高坏を立てたものと横に倒したものとが混在していることが多かった。

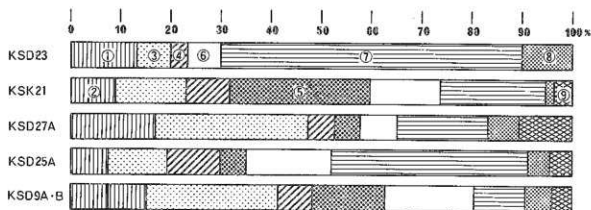
このように土器の廃棄状態から祭祀的行為が行われたことが予想されたが、その祭祀の実像については未知の部分が大きいと言わざるを得ない。また、祭祀的行為に伴うものとして供物などもあったと考えられるが、これらのものが自然遺体として残ることは難しい。今後は坏や、甕等土器の中の土の分析も考えてみる必要もあろう。

(2) 遺構別器種別組成率について

土器廃棄について検討した遺構から出土した土器の器種別割合について調べてみた。これらの遺構で出土した土器はほぼ同時期に廃棄された一括性の高いものである。また、これらの遺構は祭祀的廃棄の傾向がみられるため、一般的廃棄と考えられるKSD23についても検討し、これらの遺構と比べてみることにした。KSD23で出土した土器は2.5m×1m程の範囲に折り重なって出土したもので、ほとんどが破損した状態で残存率の底いものであった。土器廃棄における配列の様相はみられず、特殊な遺物も出土していない。

器種別割合の組織表作成にあたっては残存率の低いものであっても実測図化が可能なものをすべて対象として数えてある。口縁部、底部、脚部等の点数を組織表に記載し、同一個体となる可能性の高い胴部破片などは対象外とした。

一般的廃棄と考えられるKSD23の器種別割合についてその特徴を考えてみたい。KSD23はK第Ⅲ期(5)の時期に比定される遺構である。KSD23は土器量は多かったが前述のように残存率が低く、小片化した土器が大半を占めている。実測できたものは30点程にとどまっている。器種は他の遺構に



第143図 造構別器種比率

第22表 造構別器種比率表

	器 種	KSD23		KSK21		KSD27A		KSD25A		KSD9A・B	
		(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)	(1)	(2)
須 恵 器	① 坏	100.0	13.3	40.0	3.5	43.8	7.4	14.3	1.1	25.0	3.8
	① 坏 蓋	—	—	—	—	56.2	9.5	71.4	5.3	25.0	3.8
	② その他蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	15.0	2.3
	② 高 坏	—	—	20.0	1.8	—	—	—	—	5.0	0.8
	② 皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	② 器 台	—	—	—	—	—	—	—	—	5.0	0.8
	② 平 瓶	—	—	—	—	—	—	—	—	5.0	0.8
	② 提 瓶	—	—	20.0	1.8	—	—	—	—	—	—
	② 長頸壺	—	—	—	—	—	—	—	—	5.0	0.8
	② 短頸壺	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
土 師 器	② 甕	—	—	20.0	1.8	—	—	14.3	1.1	15.0	2.3
	合 計		13.3		8.9		16.9		7.5		15.4
	③ 坏	7.7	6.7	15.4	14.0	36.6	30.4	12.6	11.7	30.9	26.2
	④ 模倣坏	—	—	3.8	3.5	5.1	4.2	3.4	3.2	4.5	3.8
	④ 模倣坏蓋	3.8	3.3	5.8	5.2	1.3	1.1	8.0	7.4	3.6	3.1
	④ 高 坏	—	—	30.0	28.0	6.3	5.3	5.8	5.3	17.3	14.6
	④ 埴	—	—	1.9	1.8	7.6	6.3	2.3	2.1	2.7	2.3
	④ 小型壺	—	—	—	—	—	—	1.2	1.1	1.8	1.5
	⑥ 壺	3.8	3.3	15.4	14.0	8.9	7.4	16.1	14.9	20.0	16.9
	⑥ 把手付壺	3.8	3.3	—	—	—	—	2.3	2.1	0.9	0.8
	⑦ 甕	53.9	46.8	23.1	21.0	21.5	17.9	24.1	22.3	7.4	6.2
	⑦ 台付甕	15.5	13.3	—	—	—	—	18.4	17.0	4.5	3.8
	⑧ 甕	11.5	10.0	1.9	1.8	7.6	6.3	4.6	4.3	6.4	5.4
	⑧ 高 台	—	—	1.0	1.8	—	—	—	—	—	—
	⑧ 埴	—	—	—	—	5.1	4.2	—	—	—	—
	⑧ 大型埴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	⑧ 把手付鉢	—	—	—	—	—	—	1.2	1.1	—	—
	合 計		86.7		91.1		83.1		92.5		84.6

※(1)＝須恵器または土師器内での器種別割合

(2)＝須恵・土師合わせた全体内での器種別割合

比べて種類が少なく、特に須恵器は坏類以外の出土はなかった。また、土師器類でも坏、甕、壺と日常的に用いられる器種が目立っている。甕は46.8%と約半数近くの割合であり、これに台付甕を含めると60%を占めている。このように甕が大量多く出土したのは甕が直接火を受けることから破損することが多かったと考えられる。この甕に対して甕は10%と少く、坏類では須恵器が13.3%に対し土師器は10%（模倣坏類を含む）と須恵器の割合が多くなっている。また、高坏の出土はみられなかった。

KSD26はK第Ⅲ期③の時期の遺構である。この遺構からは坏類が20.5%出土しているのに対し高坏が30.0%と大きな割合を占めていることが目立つ。須恵器では、坏が2.5%と少ないが、高坏、提瓶、甕など他の遺構ではあまり出土しないものがある。土師器では、甕が21.0%とKSD23に比べると1/3程度と少ないが、甕は14.0%とKSD23の4倍の数値を示している。

KSD27AはK第Ⅲ期②の時期に比定される遺構である。この遺構では坏類の占める割合が大きく、土師器の坏類は35.7%を占め須恵器、土師器と合わせると52.6%にもなる。これらの坏類は残存率の高いものが多くみられたが、高坏は5.3%と少なかった。

KSD25AはK第Ⅲ期⑤の時期のものである。この遺構では甕が22.3%と台付甕17.0%と甕類が約50%を占めている。また、壺の占める割合も14.9%と他の遺構と比べると大きい。甕、壺、甎などは残存率も高く完形に近いものが多くみられた。

KSD9A・BはK第Ⅲ期⑥の時期の遺構である。この遺構ではKSD27Aと同様に土師器の坏類が33.1%と大きな割合を占める。これらの坏は残存率が高いものが目立っている。壺は18.4%を占めるのに対し甕類は10%と少ない数値を示しKSD23と比べて甕類が少ないことが目立っている。須恵器では他の遺構であまりみることでできない半瓶、器台、長頸壺、甕などが出土しているが、いずれも残存率の低いものであった。

以上のようにKSD23を一般的廃棄と考え、KSD23の上器の器種別割合と、他の遺構との器種別割合の相違について検討してみたが、これらの遺構の成立した時期及び土器が廃棄された時期の違いがあることは念頭に置いて考えるべきであろう。使用されていた土器の器種別組織率は時期によって変動するものであり、一概に遺構別に比べることは無理があるであろう。ここで取り上げた5つの遺構では上器の器種別割合においては個々にまったく違う様相をみせ、特に共通した点をみ出すことはできなかった。KSD23では甕類が多く、KSD21では高坏が目立ち、KSD27AやKSD9A・Bでは坏類が多く、KSD25Aでは甕類が多かった。このような器種別割合は時間的な背景にも影響されているだろう。また一方それぞれの遺構の性格や土器廃棄の状況も大きく反映したものと考えて良いだろう。第1節の土器廃棄について検討されたことの中でこれらの土器の器種別割合の結果も考えていくべき必要があるであろう。

第3節 古墳時代の集落景観

(1) 第Ⅰ期・第Ⅱ期の集落景観

坂尻遺跡で検出された当期の遺構群は、前述したごとく発掘区域東端で第Ⅰ期のものが、3EⅩを中心として第Ⅱ期のものが検出されている。それぞれの時期の竈穴状遺構、住居跡とした遺構の時期決定については多くの問題点を残したものの、おおたは巾3～4mの中規模程度の溝状遺構をめぐって集落が展開していたとみて間違いないと思われる。本項では、集落構造の変化を遺跡内で論及できるまでの資料がえられなかったため、当期の居住域の変遷要因の問題についてと、中遠地域での当期の歴史的推移の素描を前章で述べた土器編年（組成）の中での両期点の要因、墳墓の諸形態から導き出してみたいと考え、不十分ながら坂尻遺跡第Ⅰ期・第Ⅱ期のしめくりとしたい。

居住域の変遷要因については、本報告の自然科学編加藤氏論文を参考にしながら検討してみたい。加藤氏によると、発掘区域西端にて検出された砂礫層は、古名栗川による堆積物という結果がえられたとした。今回の調査ではこの砂礫層中より、第Ⅰ期～第Ⅱ期の遺物が出土していることから、古名栗川が当期まで存在していたことは十分に検証されたといえよう。古名栗川は縄文中期頃の浅海退により成立し、古墳時代前～中期あたりに行った海退現象でふたたび埋没したと考えられている。このことは、海退現象が当時の自然堤防の発達をうながし、小中河川の成立と、その埋没に強く関り合っていることがわかる。第Ⅰ期の遺構群が発掘区域東端に見られたのは、後背湿地と古名栗川や原野谷川の氾濫から影響の少ない山裾部付近の安定した自然堤防上（原野谷川水系？）に占地したと思われる。この第Ⅰ期の居住域とされた自然堤防上には、弥生中期に認められた浅海退があった頃にも当時の土器が出土していることから、海退時には安定した自然堤防であったと理解される。また、同時に現原野谷川東岸の自然堤防上に立地する原川遺跡でも弥生中期前半期の遺構、遺物群が発見されたことから、坂尻遺跡付近ではいくつかの安定した自然堤防が成立していたことが考えられる。

第Ⅱ期になると、次第に海退現象が進行していくなかで、後背湿地の縮小、自然堤防の安定化をうながした事は事実であり居住域の移動、拡大は可能になったことであろう。すなわち、第Ⅱ期の人々の居住域の移動が行われた要因は、海退現象による生産領域の拡大、古名栗川の水利利用を考えた結果より適切な占地を行なったためと考えられる。こうして、古名栗川が完全に埋没する頃、坂尻遺跡第Ⅲ期の人々は鉄製農具を多用しながら縮小した後背湿地跡を新たな生産領域として開発していったことと思われ、第Ⅰ期・第Ⅱ期の頃にくらべるとさらに集落の拡大が見られる。

坂尻遺跡では以上のように、第Ⅰ期・第Ⅱ期と第Ⅲ期との間には集落規模の上において大きな画期が認められた。こうした画期がいかなる事象を現わしているのか、前章で述べた土器の画期との関わり合いから類推してみたい。

第Ⅰの画期は、やはり前節にて第Ⅰ段階とした時期に見られた今までの弥生後期からの強い伝統をうけた壺形土器を利用しながらも、外来系の高坏、甕類を享受しはじめた頃⁽⁸⁷⁾に求められよう。土器のうえからだけで推定せざるをえないが、こうした外来系の流れを少しづつ受け入れはじめ、それが高坏、甕類に多く現われる点に注目したい。高坏などの供膳形態についての变化は祭儀に関係した変化と見られ、甕については何らかの特殊な内容物の伝播に関与していると考えられ、壺形土器の在来性と小形高坏、甕類の外来性のものが共存するという二重構造を生み出したと考えられる。この頃の畿内は、女高遺跡の小形高坏、河内型の庄内甕横紋タタキ甕を尊重するならば、久山直後の段階、庄内

⁽⁸⁷⁾ 後背湿地が縮小し、坂尻遺跡北西部にひろがった土地が水稻耕作の適地になったと思われる。

⁽⁸⁸⁾ 6C前半より、高代山古墳群などで見られる初期群集墳化がはじまり、6C後半～7C初期頃に菅ヶ谷横穴群や長者平古墳群など本格的群集墳が登場する。これらの群集墳には一般的に多くの鉄製武器（鉄剣、馬具）などの副葬が見られ、第Ⅰ期・第Ⅱ期の頃にくらべると、一般農民への鉄製品の普及度にはかなりのひらきがあったと思われる。

⁽⁸⁹⁾ ⁽⁹⁰⁾ すでに中嶋氏により欠山式が成立していた天竜川以西とは異なり、中遠地域での古式器師器の出現が突然行なわれ、大画期が認められる点指摘されている。第Ⅰ段階の壺形土器は従来の弥生後期の壺とは識別が難しく、古式土師器化を認知する上で在来系の壺型土器の型式変化と第Ⅰ段階の土器組合を明らかにすることが、中嶋氏の疑問点を解明する方法だと思われる。

⁽⁹¹⁾ ⁽⁹²⁾ 小形高坏には比田氏の論文がある。氏によると機軸の坏部をもつ小形高坏をA類とし中部郡戸内～畿内にかけて主に分布し、坏部に横をもつものをB類とし主に北陸地方に分布し、その両方が分布する地域として東海、関東をあげている。さらに、小形高坏の地方伝播は、小形丸底甕以前になされた特殊な状況が看取されるものと、注目すべき見解を加えている。女高遺跡の場合、口唇部に面とりがある点、やや内湾するII段部をもつ点から欠山式の高坏部と類似

期（纏向第3期）と考えられる。なお、纏向遺跡では他地域の土器を多く搬入している時期で、各地との交流がはじまっていたことが解るが、当地域のものはまだ少ないようである。

第Ⅱ段階になると弥生後期以来の在地系壺形土器は前段階から見ると急激な変化を受ける。また、それとともに外米系の壺形土器、小形丸底埴、小形器台、鉢などの小形土器が多く伴う点、S字口縁の壺形土器が多く出現する点から、第Ⅰ段階よりさらに強く外米の要素が現われた段階で大きな画期が認められる。さらに注目すべきことに、小深田西1号方形周溝墓に見られるように、当地では弥生中期以来の墓制であった方形周溝墓にも鏡の副葬が行なわれている点などから、墓制にも強い外米（畿内）要素の規制が働きはじめた頃と思われる。こうした状況下の中で、さらに畿内的といわれる松林山古墳⁽⁹⁵⁾、新豊院山D2号墳、赤門上古墳⁽⁹⁶⁾などの鏡、鉄製武器、農具、玉、銅製武器などを副葬する前方後円墳が当該段階で成立したと考えられる。坂尻遺跡付近では成立した前期古墳が認められない点から、太田川水系より畿内の首長層の出現がやや遅れると見られるが、土器の画期から見ると坂尻遺跡の第Ⅰ期の人々は確実に畿内的な政治機構の波を受けていたことが理解される。本段階は布留第Ⅰ段階（纏向第4期）に併行期が考えられる。藤井氏によると、纏向式（纏向第2～第3期か？）遺跡の場合搬入が多いのに対し、布留式土器段階では搬出が多くなる点から、纏向式期を政治連合性の強い段階、布留式期を政治的統一性の強い段階と位置づけられている。こうした布留式の地方伝播（畿内的政治機構の伝播）を当地域でも本段階にて色よく受けたことは、畿内の動向と一致した現象で注目される。

第Ⅲ段階になると小形器台が減少し小形丸底埴（鉢形も少量認められる）と高杯のセット関係が目立つようになる点、S字罎が少なくなってきた点（ほぼ消滅か？）、壺形土器にも複合口縁のものが減少し球形の埴形や長胴のものが目立ちはじめた点から、第Ⅱ段階がいっせいに外米の要素を受けた後、本段階になるとふたたび在地的消化が見られたと理解される。この事象から、本段階は第Ⅱ段階で享受した畿内的政治機構を個々の地域ごとの集団が、独自に消化しはじめた段階と考えられ、より強く畿内的政治体制を施行していった時期と位置づけられよう。坂尻遺跡付近では、和田岡に春林院古墳をはじめとして前方後円墳である各和金塚古墳⁽⁹⁶⁾、瓢箪古墳⁽⁹⁷⁾のいずれかの古墳が成立していたと考えられ、原野谷川水系でも本格的な畿内型首長層が台頭した時期ととらえられる。併行関係としては第Ⅳ段階の須恵器の共伴例との関連、器台の減少化から布留2式古墳段階付近を考えている。

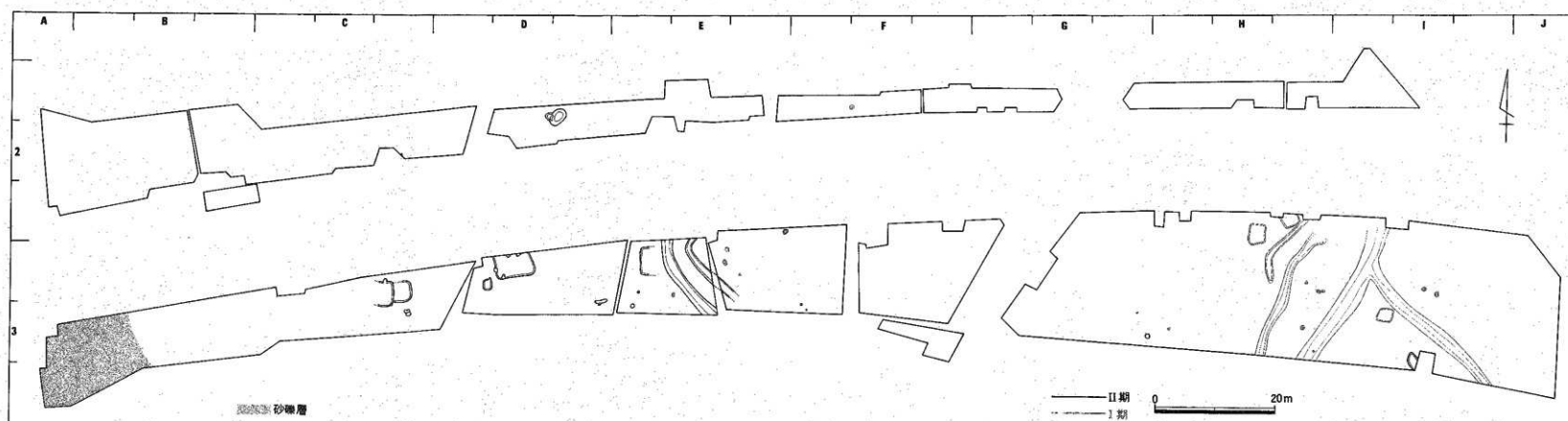
第Ⅳ段階の古墳段階で台付罎の減少と長胴罎の増大、器台はほぼ消滅し、高杯と短頸の小形丸底埴（鉢形も少量認められる）のセットが確立した時期と思われる。新段階では第Ⅲ段階以来続いてきた

点が見られ、伊勢～尾張にかけてA類と欠山式との接触の中から生まれてきた可能性を指摘しうる。時期としては伊勢市中栗山遺跡SXI中にA類と欠山式との共伴例が最古で、B類はおおたけ遺跡SKI、元屋敷遺跡整穴遺構などに見られ、欠山段階との共伴例は知られていないため、女高遺跡の場合の小形高杯は欠山段階直後としておきたい。

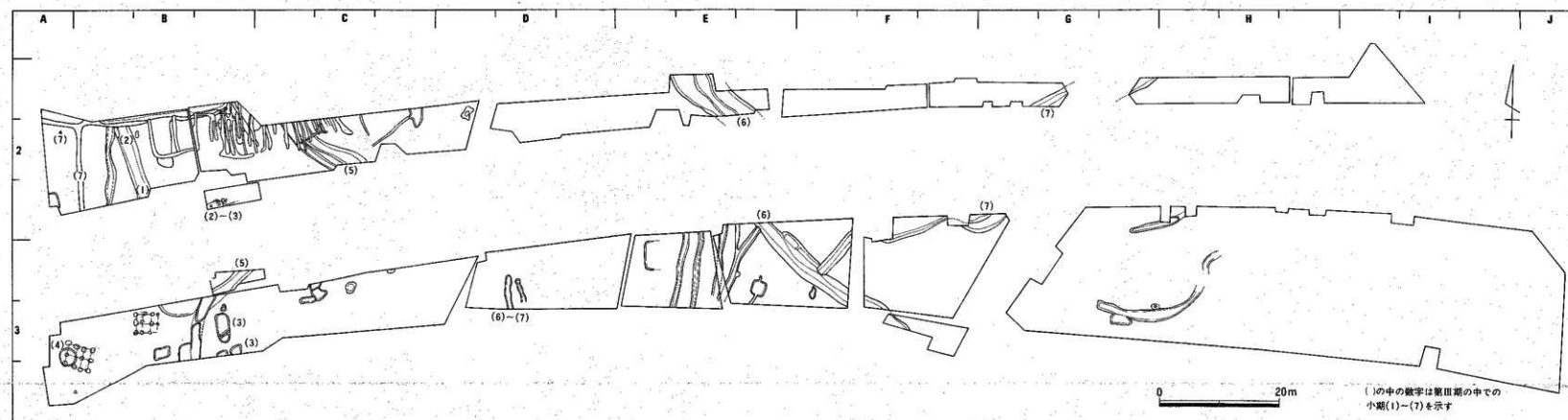
タタキ埴については、庄内型に多く見られる口縁部のつまみ上げの手法がない点から、畿内の庄内型とはやや異なる。胎土からは金銅器を多く含むことから搬入品と考えられ、岡崎市伊保遺跡などで見られるごとく、紀伊～三河にかけての地方から小形高杯とともに搬入されたと思われる。

*) 向坂氏によると、松林山古墳のような壺式石室と豊富な副葬品、順輪をもつ大形の前方後円墳と、赤門上古墳のような木棺直葬、やや少ない副葬品、全長60m程の中形の前方後円墳と2つの聚が遠州の発生期の古墳に見られるとし、その被葬者である首長の性格が前者が畿内的、後者が在来的なものであったと指摘されている。注目すべき見解であるが、本稿の目的とは異なるため別稿にて論じてみたい。

**) 和田岡の前方後円墳の成立期については不確定ではあるが、第Ⅲ段階が遅れても第Ⅳ段階には成立していたと考えられる。最近の吉岡氏の論考に詳しく述べられている。



板尻遺跡古墳時代第Ⅰ期・第Ⅱ期遺構全体図



板尻遺跡古墳時代第Ⅲ期遺構全体図

小形丸底埴が平底化し、高坏がさらに小形化する点、台付甕が消滅する点など、供膳、煮沸形態とも第Ⅰ段階より続いた古式土師器的組成を呈する土器群が終末を迎える時期である。併行関係としては宮之腰Ⅰ式に伴う須恵器がT K 43併行期が知られるため、第Ⅳ段階はT K 208を伴う布留Ⅲ式あたりに該当すると思われる。

注目されるのは、新段階に見られた碗形の坏が、宮之腰Ⅰ式段階になると須恵器の坏、蓋とともに組成率が一段と高まることである。これらの坏は佐原氏らの言う銘名器に該当すると思われる。佐原氏によると「銘名器の普及が⁽⁹¹⁾中略—それは単なる食文化・食器の普及にすぎなかったのか、背後に政治的、社会的変革や家族制度の変貌などが係わっているのか、これらは今後追求すべき好例の課題であろう。」と述べられており、古墳時代の土器文化の大転期を知る上で卓越した見解を示されている。すなわち、宮之腰Ⅰ式以後の銘名器の普及は古式土師器組成土器群の中では見られなかった現象であり、宮之腰Ⅰ式以後の人々の中には家族ごと（個人？）の食生活単位の分化が認められ、そこから各家族の分化と意識の向上、家父長制の台頭が確認される。こうした食生活単位の分化は当時の経済、政治、祭祀、社会状況からくものと考えざるをえない。坂尻遠跡付近でも、高代山古墳群などの6世紀前半代の初期群集墳が出現してくる状況からも類推しえると思われる。このような状況を出現させた要因は、前述したごとく鉄製農具の普及や新田開発の進展などによる農業生産力が向上したことにより、家族単位の個別化が格段に進展し、さらに生産構造の個別経営化が萌芽しはじめたと考えられる。さらに人々は、長者平古墳群のような小石室をもつ密集型の群集墳や、菅ヶ谷横穴群などの祭祀を成立させようだけの、個別経営化を行なっていく姿を、坂尻遠跡の第Ⅰ期・第Ⅱ期と第Ⅲ期との間の大転期の中に求めることが可能ではないだろうか。

最後になりましたが、本報告をまとめるにあたって、以下の人々の御教示、協力をえました。（敬称略）とくに土器の作図、原稿に関しては山崎、柴田の両氏の他に、高野、進藤氏、文献の借与や有益な御教示を多数してくださった、中嶋、向坂、柴田、吉岡の各氏、また、女高遺跡の土器について再実測の機会と本報告書への掲載を承諾して下さいた松本、岩井の両氏には記して感謝の意を表明したい。

向坂鋼二、佐藤由紀夫、鈴木敏則、中嶋郁夫、山崎克己、高野由美子、進藤貴和子、吉岡伸夫、永井義博、松本一男、岩井克允、水島和弘、坂巻隆一、渋谷正彦、山本浩二、中野宥、渡辺康弘、柴田稔、山口和夫、大石佳弘、八木勝行、鈴木隆夫、丸山博信、栗原雅也、保坂康夫、新井端

(2) 第Ⅲ期の集落景観について

古墳時代の第Ⅲ期は坂尻遠跡に須恵器が導入された時期又は須恵器の導入が予想される時期である。5世紀後半から、奈良時代直前の7世紀後半頃までの期間である。この第Ⅲ期はさらに7期の小期に

*) 銘名器の当地域での分析は中嶋氏からえるものが多く、氏によると弥生以来の高坏の容量変化などとともに銘名器の認定を試みられている。今回も高坏の小形化が第Ⅱ段階から強く認められた点や、佐原氏も指摘することく第Ⅱ段階から強く現われてくる小形土器群についても、首長権継承儀礼、祭祀儀礼に関連した銘名器であった可能性があり、これらの土器群のもつ歴史的意味づけが重要になってきている。今後の中嶋氏の動向に注したい。

**) 本格的群集墳といえるものは、長者平古墳群など小石室をもつものや、横穴墓群といったグループといえようが、第Ⅲ段階に出現する各和金塚、龍塚古墳などの中期形の首長墓の流れと区別するため、ここでは初期群集墳とし、中期形の首長墓→初期群集墳→群集墳、横穴墓群の流れを考えた。

**) 遠江の群集墳と横穴墓群の関わり合いを論考したものに古岡氏などにより詳しく述べられている。

区分されるのでこの小期に従って述べていきたい。また、今回調査された区域は東西約300m南北約50mの細長い範囲で、中央を通る国道1号によって北側と南側に分けられている。調査範囲は坂尻遺跡のごく一部であることから遺跡の全様を知ることは難しいが、今回の調査の成果及び、第2～第4地点での成果の中から古墳時代の第Ⅲ期の集落景観について若干の検討をしてみたい。

第Ⅲ期(1) 2B区のKSD27Bで出土した土師器の甕を主体とする土器群の時期であるが、調査区域内ではこの(1)期に該当する遺物の検出は他にみられなかった。このKSD27は静岡大学の加藤芳明先生の調査で明らかとなった原野谷川の支流と考えられる「古名栗川」(自然科学編P5 第4図)が埋没してきた最終期の状態である可能性もある。古墳時代の第Ⅰ期・第Ⅱ期の生活区域をみると、第Ⅰ期では3H・3I区であったものが第Ⅱ期では3E・3F区へと西へ移動している。第Ⅲ期に入るとさらに西へ移動しているが、これは「古名栗川」による自然堤防が形成されたことにともない、2B・3B区での生活が可能になったためと考えられる。今回の調査では住居跡等の遺構は検出されなかったが、「古名栗川」の自然堤防上に第Ⅲ期(1)の時期の遺構が成立しているものと考えられる。

第Ⅲ期(2) 2B区のKSD27Aで出土した須恵器を伴う土器群の時期であり、KSD27Bの土器群の5m程北で検出されている。KSD27AではKSD27Bと同型態の甕が出土しているため、この両土器群の時間差はあまりないと考えられる。この時期の遺物は他の地区ではほとんど出土しなかったが、3B区のKSP12の坏身3・4(第116図)やKSK23の坏身1・2(第118図)などがわずかに出土している。KSP12・KSK23などはKSD27と同様に「古名栗川」の最終期である可能性もある。

2B区で検出された竪穴住居跡、KSH4・KSH5は出土した甕類から、この時期又は第Ⅲ期(3)の時期の住居跡と考えられる。第Ⅲ期(2)の時期の生活域は(1)の時期と同じく「古名栗川」自然堤防上に形成されていたであろう。

第Ⅲ期(3) 3B区のKSK21で出土した土器群の時期である。KSK21のすぐ南で検出されたKSK22、KSK23も同時期の遺構と考えられる。第Ⅲ期(3)期の遺物も他の地域ではほとんど検出されておらず、この時期においても生活域を「古名栗川」の自然堤防上に求めていたと考えられる。

3B区では掘立柱建物KSB1・KSB2及び竪穴住居跡KSH6が検出されている。KSB2は第Ⅲ期(4)の時期のKSI6の床面で検出されていることから、(4)の時期より古い時期の建物と考えられる。KSB1・KSH6については時期を決定する十分な手だがないが、第Ⅲ期(3)～(5)の時期の遺構と考えたい。なお、奈良時代で扱うことになった3B・C区で検出された掘立柱建物、NSB28～35についても古墳時代の建物群である可能性もあり、3B区における古墳時代の景観の復元はこれらの建物群を含めて、さらに検討する必要があるだろう。

第Ⅲ期(4) 3A区のKSI6で出土した土器群の時期である。この時期の遺物も他の地域ではほとんど出土していない。KSI6は土器の廃棄場とも考えられ、生活域は近かったと思われる。

以上のように第Ⅲ期(1)～(4)の時期の遺構はほとんど「古名栗川」の自然堤防上に形成され、その生活域は「古名栗川」の流路に従い、北西から南東方向に広がっていたと考えられる。

第Ⅲ期(5) 3B区のKSD25Aで出土した土付甕等の大型の土師器を出土した土器群の時期である。第Ⅲ期(5)の時期を主体とする遺構には他にKSD23がある。このKSD23は調査区の限界で検出されたため、その流路の方向は十分確認できなかった。KSD25が北東から南西への方角をもっていることから、KSD23が大きく南西へ流路を向けている可能性も高く、KSD23とKSD25は同一の溝とも考えられる。(5)の時期の遺物を主体とする遺構は今回の調査区から他には検出されなかったが、KSD25Aより北西へ110m程の地点(坂尻遺跡第2地点 凡例及び第3図)の状で一括して

第23表 環類遺構別個体数表

遺構名	時期	杯 身			杯 蓋		
		F 類	G ₁ 類	G ₂ 類	E ₁ 類	E ₂ 類	F ₁ 類 F ₂ 類
KSD25A	(5)					2	
KSD8A	(6)	3	2		2	1	1 1
KSD9	(6)	2	2	1		3	1
KSD7	(7)						2 0
KSD8B	(7)		4	2			3 9

出土している。このことから第Ⅲ期(5)の時期の生活域はC区よりも西の地域と考えられる。(5)期の遺物はこの他にもE・F区のKSD8A、KSD9が出土しているが、これらの遺構は(6)・(7)期の土器を主体とするものであり(5)期の遺物は(6)・(7)期まで使われていたものと考えられる。(5)期は(4)期又はそれ以前と比べると遺物量が多く、拡大期を迎えたことを窺わせる。

第Ⅲ期(6) KSD8A、KSD9で出土した土器の時期である。KSD8AはKSD8Bとつながる溝であり、KSD9はその溝に接続する溝であろう。これらの溝はほぼ同時期に存在しKSD9では(7)期の遺物の割合が少ないことからKSD8より古くから存在していたと考えられる。

(5)期及び(7)期の土器が共存して出土する遺構の時期を第Ⅲ期(6)としたが、(5)期と(7)期をつなぐ時期であり、期間的には短かいと考えられる。しかし、この時期の遺物量は多く、(5)期から続く拡大期でもある。(6)期は(7)期の土器が共存して出土することから、その景観については(7)期で考えるべきであろう。

第Ⅲ期(7) KSD8Bで出土した土器群の時期である。杯身G類、杯蓋F類がこの時期に対応する。この杯身G類、杯蓋F類は前述のようにKSD8A、KSD9でも出土している。KSD8及びKSD9は(6)期に形成されたと考えられるが、KSD9は幅2.5m、深さ0.8mを測りKSD8は幅4.8m、深さ0.7mとさらに大きい溝であり、古墳時代では最も大きい規模をもっている。このKSD8では護岸用の杭列が検出され、今回の報告では奈良時代編で扱うこととしたが、古墳時代の杭列である可能性も高く、KSD8A、8Bで出土した木製品の鋤・鍬類はこの護岸工事で使用したものとも考えられる。これらの溝に近接して2グループの掘立柱建物群が存在している。東のグループはKSD8BとKSD9とに挟まれた地域に立地するNSB6～10である。西のグループはKSD9の西側に隣接して立地するものでNSB11～13である。これらの掘立柱建物は奈良時代編で扱っているが、それらの中に古墳時代の掘立柱建物があることも十分考えられる。これらの溝から多量の古墳時代の遺物が出土していることからその可能性は高いと言えよう。また、KSD8A、KSD8B、KSD9では古墳時代の遺物直上又は同レベルで奈良時代の遺物が出土している。このことからKSD8・KSD9は(6)の時期から奈良時代にかけて連続して機能していた溝であり、官街として坂尻遺跡が成立する黎明期を象徴する遺構といえよう。(7)期の杯身G類、杯蓋F類はかなりの広い範囲で出土している。2GⅠKのKSD7（KSD7もKSD8Bに続く溝と考えられる）、3D区のKSD20、3B区のKSD25Bの上層などである。KSD25Bでは杯蓋のF類が4点出土している。このように(7)期はKSD8やKSD9というかなり大きい溝を管理し、その流域に生活の中心を置きながら広い範囲で活動していたことが窺える。また、KSD8、KSD9の流域では住居跡が存在せず、掘立柱建物の検出に限られたことは、この時期にはすでに単なる農業集落ではなかったことの現われであろうか。このような遺跡の性格は祭祀的色彩のみられるKSD25の時期、つまり(5)期から始まっていると考えたい。

第4節 坂尻遺跡の現状と今後の課題 あとがきにかえて

古墳時代前期に形成されたと考えられてきた坂尻遺跡は、遺跡の東端部で弥生時代中期の土器片が出土したことで、その時代がさらにさか上ることとなった。弥生時代以後「原野谷川」、そしてその



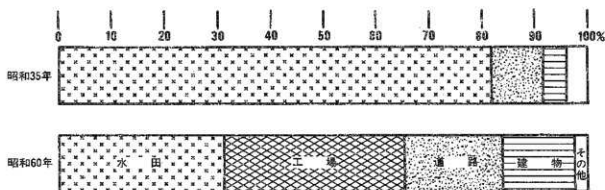
第146図 坂尻遺跡周辺地図

支流と考えられる「古名栗川」によって形成された自然堤防上を多くの人々が生活の場としてきたわけである。坂尻遺跡は古墳時代後半から奈良時代にかけては最も栄えた時期であり、それ以後も東国への道である「東海道」と共にそれぞれの時代を過してきた遺跡である。

昭和31年に製作された土地宝典（第146図 帝国地図発行）には「坂尻」の字名がみられ、「畑台」（ハタイ）、「坂尻」（サカジリ）、「宿口」（シュクグチ）、「溝地」（ミゾチ）を国道1号が開通することとなる。この坂尻の「坂」は遠州三山の1つ灰王山油山寺への道「油山道」が「石ノ形」の東を北に向って通るが、その丘陵を下る坂という意味である。

今回の発掘調査の発端となった国道1号袋井バイパスの建設工事により、この坂尻はかつてなかったほどの大変革の時を迎えている。昭和57年度に工事予定区域内の発掘調査が終了すると掛川市と袋井市を結ぶ同心橋の橋梁かけ換え工事や道路工事が次々に行われ、60年2月には同心橋が開通し、この地域の様相は一変してしまった。今後坂尻の地に起きてくるであろう変動の波は、24年前に国道1号が開通したころを上まわるものになるであろう。

坂尻遺跡は東西約500m、南北約460mに広がり、その範囲面積は177,400㎡にもなる。国道1号が開通する以前の工場、道路、住宅などの開発面積（第147図）はわずかにその約20%程度であったが、国道1号袋井バイパスが開通する現在では約70%にも達している。水田地域は約30%、55,000㎡がわずかに残るだけであり、今回調査された8,000㎡は遺跡全体のわずか4.5%、1/22にすぎない。昭和55年12月に開始された坂尻遺跡の発掘調査は、膨大な量の考古資料を提供することとなったが、坂尻遺跡の姿はそのごく一部をのぞいたにすぎない。この地区では現地表面に土盛をして、その上を国1バイパスが通ることになり、工事によって直接遺跡が破壊されるものではない。しかし、発掘調査は長い年月十の中で保護されてきた遺跡を破壊することで成果が得られるものであり、科学的な発掘調査が行われるようになってまだその歴史は浅く、発掘調査の技術は評価される所まで達していないとい



第 147 図 坂尻遺跡内土地利用状況

うのが現状であろう。現代の私達にとって「開発」は避けられないものであるがその「開発」によって多くの遺跡が次々と消えていっていることも現実である。開発行為による遺跡保護の名のもとで行われる発掘調査が、個人の考古学的野心や好奇心を満たすものであってはならない。

今後さらに急加速的に起きてくる開発の中での発掘調査でより膨大な資料が提供されるであろうが、発掘調査そのものは決して遺跡保護ではありえないということを認識しなくてはならないであろう。坂尻遺跡はその長い歴史の中で今はじめてその姿をみせはじめたところであり、今後は坂尻遺跡をより多くの人々に理解してもらい、数十年、数百年という観点と、広い視野の中でその将来をみつめていくことが必要であろう。

坂尻遺跡の発掘調査及び、整理作業、報告書作成には県内の研究者の方々をはじめ多くの方々から御指導、御助言をいただいたことを深く感謝し、お礼申し上げます。

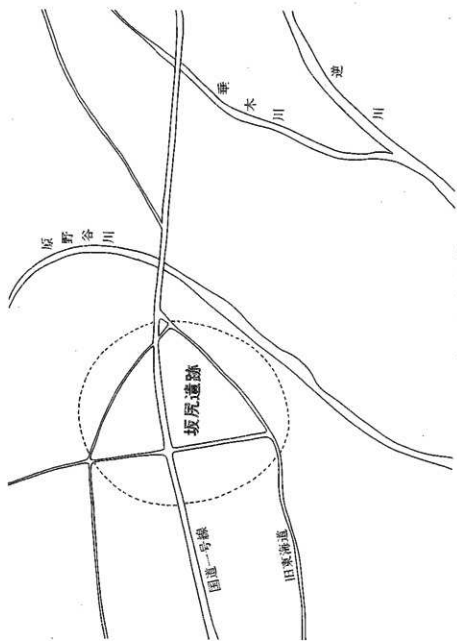
引用・参考文献

1. 中村 浩 1977 『和泉陶器窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』 福寿房
2. 平安学園考古学クラブ 1966 『陶器古墳群Ⅰ』
3. 静岡県教育委員会 1980 『静岡文化財調査報告書第30集』『静岡県歴史の道調査報告書』—東海道—
4. 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1983 『埋蔵文化財発掘調査概報』
5. 静岡県考古学会 1979 『須恵器—古代陶質土器—の編年』『静岡県考古学会シンポジウム2』
6. 杉原莊介・大塚初重 1971 『土師式土器集成』
7. 岡部町教育委員会他 1982 『横浜古墳群板沢支群発掘調査報告書』
8. 藤枝市教育委員会他 1981 『日本住宅公開藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』—奈良・平安時代編—
9. 文化庁他 1980 『日本の美術』—須恵器— 至文堂
10. 門脇祐二・甘粕 健 1982 『民衆史の起点』
11. 磐田市市誌編集委員会 1976 『磐田の古代史』
12. 富士市教育委員会 1983 『三新出遺跡発掘調査報告書』
13. 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1983 『原川遺跡』—袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査—
14. 浜松市道跡調査会 1984 『半田山古墳群A小支群・半田山B遺跡』
15. 浜松市道跡調査会 1983 『岡崎浜松工場内遺跡第Ⅴ次発掘調査概報』
16. 清水市教育委員会 1980 『穴道Ⅰ遺跡』
17. 焼津市教育委員会 1983 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』
18. 沼津市教育委員会 1978 『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ』—遺構編—
19. 清水市教育委員会 1980 『飯田遺跡Ⅰ』—昭和54年度発掘調査概報—
20. 掛川市教育委員会 1982 『金鈴原遺跡』
21. 磐田市教育委員会 1982 『新嘉院山墳墓群—D地点調査概報—
22. 浜松市教育委員会 1984 『半田山道跡発掘調査報告書』
23. 静岡市教育委員会 1984 『駿河・伊豆谷横穴墳』—南谷支群第4次発掘調査—
24. 浜松市道跡調査会 1983 『国鉄浜松工場内(梶子)遺跡第Ⅵ次発掘調査概報』
25. 富士市教育委員会 1981 『東平』—西富士道路(富士地区)岳南広域都市計画道路田子浦端港線埋蔵文化財発掘調査報告書—
26. 浜松市道跡調査会 1984 『半田山B古墳群発掘調査報告書(Ⅲ)』—先端産業関連施設予定地内の調査その1—
27. 浜松市道跡調査会 1984 『半田山B古墳群(Ⅵ)初生遺跡発掘調査報告書』—先端産業施設建設予定地内の調査その2—
28. 湖南砂丘遺跡研究会 1981 『西之宮上郷・下郷調査概報』—129号線道路拡大幅改良事業に伴う発掘調査No.2—
29. 袋井市教育委員会他 1982 『十橋遺跡』—第1次調査—『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査その2報告書』
30. 袋井市教育委員会他 1983 『土橋遺跡』—第2次調査—『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査その3概報』
31. 袋井市教育委員会他 1981 『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』—板尻遺跡第1次調査—
32. 袋井市教育委員会他 1982 『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報』—板尻遺跡第2次調査—
33. 袋井市教育委員会他 1983 『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報』—板尻遺跡第3次調査—
34. 袋井市教育委員会他 1984 『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報』—板尻遺跡第4次調査—
35. 浜松市教育委員会 1972 『伊場』—第4次発掘調査月報合本—
36. 袋井市教育委員会 1978 『山本山古墳群』
37. 袋井市教育委員会 1983 『掛の上遺跡Ⅱ』—袋井市掛の上遺跡2次調査報告書—
38. 袋井市教育委員会・掛川市教育委員会 1984 『山下遺跡』

39. 静岡県教育委員会 1981 『静岡県の中世城館跡』
40. 袋井市教育委員会 1972 『袋井市富盛古墳D単位群発掘調査概報』
41. 袋井市史編纂委員会 1983 『袋井市史』一通史編一
42. 袋井市教育委員会 1984 『坂元遺跡』一興道掛川袋井線道路改築工事に伴う緊急発掘調査報告書
43. 奈良国立文化財研究所 1977 『飛鳥・藤原京発掘調査報告Ⅱ』
44. 遠江考古学研究会 1966 『大沢、川尻古墳調査報告書』
45. 川江秀孝 1978 『静岡県下出土の須恵器について』『静岡県考古学会シンポジウム2』 静岡県考古学会
46. 静岡県教育委員会 1979 『静岡県遺跡地名表』
47. 平安学園考古学クラブ 1958 『船橋Ⅰ』『船橋Ⅱ』
48. 掛川市教育委員会 1974 『水産二ツ池古墳群』
49. 焼津市教育委員会他 1970 『宮之腰遺跡』
50. 倉田万郎 1964 『南関東における住居址出土の上師器』『考古学雑誌50巻3号』 日本考古学会
51. 刈谷市教育委員会 1981 『城川遺跡』
52. 金谷町教育委員会 1983 『駿河川2号墳発掘調査報告書』
53. 平野和男他 1968 『地蔵ヶ谷古墳』『東海道新幹線埋蔵文化財報告』
54. 笠井敏光 1983 『日本仏教史研究Ⅰ』『国家と仏教』祈雨祈祀と殺牛馬
55. 利根川章彦 1982 『古墳時代集落構成の一考察』『土曜考古』第5号 土曜考古学会
56. 朝日新聞社 1982 『1983年古代史発掘総まとめ』『アサヒグラフ』
57. 福岡市埋蔵文化財センター 1983 『木製農具について』『埋蔵文化財研究会第14回研究集会資料』
58. 静岡市立立呂博物館 1978 『静岡の歌』
59. 人参義一 1968 『弥生土器から土師器へー東海西部の場合ー』『名古屋大学文学部研究論集XXLVII』〈史学16〉 名古屋大学文学部
60. 一宮市史編さん室 1967 『新編一宮市史』資料編二
61. 島羽市教育委員会 1972 『おぼたけ遺跡発掘調査報告』…第4次一
62. 加納俊介 1981 『出土土器の編年位置Ⅰ・Ⅱについて』『月の輪遺跡群』富士宮市教育委員会
63. 大村 直 1982 『前野町・五郎氏の再評価』『神谷原Ⅲ』八王子市埋蔵文化財調査会
64. 都築みどり 1984 『元屋敷上墓の再検討』『南山考古第2号』 南山考古学会
65. 浜松市教育委員会 1983 『西幡江中平遺跡』
66. 浜松市遺跡調査会 1982 『椿野遺跡』
67. 浅羽町教育委員会 1983 『青木、馬場第1、第2遺跡』
68. 掛川市教育委員会 1983 『行人塚遺跡』
69. 菊川町教育委員会 1983 『一沢西原遺跡』
70. 佐藤市起男 1980 『弥生時代後期の集団関係』『静岡県考古学研究』9 静岡県考古学会
71. 鈴木敏則 1983 『二之宮式土器について』『森町考古』18 森町考古学研究会
72. 柴田 稔 1984 『中遠地区の弥生後期の土器』『静岡県考古学研究会シンポジウム』V 静岡県考古学会
73. 加藤・大橋 1955 『西方河川改修工事における採集遺物(上)』『森町考古』9 森町考古学研究会
74. 焼津市教育委員会 1982 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』
75. 磐田市教育委員会 1981 『御殿二ノ宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』
76. 藤枝東高等学校史学部 1956 『制』7、8合併号一般河下敷田遺跡発掘調査報告特集号一
77. 杉原征介 1954 『静岡県静岡市曲金遺跡』『日本考古学年報』2
78. 久永春男 1956 『東海』『日本考古学講座』4、河出書房
79. 榎原考古学研究所 1976 『纏向』
80. 藤枝市教育委員会 1981 『上蔵田モミダ遺跡、上蔵田川の丁遺跡、長内遺跡』『国道1号線バイパス(藤枝地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』第6冊
81. 袋井市教育委員会 1983 『玉越遺跡』『一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査その3報告書』

82. 安達・木下 1974 「成島地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60巻2号
83. HUII一郎 1981 『元島名符軍塚古墳』高崎市教育委員会
84. 藤枝市教育委員会 1984 『若王子・釣瓶塚古墳群』
85. 春林院古墳調査委員会 1966 『春林院古墳』
86. 磐田市教育委員会 1974 『遠江日性寺貝塚の研究』
87. 掛川市教育委員会 1970 『高代山古墳群』
88. 吉岡伸夫 1983 「曹ヶ谷横穴群」『遠江の横穴群』静岡県内横穴分布調査報告書Ⅰ、静岡県教育委員会
89. 袋井市教育委員会 1984 『長者平遺跡』
90. 中嶋郁夫 1983 「静岡県考古学会シンポジウム資料Ⅵ」
91. 比田井克仁 1980 「古墳発生時における小型高塚について（試論）」『金鈴』22号 早稲田大学考古学研究会
92. 三重県教育委員会 1973 「伊勢市上地町・中薬山遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告8』
93. 後藤守一編 1939 『静岡県磐田郡松村山古墳発掘調査報告』
94. 浜北市教育委員会・浜名高等学校 1969 『赤門上古墳』
95. 榎原考古学研究所 1980 『発志院遺跡』
96. 掛川市教育委員会 1981 『各和倉塚古墳一測量調査報告書』
97. 掛川市教育委員会 1979 『瓢箪古墳 測量調査報告書一』
98. 猿投遺跡調査会 1974 『伊保遺跡』
99. 向坂鋼二 1978 「西部の現状と問題点」『静岡県考古学シンポジウム』Ⅰ
100. 吉岡伸夫 1983 「歴史的條件」『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報一板尻遺跡第3次調査一』袋井市教育委員会他
101. 佐原 真 1983 「食器における共用器、銘々器、個人器」『文化財論叢』奈良文化財研究所、同朋舎
102. 辰巳和弘 1978 「静岡県中部における群集墳分析の一視点」『静岡県考古学研究』4 静岡県考古学会

写 真 图 版



坂尻遺跡地形全景





3A～3C区
発掘調査前 全景



2・3J～2・3G区
発掘調査前 全景



2A～2J区 試掘調査状況



2 A ~ 2 D 区完掘全景 (国道北側・西から)



2 D ~ 2 B 区完掘全景 (国道北側・東から)



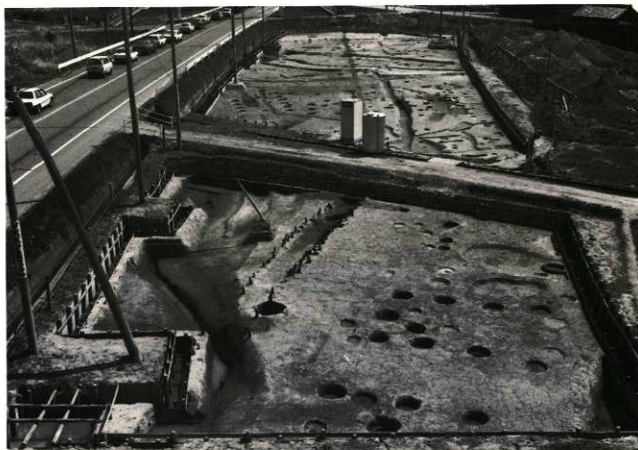
3 A ~ 3 D 区完掘全景 (国道南側・西から)



3 D ~ 3 A 区完掘全景 (国道南側・東から)



2・3G～2・3J区完掘全景（国道南側・西から）



2・3F～2・3J区完掘全景（国道南側・西から）



KSD1 遺構検出状況(北から)



KSD1 遺構検出状況(東から)

KSD7
遺物出土状況



KSD7
遺物出土状況



KSD7
完掘状況
(東から)





KSD8A 遺構検出状況 (第1面)



KSD8A 遺物出土状況 (第1面)



KSD 8A 遺物出土状況 (第2面)



KSD 8A 完掘状況 (東から)



KSD 9 遺構検出状況（東から）



KSD 9・10・11 完掘状況



KSD 9 A 遺物出土状況（北から）



KSD 9 B 遺物出土状況（東から）



KSD9D 遺構検出状況



KSD9 完掘状況 (北から)

KSD10
完掘状況
(南から)



KSD11
KSD12
完掘状況
(北東から)



KSD13
KSD14
KSD15
完掘状況(東から)





KSD17 遺物出土状況



KSD16・17 遺構検出状況（東から）



K S D 17 遺物出土状況



K S D 16・17 完掘状況 (南から)



K S D 14・16 遺構検出状況 (北から)



K S D 16 遺物出土状況



2F・3F区 遺構検出状況 (東から)



KSD8B 完掘状況 (東から)



KSD20 遺物出土状況



KSD18 遺物出土状況



KSD19・20 遺構検出状況 (東から)

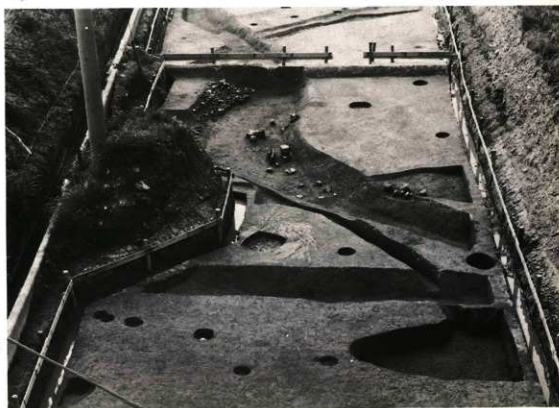
KSD23
遺物出土状況
(第1面)



KSD23
遺物出土状況
(第2面)



KSD21
KSD23
KSK14
遺構検出状況
(東から)





K S D 21 遺構完掘状況（北東から）



K S D 23・24 完掘状況（北から）



KSD 25A 遺構検出状況 (南から)



KSD 25A 遺物出土状況 (北から)



KSD 25A 遺物出土状況（東から）



KSD 25A 遺物出土状況

PL. 25

KSD25A
遺物出土状況





KSD26 遺物出土状況



KSD26 遺構検出状況



3B区遺構検出状況（東から）

PL. 27

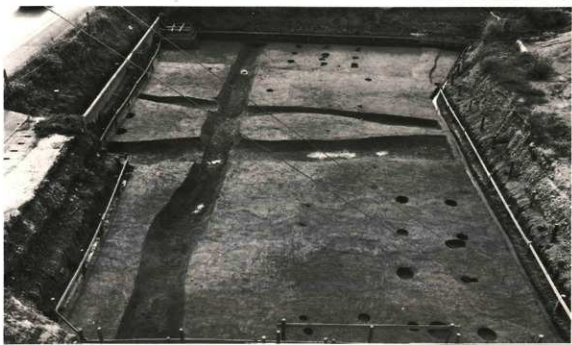
KSD27A
遺物出土状況
(北から)



2A・B区
KSD27
遺構検出状況
(東から)



2A・B区
KSD27・28
完掘状況





KSD27A
遺物出土状況

(北から)



(東から)



KSD27A 坏類出土状況

KSD27
KSD28
完掘状況
(北から)



KSD27B
遺物出土状況
(第1面)



KSD27B
遺物出土状況
(第2面)





2 A・B区 K S X 10・K S D 29遺構検出状況 (東から)



2 B・C区 K S D 29遺構検出状況 (東から)

3D区
遺構検出状況
(東から)



KSH1
KSK12
遺構検出状況



KSH1
遺構検出状況
(南から)



KSK12
遺構検出状況



KSH1
遺物出土状況





K S I 2
遺構検出状況
(北から)



K S I 3
遺構検出状況
(東から)



K S I 4
遺構検出状況
(南から)

KSH 4
KSH 5
遺構検出状況
(北から)



KSH 4
KSH 5
遺構検出状況



KSH 5



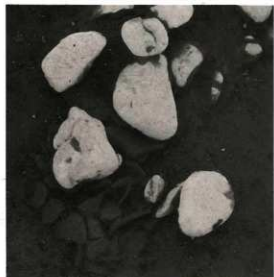
KSH 4



KSK16・KSH2・3遺構検出状況（西から）



KSH6遺構検出状況（北から）



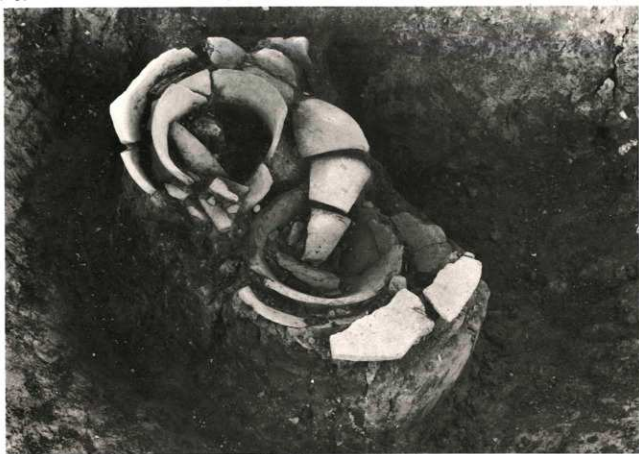
K S I 6 遺物出土状況



K S I 6
完掘状況

豎穴狀遺構
遺物出土狀況





K S K 5 遺物出土状況



K S K 24 遺物出土状況

土壇状遺構
遺構遺物出土状況



KSK 8



KSK 8



KSK 11



KSK 15



K S K 13・14遺構検出状況（東から）



K S K 13遺物出土状況

K S K 21
遺物出土状況
(西から)



3 B区
遺構検出状況
(東から)



KSK22
KSK23
KSP13
遺物出土状況



KSK22



KSK23



KSP13



小穴遺構
遺物出土状況



KSP 7



KSP 2



KSP 8



KSP 11

KSD11
完掘状況
KSX2
遺物出土状況
(北から)



KSX2
遺物出土状況





K S X 2
遺物出土状況
(西から)



K S X 2
遺物出土状況





K S K 9 遺物出土状況



K S K 10 遺物出土状況



K S X 3・10遺構・遺物出土状況（西から）



K S X 3・10遺構・遺物出土状況（南西から）